

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

VIII

市営長吉長原東住宅建設に伴う
発掘調査報告書

2002. 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

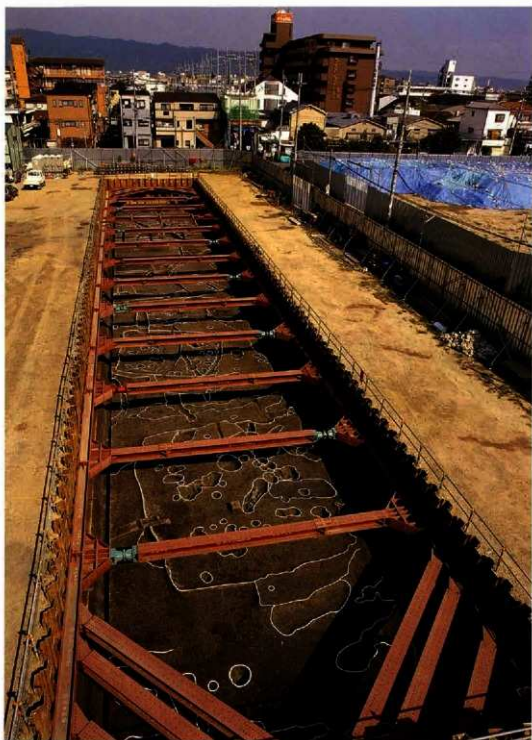
長原遺跡発掘調査報告

VIII

市営長吉長原東住宅建設に伴う
発掘調査報告書

2002. 3

財団法人 大阪市文化財協会



古墳時代の遺構

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

VIII

市営長吉長原東住宅建設に伴う
発掘調査報告書

2002. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

『長原遺跡発掘調査報告』のシリーズも第8冊目を刊行する運びとなった。広い範囲に及ぶ長原遺跡は、地域によって立地環境にも差異があるため、8つの小地区に分割して調査・研究を進めている。本書はこのうち東地区を対象とした調査報告書であるが、これまで東地区の成果を報告で紹介する機会がなかったため、本書はその嚆矢となる。

東地区は、当協会が発掘調査を開始した当初から、韓式系土器などの朝鮮半島との交流を示す古墳時代の遺物が豊富に出土し、注目を集めてきた。本書でも同様の遺物を多く収録しており、彼地との交流の古さが改めて想起される。日韓新時代の幕開けといわれる本年に本書を刊行できたということは、小さいながらも意義の深いことであると考えている。

また、弥生時代についても、当時の集落の中心はこの東地区にあり、こちらも豊富な調査成果が上がっている。このように、東地区に各時代の集落が営まれたということは、台地と沖積平野の境目にあたるこの周辺が、原始の頃から暮らしやすい地形・自然環境に恵まれていたことの証左であろう。

本書が地域史や古代の国際交流を研究するための一材料となり、相互理解の深化に資することがあれば喜びである。

本書収録の調査成果は、地元市民の皆さまや、大阪市住宅局をはじめとする関係諸機関の御理解と御協力の賜であり、深く謝意を表する次第である。

2002年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1999年度に実施した、大阪市住宅局による平野区長吉長原東1丁目8、市営長吉長原東住宅建設に伴う発掘調査(NG99-15次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査は財団法人大阪市文化財協会調査部長永島輝臣・同調査部調査課長京嶋覚の指揮のもと、同調査部調査課調査員高橋工・池田研(当時)が行った。調査の期間は平成11年6月3日から平成11年11月5日で、調査面積は840㎡である。本書の編集は、調査研究部長永島・同部調査課長京嶋の指導のもとに、調査課調査第2係長高橋が行い、同部研究副主幹田中清美・高橋・同部調査課学芸員絹川一徳・池田研・大庭重信が分担して行った。分責は担当個所の文末に示した。英文目次・要旨の作成は調査研究部調査課調査第1係宮本康治が行った。
- 一、遺物写真の撮影は内田真紀子氏に委託した。遺構の写真は、調査担当の高橋・池田が撮影した。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は大阪市住宅局が負担した。
- 一、本調査の基準点測量・空中写真測量は株式会社かんこうに委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて大阪市文化財協会が保管している。

凡 例

1. 本書で採用した長原遺跡の地区割(図1)は[大阪市文化財協会1999a]で示したものを踏襲している。本書収録の発掘調査は、このうちの長原遺跡東地区で行われたものである。一方、本協会発行報告書の別シリーズに「長原遺跡東地区発掘調査報告」があるが、この場合の東地区は、大阪市長吉東地区区画整理事業が施行される地域を示しており、遺跡としての地区割とは無関係である。
2. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については[趙哲済1995]に準じる。また、長原遺跡標準層序との対比は[趙哲済1995]に、長原遺跡東北地区基本層序との対比は[高橋工1999b]に依拠した。長原遺跡標準層序の表記は本文中では長原〇層、表中ではNG〇層とし、長原遺跡東北地区基本層序の表記はRK〇層とした。
3. 遺構名の表記は、まず、堅穴住居・掘立柱建物(SB)、井戸(SE)、溝(SD)、土壇(SK)、柱穴(SP)、自然流路(NR)、石器集中部(LC)、その他(SX)の分類記号を冠した。その後、調査地の層序に対応させて層序番号を冠し、次いで遺構の分類別に1からの通し番号を付した。
4. 本書における遺物番号は、1からの通し番号を付けた。また、旧石器～弥生時代の石器遺物については同遺物を個別管理するために別番号を付けている。石器遺物に共通して付される99AAはNG99-15次調査を、それに続く番号は現場での取り上げ番号を示している。
5. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿入図中では「TP±〇m」と記した。
6. 本書で用いた座標値は国土平面直角座標(第Ⅱ系)に基づくものである。また指北記号は座標北を示している。
7. 本書で用いた土器編年や器種分類は次の文献によっている。弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器：[田辺昭三1966・1981]、庄内期から古墳時代の前半期の土師器：[米田敏幸1989]、古墳時代後半期の土師器[京嶋寛1993a・田中清美1999a]、飛鳥～奈良時代の土器：[佐藤隆2000]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、鎌倉・室町時代の土器：[鈴木秀典1982]。本文中では煩雑を避けるため、これらの文献をその都度提示していない。
8. 本書の地層断面図・柱状図で用いた岩相の基本パターンは[趙哲済1995]のそれに準拠している。
9. 本書では土器様式である庄内式を時期名として扱って庄内期とし、弥生時代終末に位置付ける。
10. 註は各節末に、引用・参考文献は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1) 調査に至る経緯	1
2) 調査の経過	2
第2節 調査地周辺の立地と既往の調査	4
1) 調査地の立地	4
2) 長原遺跡東地区における既往の調査	6
第Ⅱ章 調査地の層序	11
第1節 地層	11
第2節 各層出土の遺物と地層の年代	15
1) 第2～4層出土遺物	15
2) 第6層出土遺物	15
3) 第7-1層出土遺物	17
4) 第7-3層出土遺物	25
5) 第8層以下の地層出土遺物	26
6) 各地層の年代	26
第Ⅲ章 各時代の調査成果	29
第1節 縄文時代の遺構と遺物	29
1) 石器集中部	29
2) 石器遺物	30
3) 自然流路	33
第2節 弥生時代の遺構と遺物	34
1) 建物	35
2) 井戸	38
3) 土塙	45
4) 溝	51

	5)その他の遺構	67
	6)石製遺物	74
第3節	古墳時代の遺構と遺物	79
	1)建物	80
	2)土甕	87
	3)溝	97
	4)その他の遺構	101
	5)石製・土製遺物	107
第4節	飛鳥時代以降の遺構と遺物	108
	1)耕作に係わる遺構	108
	2)土器埋納遺構	110
第IV章	まとめ	111
	1)縄文時代	111
	2)弥生時代	112
	3)古墳時代	113
	4)飛鳥時代以降	115

引用・参考文献

あとがき・索引

英文要旨

原色図版目次

- 1 弥生・古墳時代の遺構
上:弥生時代の遺構(西から)
下:SK705(西から)

- 2 弥生・古墳時代の遺物
上:弥生時代の土器
下:古墳時代の土器

図版目次

- 1 順序(一) 第2~7層
上:調査区西部(南壁)
中:調査区中央部(南壁)
下:調査区東部(南壁)
- 2 順序(二) 第7~13層
上:調査区西部(南壁)
中:調査区中央部(南壁)
下:調査区東部(南壁)
- 3 縄文時代の遺構
上:調査区全貌(東から)
中:LC1101(南から)
下:LC1102(南から)
- 4 弥生時代の遺構(一)
上:調査区西部(南から)
中:SB801(東から)
下:SK802(西から)
- 5 弥生時代の遺構(二)
上:調査区東部(南西から)
下:SB802(南から)
- 6 弥生時代の遺構(三)
上:SD807(南東から)
下:SD807埋土断面(南東から)
- 7 弥生時代の遺構(四)
上:SE803(北東から)
中:SE805(北東から)
下:SE801(北東から)
- 8 弥生時代の遺構(五)
上:SE801(北から)
中:SK809(南から)
下:SK805(南西から)
- 9 弥生時代の遺構(六)
上:SX821(西から)
中:土器棺墓(検出状況、南から)
下:土器棺墓(墓を外した状況、南から)

- 10 古墳時代の遺構(一)
上:調査区中央部(南から)
下:調査区東部(南から)
- 11 古墳時代の遺構(二)
上:SB701(北から)
中:SB701墓・堀出し検出状況(南から)
下:SB701堀検出状況(西から)
- 12 古墳時代の遺構(三)
上:SB702・703(南から)
下:SB710(南から)
- 13 古墳時代の遺構(四)
上:SK705(北から)
中:SK705(南から)
下:SK705(東から)
- 14 古墳時代の遺構(五)
上:SK705遺物出土状況(西から)
中:SK705遺物出土状況(北東から)
下:SK705完掘状況(南から)
- 15 古墳時代の遺構(六)
上:SX724(南から)
中:SX724(西から)
下:SX721遺物出土状況(北から)
- 16 飛鳥時代の遺構
上:調査区全貌(西から)
下:SD601等(北から)
- 17 飛鳥・平安時代の遺構
上:SD601(東から)
中:SD601埋土断面(西から)
下:土器埋納遺構(北から)
- 18 縄文時代の石器遺物(一)
- 19 縄文時代の石器遺物(二)
- 20 弥生時代の遺構出土遺物(一)
- 21 弥生時代の遺構出土遺物(二)
- 22 弥生時代の遺構出土遺物(三)

23	弥生時代の遺構出土遺物(四)
24	弥生時代の遺構出土遺物(五)
25	弥生時代の遺構出土遺物(六)
26	弥生時代の遺構出土遺物(七)
27	弥生時代の遺構出土遺物(八)
28	弥生時代の遺構出土遺物(九)
29	弥生時代の石器遺物
30	弥生・古墳時代の石器遺物
31	古墳時代の遺構出土遺物(一)

32	古墳時代の遺構出土遺物(二)
33	古墳時代の遺構出土遺物(三)
34	古墳時代の遺構出土遺物(四)
35	古墳時代の遺構出土遺物(五)
36	古墳時代の遺構・包含層出土遺物(一)
37	古墳時代の遺構・包含層出土遺物(二)
38	各時代の遺構・包含層出土遺物
39	古墳時代出土遺物

挿 図 目 次

図1	長原遺跡の地区割と周辺道路	1
図2	調査区的位置	2
図3	長原遺跡周辺の地形分類図	4
図4	長原遺跡東地区地質柱状図	5
図5	出戸自然堤防地質柱状図	6
図6	長原遺跡東地区の調査状況	7
図7	調査区南壁地層断面図	折込
図8	第2～4層出土遺物実測図	15
図9	各層出土の遺物(須恵器)実測図(1)	18
図10	各層出土の遺物(須恵器)実測図(2)	19
図11	各層出土の遺物(土師器・韓式系土器)実測図(1)	20
図12	各層出土の遺物(土師器・韓式系土器)実測図(2)	21
図13	各層出土の遺物(弥生土器)実測図	25
図14	縄文土器実測図	29
図15	縄文時代の遺構	30
図16	石器の出土状況	30
図17	縄文時代の石器実測図(1)	31
図18	縄文時代の石器実測図(2)	33
図19	弥生時代の遺構	34
図20	SB801等実測図	35
図21	SB801・802出土遺物実測図	36
図22	SB802実測図	37
図23	SP886出土遺物実測図	37
図24	SB803実測図	38
図25	弥生時代井戸実測図	39
図26	弥生時代井戸出土遺物実測図	41
図27	SE803出土遺物実測図	43
図28	SE805出土遺物実測図	44
図29	SE806と出土遺物実測図	45

図30	SK802実測図	46
図31	SK802出土遺物実測図	47
図32	SK805・809実測図	48
図33	SK805出土遺物実測図	49
図34	SK806・807実測図	49
図35	SK809出土遺物実測図	50
図36	SK810実測図	51
図37	SD807実測図	52
図38	SD807出土遺物実測図(1)	53
図39	SD807出土遺物実測図(2)	55
図40	SD807出土遺物実測図(3)	57
図41	SD807出土遺物実測図(4)	59
図42	SD807出土遺物実測図(5)	61
図43	SD807出土遺物実測図(6)	63
図44	SD807出土遺物実測図(7)	65
図45	SD807出土遺物実測図(8)	66
図46	SX816実測図	68
図47	その他の遺構出土遺物実測図	68
図48	SX821実測図	69
図49	SX821出土遺物実測図	69
図50	SX832出土遺物実測図	70
図51	SX841実測図	71
図52	土器棺墓実測図	72
図53	土器棺構成土器実測図	73
図54	弥生時代の打製石器実測図(1)	75
図55	弥生時代の打製石器実測図(2)	76
図56	石廬丁実測図	77
図57	弥生時代の磨製石器実測図	78
図58	古墳時代の遺構	79
図59	SB701出土遺物実測図	80
図60	SB701実測図	81

図61	SB702・703出土遺物実測図	82	図75	SX702出土遺物実測図	102
図62	SB702・703実測図	83	図76	SX704・724実測図	103
図63	SB705・709実測図	84	図77	SX706出土遺物実測図	103
図64	SB704・SD709実測図	85	図78	SX718出土遺物実測図	104
図65	SB710実測図	86	図79	SX721・724出土遺物実測図	105
図66	SK705実測図	88	図80	古墳時代石製品・土製品実測図	106
図67	SK705出土遺物実測図(1)	89	図81	飛鳥時代の遺構出土遺物実測図	108
図68	SK705出土遺物実測図(2)	92	図82	飛鳥時代の遺構実測図	109
図69	SK705出土遺物実測図(3)	93	図83	土器埋納遺構・出土遺物実測図	110
図70	SK705出土遺物実測図(4)	96	図84	各時期の遺構	111
図71	SD701実測図	97	図85	長原遺跡東地区周辺縄文時代遺物発見地点	112
図72	SD714・718出土遺物実測図	98			
図73	SD705・706・717等実測図	99	図86	弥生時代中期から古墳時代中期の出戸自然堤防	114
図74	SD717出土遺物実測図	100			

表 目 次

表1	長原遺跡東地区における主な調査	8-9	表3	長原遺跡の標準層序	13
表2	調査地の層序	12	表4	長原遺跡東北地区の基本層序	14

写 真 目 次

写真1	縄文土器	29
-----	------	----

第Ⅰ章 発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1) 調査に至る経緯

大阪市都市整備局は老朽化した市営住宅の建替え工事を順次進めてきている。平成10年秋頃から平野区長吉長原東1丁目における長吉長原東住宅の第5期建設工事が予定され、都市整備局建設部設計課と大阪市教育委員会文化財保護課との間で埋蔵文化財保護に係わる協議が行われてきた。過去、次章に述べるように隣接する地点で行われた発掘調査で、弥生時代から古墳時代にかけての住居や墳墓



図1 長原遺跡の地区割と周辺道路

が検出され大量の遺物が出土したことがあるため、当該地周辺は、この時期における遺跡の中心部と目されていた。したがって、こうした埋蔵文化財が工事により破壊を余儀なくされる敷地南半部の住棟に当たる部分を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、周辺での調査結果から段丘層の埋没深度が現地地表下約4mであることから、当該深度まで安全に発掘調査ができるように、事前に土留工事を施工することも合意された。

その後、平成11年5月に都市整備局・教育委員会および当協会の3者による協議がもたれ、同年6月に着手することが決定した。着手に先立って、地元町会等への周知・説明等を終えた後、6月3日に準備作業に取りかかった。しかし、敷地内には電柱やガス・水道などの埋設管が機能したまま残存していたため、これらが完全に撤去されるまで、土留工事をはじめ発掘調査においてもさまざまな支障をきたすことになった。

一方、報告書作成については年度を改め後日協議することになっていたが、発掘調査が行われた翌年度に都市整備局・教育委員会との間で協議がもたれ、平成13年度中の作成・刊行が決定したため、平成13年4月2日から作成作業に入ることになった。(京嶋)

2) 調査の経過

上述のように、調査地における地山層(低位段丘構成層)は地下約4mに埋没していることが予想された。このため、後期旧石器時代の遺物を包含する可能性がある地山層までを安全に掘削できるように、矢板と切梁による土留めを行って調査を進めた。平成11年6月3日より進入口の整備や矢板の打設などの準備工に着手し、同年(以下省略)6月30日に同工程を終了した。翌日より重機による表土の掘削を開始し、発掘調査に着手した。調査区は、東西長70m、南北幅12mで、調査面積は840m²である(図2)。

地層ごとに検出される遺構の分布密度に大きな差があることが予想されたため、遺構分布が濃密な

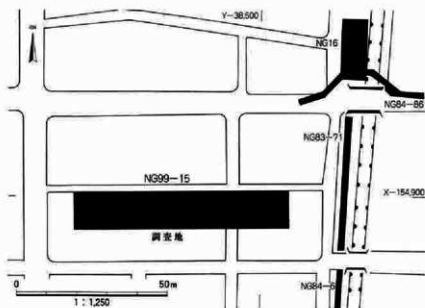


図2 調査区の位置

飛鳥・古墳・弥生時代の地層(NG7A～8層)と遺構検出面は調査区の全面を調査し、作土層で構成される江戸～奈良時代(NG2～6層)と、おもに河成堆積層からなる縄文時代(NG9B層)以下の地層については調査区の幅を5mに狭めて調査した。掘削は、現代～江戸時代の地層(NG0～2層)と縄文時代晩期～中期の地層(NG9B～10・11層)

については重機を用い、そのほかは人力で行った。各層の遺構検出面を精査、遺構を掘削し、適宜、実測図の作成・写真撮影を行って、10月6日に発掘調査の工程を終了した。その間、7月23・24日には切梁の架設工事を行った。9月10日と23日には空中撮影による写真測量を行った。10月7日からは埋戻し・矢板の撤去等の復旧工事を行い、11月5日にはすべての作業を終了した。

(高橋)

第2節 調査地周辺の立地と既往の調査

1) 調査地の立地

長原遺跡は大阪市平野区の東南部に位置し、東西・南北ともに約2kmの範囲に分布する(図1)。一つの遺跡としてみれば、広範囲にわたること、地域によって立地する地形環境に差が大きいことから、1999年より8つの地区に分割した地区別を採用してきている[大阪市文化財協会1999a]。本調査地は、このうちの長原遺跡東地区の北辺に位置する(図1・6)。

長原遺跡の立地環境は、瓜破台地と呼ばれる河内台地から北に張出した台地の和川以北の部分の北東の縁辺部と、その北から東にかけて展開する沖積平野に跨っている(図3)。長原遺跡の地山層である段丘構成層は、南西から北東に向って分布高度を減じており、遺跡の西・西南・中央などの各地区(図1)では地山の埋没深度は比較的浅いが、東地区や東北地区では分厚い沖積層の下に地山が潜込んでいる。

一方、沖積平野には幾筋もの自然堤防がみられる。瓜破台地の東方約4kmには長瀬川の河道が北西に流れ、その周囲には自然堤防が形成されている。長原遺跡の北側にもほぼ東西方向に延びる自然堤防が存在する。これは縄文時代以降の平野川に由来するものと考えられ、八尾市の植松町付近で長瀬川から西西南方向へ分岐、蛇行した後、北北西に向っている。これは後述する亀井自然堤防の後身と考えられる。瓜破台地の東縁でほぼ南北に延びる自然堤防は旧東除川によって形成されたもので、近世以降に降る。

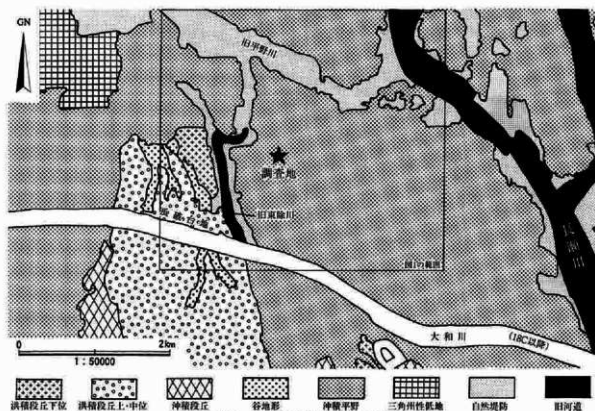


図3 長原遺跡周辺の地形分類図

長原遺跡周辺の遺跡としては、北に接する八尾市域には、旧平野川の自然堤防上にあるかたちで、西から竹園・亀井・跡部・太子堂・植松の諸遺跡が展開し(図1)、さらにその北側には久宝寺遺跡、JR久宝寺駅東方には淡川廃寺遺跡が立地している。長原遺跡東側の沖積平野には、同じく八尾市域の木の本・老原遺跡が立地する。南東部に接して八尾南遺跡が存在し、これは瓜破台地の縁辺部からその東側の沖積平野に跨って立地している。西に接した大阪市域の瓜破台地上には、喜連東遺跡と瓜破遺跡がある。

次に、長原遺跡東地区の地形環境を地山の地勢と縄文時代以降に堆積して大きな地形の変化をもたらした堆積層に注目して概略を記す。長原遺跡東地区における地山の標高は、もっとも瓜破台地寄りの西南隅のNG1次調査地でTP+8.4mであるが、東端部付近のNG00-11次調査地では同5.8m、北部の本調査地では同5.2mで、やはり北と東に向かって低くなっている[大阪市文化財協会2002c]。こう

した状況から、東地区は、西南隅の一部が丘陵縁辺部に近いほかは、ほとんどの範囲が沖積平野内に立地するとみてよい。この地域の地山層は、おもに縄文時代以降の堆積層によって覆われる。この中でもっとも厚く堆積し、主要な古地形を形成しているのは、地区内の西部では縄文時代晩期に比定される河成堆積層のNG9B層(RK10B層)[趙哲済1995・高橋工1999b]である。東部ではNG9B層に加え、弥生時代に比定されるNG8層と、飛鳥～鎌倉時代の作土層のNG6～4層(RK7A～4層)である。西部のNG9B層が特に厚く分布する個所では、同層の堆積によって縄文時代晩期には微高地が形成されたとみられ、これを[高橋工1999a]では出戸自然堤防(図5)と呼称した(註1)。この地形は南南東-西北西に主軸方向をとり、長さは約700m、幅は約250mで、NG7層下面と比較すると、周囲より0.2～0.3m高くなっていた。東部に比して西部にNG8層がほとんど堆積しないことは、この微高地に

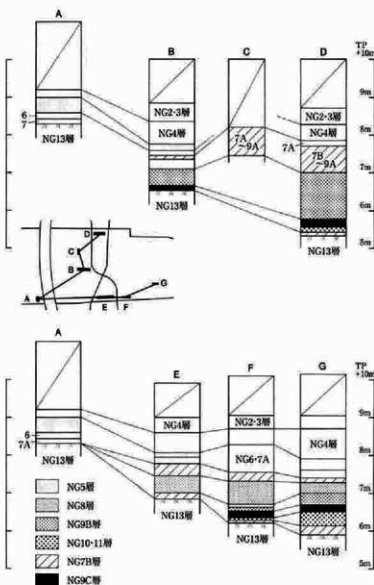


図4 長原遺跡東地区地質柱状図

A : NG89-25、B : NG89-86、C : NG87-67、D : 本調査地、
E : NG89-85、F : NG96-103、G : NG00-11

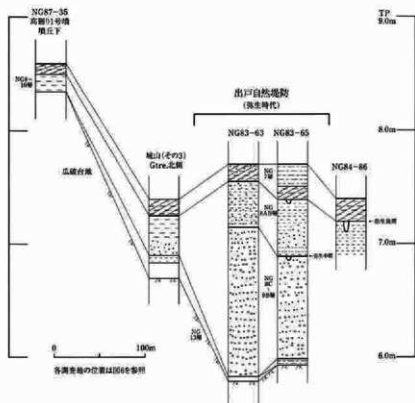


図5 出戸自然堤防地質柱状図

妨げられて、弥生時代の段階で分厚い河成堆積層を形成するような水流が西部に流入しにくくなったことが原因と考えられる。

出戸自然堤防が形成された頃には、沖積平野の北方、植松遺跡―跡部遺跡―亀井遺跡―竹淵遺跡を結ぶラインに亀井自然堤防が既に形成されていたとみられる。跡部遺跡第12次調査や竹淵遺跡第3次調査で分厚い河成堆積層上に弥生時代前期の遺構が発見されていることはこのことを裏付ける[八尾市文化財調査研究会

1996a・1993a]。瓜破台地・出戸自然堤防と亀井自然堤防に挟まれた地域は東西に長い帯状の低湿地が形成され、これを六反―出戸低地と呼称した[高橋1999a]。この低地が最終的に埋没し、平地化するのは中世頃とみられ、その間に耕作を受けながら堆積した泥質の堆積物が東地区東部に厚く分布するNG6～4層である。その結果、東地区東部は六反―出戸低地に含まれているのでNG6～4層が厚く堆積し、西部は出戸自然堤防にかかるためNG9・8層の段階で微高地化しNG6～4層の堆積が薄かったのである。

2) 長原遺跡東地区における既往の調査

長原遺跡東地区において現在までに行われた発掘調査は20件を数えるが、調査箇所は地区内の西半分に集中する。東地区と周辺の調査箇所は図6に示し、各調査の主な成果・参考文献は表1に掲げた。最初の調査は、市営地下鉄谷町線延伸工事(32工区駅舎部分)に伴うNG1次調査で、1974年に実施され、長原遺跡全体としても最初の調査である。この調査では塚の本古墳(長原1号墳)のほかに、5世紀後半の小方墳が発見された。翌年には下水道管の埋設に伴うNG2次調査(本調査地西約200m)が行われ、後に長原40号墳と命名される古墳や、それに伴う埴輪棺に転用された盾形埴輪と円筒埴輪などが発見されている[高井健司1990・桜井久之1991]。また1976～1977年には東地区の西に接する近畿自動車道の建設に伴う発掘が大阪文化財センターによって行われ、やはり多くの小方墳や中世の居館跡などが発見された。これら1970年代の調査の成果は、遺跡そのものの存在を確認したことと、平野に埋没した古墳群として長原古墳群の存在を世に知らしめたことである。



図6 長原遺跡東地区の調査状況

1980年代に東地区で実施されたNG83-63・65・84-6次などの発掘調査は、学校の施設建設に伴うNG87-67次調査を除けば、民間による小規模な宅地開発や、下水管埋設に伴う狭小な調査が主であった。一方、西に接する近畿自動車道建設関連では城山(その2・3)の調査が行われた。これらの調査では、弥生時代中・後期の居住地と、陶質土器や初期須恵器を伴う古墳時代中期の居住地や耕

表1 長原遺跡東地区における主な調査

調査	主な内容	文献
長原近畿自動車道	長原古墳群(前期末～中期)、中世前期敷地	大塚文化財センター1978
蛇山その2	弥生中・後期居住域、古墳中期水田・土壇、飛鳥～平安朝・水田	大塚文化財センター1986
蛇山その3	弥生土取り穴跡、飛鳥～中世水田	大塚文化財センター1986
NG1 (31工区)	弥生中期溝・土壇墓、古墳中期溝、飛鳥大溝	大塚市文化財協会1978
NG1 (32工区)	長原古墳群(前期末～中期)、埴輪埴	大塚市文化財協会1978
NG11	平安朝立柱礎物	大塚市文化財協会1982
NG16	弥生～古墳中期遺物多数、弥生溝、古墳前・中期溝・井戸	大塚市文化財協会1979
NG19	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1978
NG20	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1980
NG80-1	+7.2mで金倉溝	大塚市文化財協会1981b
NG82-4	飛鳥井戸、古代水田	大塚市文化財協会1983a
NG82-19	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1980a
NG82-26	縄文晩期遺物・中世水田	大塚市文化財協会1983b
NG82-48	古墳中期遺物	大塚市文化財協会1983c
NG83-11	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1984a
NG83-41	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1984b
NG83-54	+8.1mで砂層(長原5層か)	大塚市文化財協会1984c
NG83-63	縄文～金倉遺物、弥生中期土壇	大塚市文化財協会1984d
NG83-65	弥生中期遺物、古墳中期土壇状遺構	大塚市文化財協会1984e
NG84-4	古墳中期溝・土壇、古代水田、古墳時代砂層なし	大塚市文化財協会1985a
NG84-6	弥生中期～古墳中期遺物、古墳前期方形埴輪墓	大塚市文化財協会1985b
NG84-17	古代水田	大塚市文化財協会1985c
NG84-48	長原古墳群(中期)、古代水田、平安朝敷地	大塚市文化財協会1992b
NG84-49	7.7mで砂層	大塚市文化財協会1985d
NG84-86	弥生後期～古墳中期の遺物、古墳前期の井戸、建物、古墳中期の土壇	大塚市文化財協会1985e
NG85-17	縄文晩期の遺物	大塚市文化財協会1986a
NG85-18	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1986b
NG85-23	古墳中期遺物、長原七の坪古墳(後期)、古代水田、平安朝敷地	大塚市文化財協会1986c
NG85-34	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1993a
NG85-35	長原古墳群(塚の本古墳周囲)	大塚市文化財協会1986d
NG85-46	古代水田	大塚市文化財協会1986e
NG85-59	試験調査	大塚市文化財協会1993a
NG85-77	古墳中期土穴・溝	大塚市文化財協会1993a
NG86-16	長原七の坪古墳埋丘(後期)	大塚市文化財協会1987a
NG86-20	古代水田	大塚市文化財協会1987b
NG86-24	長原古墳群(塚の本古墳周囲)、埴輪埴	大塚市文化財協会1987c
NG86-36	古代水田、古墳中期溝	大塚市文化財協会1993b
NG86-54	長原古墳群(中期)、古代水田、平安朝敷地	大塚市文化財協会1993c
NG86-55	中・後世浄土層	大塚市文化財協会1987d
NG86-56	古代水田	大塚市文化財協会1987e
NG86-58	長原古墳群(中期)、古代水田、平安～鎌倉期敷地	大塚市文化財協会1993d
NG86-60	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1993d
NG86-66	長原古墳群(中期)	大塚市文化財協会1987f
NG86-67	古代水田	大塚市文化財協会1993e
NG86-79	古代水田、弥生(7)溝	大塚市文化財協会1987g
NG86-90	古墳中期墓、古代水田、平安朝敷地	大塚市文化財協会1993e
NG86-109	古代水田	大塚市文化財協会1991・1992c
NG87-8	弥生後期～古墳中期遺物	大塚市文化財協会1988a
NG87-26	古代水田、古墳前期土壇跡	大塚市文化財協会1988b
NG87-27	長原古墳群(中期)、古代水田	大塚市文化財協会1994
NG87-35	弥生～古墳前期、塚土壇、長原高瀬り1・2号墳、古代水田(奈良～中世集落)	大塚市文化財協会1991・1992c
NG87-39	古代水田、古墳前期土壇跡	大塚市文化財協会1994
NG87-40	古代水田、中世土穴	大塚市文化財協会1994
NG87-54	古墳中期墓、古代水田	大塚市文化財協会1994
NG87-56	古代水田、中世溝	大塚市文化財協会1988c
NG87-67	弥生中・後期居住域、弥生後期大溝、古墳中期土壇	大塚市文化財協会1988d
NG87-69	古代水田、平安朝	大塚市文化財協会1994
NG87-70	古代水田とその水路	大塚市文化財協会1988e
NG87-81	古代水田、古墳前期土壇跡	大塚市文化財協会1988f

表1 長原遺跡東地区における主な調査(続き)

NG88-18	塚の本古墳跡	大阪市文化財協会1989b
NG88-20	古墳中層集落、古代水田	大阪市文化財協会1995
NG88-27	古代水田	大阪市文化財協会1995
NG88-41	古代水田、平安土壇	大阪市文化財協会1989c
NG89-5	古代水田	大阪市文化財協会1990b
NG89-25	古墳中層穴住居・竪立建物、溝、橋、古代水田	大阪市文化財協会1990c
NG89-85	縄文石器・土器、縄文・弥生流路、古代水田	大阪市文化財協会1990d
NG89-86	弥生中層穴住居、焼鳥居、古代水田	大阪市文化財協会1990e
NG90-37	長原古墳群(中期)・古代水田	大阪市文化財協会1997a
NG91-63	平安～鎌倉集落	大阪市文化財協会1992d
NG92-39	弥生中層住居・大溝、弥生後期溝、古墳中層井戸・柱穴、古代水田	大阪市文化財協会1993c
NG92-97	縄文石器、弥生流路、弥生後期溝・土器溜まり、古墳中層土器・石製品溜まり	大阪市文化財協会1993d
NG93-8	塚の本古墳墳丘	大阪市文化財協会1999b
NG94-4	縄文石器・土器、古墳前期末流路、奈良～平安集落、古代水田	大阪市文化財協会1999c
NG95-36	縄文流路、弥生中層方形副溝墓・土器埋納土壇、弥生後期穴住居・大溝、古墳中層集落、焼鳥居	大阪市文化財協会1996
NG96-103	弥生・古墳	大阪市文化財協会1997b
NG97-56	縄文石器、平安土壇、流路	大阪市文化財協会2000
NG98-19	古墳中層水田・盛土遺構	大阪市文化財協会2001a
NG98-20	古墳中層水田・盛土遺構、平安流路	大阪市文化財協会2001a
NG99-15	本遺跡跡	
NG99-19	縄文土壇、弥生水田、古墳水田	大阪市文化財協会2002a
NG99-41	旧石器、縄文住居(?)・古墳前期水田、古代水田	大阪市文化財協会2002a
NG00-6	古墳中層水田・盛土遺構、奈良～平安集落、平安流路	大阪市文化財協会2001b
NG00-11	縄文石器、古墳後期水田、古代水田	大阪市文化財協会2002c
NG01-32	赤宮佐田遺跡に伴い、現在調査中	
八尾市教委81年	古墳中層集落、古代水田	八尾市教育委員会1983
SK92-70	試掘調査	八尾市教育委員会1993
YS84-3	古墳中層集落・水田	八尾市文化財調査研究会1985a
YS84-4	弥生後期溝、古墳中層遺跡	八尾市文化財調査研究会1985b
YS87-6	±8.1m前後で古墳中層遺構面	八尾市文化財調査研究会1987
YS87-7	古墳面～後期水田・後期水田、古代水田	八尾市文化財調査研究会1988
YS87-10	古墳中層集落・水田、古代水田	八尾市文化財調査研究会1989a
YS88-11	弥生後期～古墳前期遺構	八尾市文化財調査研究会1989b
YS89-16	古墳前期土器、古墳中層流路	八尾市文化財調査研究会1990
YS92-18	古墳中層集落、古代水田	八尾市文化財調査研究会1993
YS93-19	古墳中層集落	八尾市文化財調査研究会1994b
YS96-22	弥生後期・古墳中層遺構	八尾市文化財調査研究会1996b

NG:長原遺跡、SK:水の本遺跡、YS:八尾南遺跡

作地・土取り穴などの遺構が発見された。こうした遺構の存在は1974年NG1次調査の31工区でも検出されていたが、それが東地区の西半部にかんがりの拡がりをもって展開するという予測が得られたことは1980年代の調査における大きな成果であった。

1980年代末から現在に至る期間は、本調査地も含め、市営住宅の建替工事に伴う発掘調査が9件行われてきている。これらの調査では、既に知られていた弥生時代中・後期と古墳時代中期の集落の範囲をほぼ把握できたことが主要な成果である。それによれば、弥生・古墳時代の居住域は、各期で範囲に若干の違いはあるものの、NG92-97次調査地をほぼ南限とし、東は本調査地のやや東を、西は近畿自動車道をそれぞれ限界とし、城山その1調査地南部付近を北端とする南北700m、東西300mの拡がりをもつことが明らかになったのである。そして、その範囲は戸戸自然堤防の範囲にほぼ等しいこともわかっている。

また、近隣の遺跡中央・南・東南地区で長吉瓜破地区土地区画整理事業が、東北地区で長吉東部地区土地区画整理事業が施行されて発掘調査件数が増加し、東南に接する八尾市域でも発掘調査の件数

が増加した。このように周辺地区も含めて調査成果が豊富に蓄積され、居住域、生産域、墓域を含めた集落の動態、地質データに基づく古地形の復元など、遺跡に関する総合的な理解が可能となり、その方面の研究成果が発表されてきている[京嶋覚1990・1993b・高橋工1999a・大庭重信1999]。

(高橋)

註)

- (1)[高橋工1999a]では、この微高地をおもに形成する堆積層はNG8C層と考えたが、NG83-63次調査や本調査地で分厚い河成堆積層上から縄文晩期の長原式土器が出土することが判明したため、NG9層の段階ですでにこの微高地のかなりの部分は形成されていたものとするに至った。

第Ⅱ章 調査地の層序

第1節 地層

調査地の現地表面の標高は+10m前後で、地表下約6mまでに以下の地層が堆積していた(図7、図版1・2)。

第1層：現代の盛土と作土である。盛土の層厚は平均で120cmほどで、作土はほとんどが割剥されており、層厚は最大でも12cmである。

第2層：暗オリーブ灰色細粒砂混りシルトからなる作土層で、層厚は約25cmである。最大2層に分層された。

第3層：オリーブ灰色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は約15cmである。最大2層に分層され、下位層(第3-2層)の一部にはやや暗色化しているところがあった。

第4層：オリーブ灰～灰色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は30～50cmである。最大3層に分層された(上から第4-1・2・3層)。基底面で平安時代の土器埋納遺構が検出された。

第5層：暗緑灰色シルトからなる水成層で、調査区の東端付近にのみ分布する。最大層厚は東端にあり、40cmである。砂質シルトの上層(第5-1層)と粘土質シルトの下層(第5-2層)の2層に分層された。

第6層：作土層(第6-1層)と水成堆積層(第6-2層)に分れ、後者は調査区西端付近にのみ分布する。第6-1層は灰色細粒砂混りシルトからなり、層厚は最大で30cmである。下面で飛鳥時代の畚が検出された。第6-2層はオリーブ灰色シルト質粘土からなり、層厚は最大で15cmである。第6-2層が下位に堆積し、第6-1層は第6-2層を耕起して形成されたものと考えられる。そして西側のやや低い部分にのみ水成堆積の第6-2層が耕起されずに残っていた。

第7層：オリーブ黒色細粒砂混りシルトからなり、暗色帯を形成する。層厚は平均で約40cmである。部分的に3層に細分することができた(上から第7-1・2・3層)。断面観察では各層の層中から遺構が掘込まれているのがわかったが、各層の層相が近似することから分層発掘することが困難であったため、任意に分層発掘を行い、基底面付近で2回に分けて遺構検出を行った。次章で述べる古墳時代の遺構は1回目、弥生時代の遺構の多くは2回目の遺構検出で発見された。

第8層：砂礫～シルトからなる河成堆積層である。層厚は最大で250cmである。調査区東半部を北流する自然流路を供給源とする。本流付近は黄灰色砂礫からなり、側方に向ってオリーブ色シルト～細粒砂に移化する。断面の観察から、本層は5回以上の氾濫によって形成されたことがわかった。

第9層：黒色シルト質粘土からなり、層厚は15～30cmである。2層に分層することができ、上層(第9-1層)は明瞭な黒色帯を形成し、下層(第9-2層)は下方に向って黒色から暗色帯に漸移する。

第10層：層厚が最大80cmの河成堆積層である。第8層と同様に調査区東半部を北流する自然河川を供給源とする。本流の中では灰色砂礫からなる。陸上部分ではオリブ灰色粘土に移化し、層厚は10cmである。陸上部分の本層の断面で、TP+5.65m付近で直線状に延びる厚さ0.5cmほどの灰色粘土が観察された。これは、地震による水平剪断とみられ、灰色粘土は断層粘土と考えられる。

第11層：黒褐色極細粒砂～シルト質粘土からなり、河成部分と陸成部分に分れる。2層に分層することが可能で、上層(第11-1層)の陸成部分は黒褐色極細粒砂～シルトで層厚5cm、東方の流路内の河成部分では暗褐色シルト質粘土で層厚は最大で30cm以上である。下層(第11-2層)の陸成部分は黒褐色細粒砂混りシルトで層厚3cm、河成部分では灰黄色粗粒砂で、層厚は最大で25cm以上である。

第12層：灰色シルトからなり、層厚は最大で15cmである。本層と第11層は著しく擾乱を受けており、第11層堆積後の植物の繁茂などによって、本来の累重関係をおおむね保ちつつ土壌化が進んだものと考えられる。本層と第11-1・2層から縄文土器片・サヌカイト剥片などが出土したが、このような堆積状況であるので、遺物の年代観から本来は上位層に帰属する遺物と考えられる。

第13層：かたくしまった灰白色粗粒砂混りシルトからなり、層厚は30cm以上である。

以上、観察された各層準の特徴と次節で述べる各層に含まれる遺物の年代観から、長原遺跡の標準層序[趙哲済1995](表3)と長原遺跡東北地区の基本層序[高橋工1999b](表4)との対比関係を表2に示した。

(高橋)

表2 調査地の層序

層 序	層 相	層 厚	特 徴	遺 物	長原東北地区標準層序	長原東北地区標準層序
第1層	後代堆土・作土	120				
第2層	1層 暗オリブ灰色細粒砂混りシルト	≦25	作土		NG2層	RK2層
2層	暗オリブ灰色細粒砂混りシルト	≦13	作土	肥前組器		
第3層	1層 オリブ灰色細粒砂混り粘土質シルト	≦15	作土			
2層	オリブ灰色粘土質シルト	≦15	作土	瓦器IV期	NG3層	RK3層
第4層	1層 灰色細粒砂混り粘土質シルト	≦26	作土	土加部平安石	NG4層	RK4A層
2層	オリブ灰色細粒砂混り粘土質シルト	≦15	作土		NG4層	RK4B層
3層	オリブ灰色細粒砂混り粘土質シルト	≦25	1土部堆積遺物 伊安町			
第5層	1層 暗緑灰色砂質シルト	≦18	水成		NG6層?	
2層	暗緑灰色粘土質シルト	≦20	水成			
第6層	1層 灰色細粒砂混りシルト	≦30	作土	1土部取り壊	土加部遺物	NG7A層
2層	オリブ灰色シルト質粘土	≦15	水成			
第7層	1層 オリブ黒色シルト質極細粒砂	≦35		▽型穴住居・母口など	相模原遺物	NG7B層
2層	オリブ黒色細粒砂混りシルト	≦10		▽型穴住居・孤立柱建物など	伊安IV期式	NG8A層
3層	オリブ黒色シルト質細粒砂	≦25				
第8層	灰黄色砂礫～オリブ色シルト	≦250	河成	1自然流路	NG9B層	RK10B層
第9層	1層 黒色シルト質粘土	≦10			北谷川上層式	NG9C層
2層	黒灰色シルト質粘土	≦25				
第10層	灰色砂礫～オリブ灰色粘土	≦80	河成	1自然流路	NG10・11層	RK11層
第11層	1層 暗褐色シルト質粘土～黒褐色極細粒砂～シルト	5～30<		ワ石置集中部	中層?～3期下層式	NG12層
2層	灰黄色粗粒砂～黒褐色細粒砂混りシルト	3～25<				
第12層	灰色シルト	≦15			NG12～13層	RK12～13層
第13層	灰白色粗粒砂混りシルト	>30			NG14層	RK14層

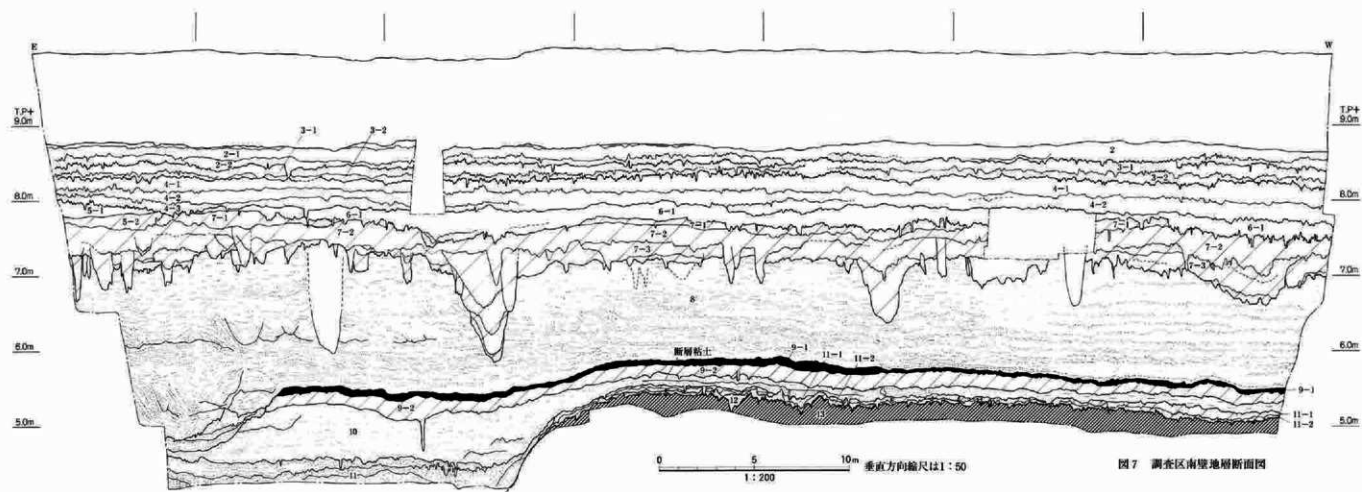


图7 调查区南壁地层断面图

表3 長原遺跡の標準層序

期 序	地質 地層	地 層	地層 年代	自然現象 自然現象の分布	おもな遺構・遺物	C14BP	時 代
上 地 層	NG00層	現代砂土	—	—	—	—	近代・現代
	NG1層	現代砂土	13-20	—	—	—	近代・現代
	NG2層	古墳時代前期～青銅色シムト質粘土	6-24	—	小倉遺構・遺物、青瓦・滑石・銅片・銅器・銅器など	1400	古墳
	NG3層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	15-30	—	小倉遺構・遺物、灰土	1400	古墳
	NG4A層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-15	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
	NG4B層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-30	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
	NG4C層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-30	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
	NG4D層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-30	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
	NG4E層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-30	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
	NG4F層	古墳時代前期～灰白色粘土質シムト	6-30	—	灰土（1層～2層）	—	古墳
中 地 層	NG5A層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5B層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5C層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5D層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5E層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5F層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5G層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5H層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5I層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG5J層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
下 地 層	NG6A層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6B層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6C層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6D層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6E層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6F層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6G層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6H層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6I層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳
	NG6J層	灰白色砂土・シムト質粘土質砂土を混在	10-30	—	古墳時代中期～後期	1300	古墳

表4 長原遺跡東北地区の基本層序

層序	地層 地層名	主たる岩相	厚さ (m)	自然現象 自然遺物・遺物	おもな遺構・遺物	模式地	地層学 上の対応	時代
KK2層		現代土						
KK1層		現代砂土	10-20				1	近代・現代
KK2層	1	オレンジ色砂礫・中粒砂礫系粘土質シルト	6-15	1小遺物				
	2	オレンジ色砂礫系砂質シルト	6-15	1小遺物				
	3	灰色土質シルト	6-15	1小遺物・植物	植物遺体 (KK6-62)	NGM-65層	2	江戸
KK3層	1	灰白色砂礫・粗粒砂礫系粘土質シルト	6-20	1小遺物・植物				
	2	黄褐色粘土質シルト	6-10	1植物遺体	中粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-67 NGM-9	3	
	3	灰白色砂礫系砂質シルト・黄褐色粘土質シルト	5-15					
	4	オレンジ色シルト・黄褐色砂礫	6-20	1小遺物	瓦器・IC土器 (KK6-62)			室町・鎌倉
KK4A層		黄褐色シルト・黄褐色砂礫・粗粒砂礫系粘土質シルト	15-20	1自然遺物	瓦器 (IC土器) (KK6-62)	NGM-70層 NGM-112 NGM-63	4A	
KK4B層	1	オレンジ色砂礫系粘土質シルト	6-15	1小遺物・植物	瓦器 (IC土器) (KK6-62)			
	2	オレンジ色砂礫系粘土質シルト	6-15	1小遺物・植物	瓦器 (IC土器) (KK6-62)			
	3	黄褐色粘土質シルト・粗粒砂礫	10	1小遺物・植物	瓦器 (IC土器) (KK6-62)	NGM-9	4B	
	4	黄褐色粘土質シルト・粗粒砂礫	10	1小遺物・植物	瓦器 (IC土器) (KK6-62)			
KK4C層	1	オレンジ色砂礫系砂質シルト	8	1自然遺物	中粒砂礫系 (KK6-62)			
	2	黄褐色粘土質シルト	5-8	1遺物				平安
	3	灰白色砂礫系砂質シルト	6-15	1遺物		NGM-40	4C	
	4	灰色土質砂礫系砂質シルト	6-15	1遺物				
	5	黄褐色粘土質シルト	6-16	1遺物	中粒砂礫系 (KK6-62)			
	6	灰白色砂礫系砂質シルト・粗粒砂礫	10	1小遺物・植物	中粒砂礫系 (KK6-62)			
	7	灰白色砂礫系砂質シルト	8-20	1遺物	中粒砂礫系 (KK6-62)			
KK5層		粗粒砂礫シルト・粗粒砂礫	6-15	1植物遺体		NGM-66	5A・5B・5A	奈良
KK6A層		粗粒砂礫・砂質シルト・粗粒砂礫	10	1植物遺体	2層・土層 粗粒砂礫系 (KK6-62)			
KK6B層		粗粒砂礫・砂質シルト・粗粒砂礫	10	1植物遺体	2層・土層 粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-70	6B・7A	
KK6C層		粗粒砂礫・砂質シルト・粗粒砂礫	10	1植物遺体	2層・土層 粗粒砂礫系 (KK6-62)			
KK7A層	1	オレンジ色砂礫シルト・粗粒砂礫	6-40	1小遺物	植物 (KK6-62)			
	2	灰白色砂礫	6-70		IK-300 (KK6-62)	NGM-43		
	3	黄褐色粘土質・粗粒砂礫	5-180		TKC-05 (KK6-62)	NGM-43		
	4	粗粒砂礫・灰白色砂礫	3-200	1中遺物	TKC-06 (KK6-62)	NGM-43		
	5	灰色シルト・粘土質シルト	30		TKC-07 (KK6-62)	NGM-43		
	6	灰白色砂礫	6-210		TKC-07 (KK6-62)	NGM-43		
	7	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-110	1植物遺体	TKC-07 (KK6-62)	NGM-43		
KK7B層	1	粗粒砂礫シルト	1-25	植物遺体・中粒砂礫系土層	植物 (KK6-62)	NGM-70 NGM-112 NGM-63	7B1	
	2	オレンジ色砂礫系粘土質シルト	7	土層 (粗粒砂礫系) (KK6-62)	植物 (KK6-62)	NGM-12		
KK8A層		粗粒砂礫シルト	2-30		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK8B層		粗粒砂礫系粘土質シルト	7		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK8C層		粗粒砂礫シルト	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK8D層		粗粒砂礫シルト	3-20		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK8E層		粗粒砂礫・灰白色砂礫・粗粒砂礫系粘土質シルト	6-70	1土層	粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK8F層		粗粒砂礫・灰白色砂礫・粗粒砂礫系粘土質シルト	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK9C層	1	粗粒砂礫・灰白色砂礫・粗粒砂礫系粘土質シルト	6-10	1土層・土層	粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-12 NGM-66		
	2	オレンジ色砂礫系粘土質シルト	20		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK10A層		粗粒砂礫シルト	6-15		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
KK10B層	1	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	2	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	3	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	4	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	5	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	6	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	7	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	8	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	9	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	10	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	11	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	12	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	13	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	14	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	15	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	16	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	17	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	18	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	19	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	20	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	21	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	22	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	23	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	24	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	25	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	26	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	27	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	28	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	29	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	30	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	31	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	32	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	33	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	34	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	35	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	36	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	37	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	38	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	39	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	40	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	41	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	42	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	43	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	44	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	45	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	46	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	47	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	48	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	49	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	50	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	51	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	52	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	53	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	54	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	55	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	56	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	57	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	58	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	59	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	60	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	61	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	62	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	63	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	64	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	65	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	66	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	67	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	68	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	69	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	70	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	71	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	72	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	73	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	74	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	75	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	76	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	77	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	78	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	79	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	80	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	81	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	82	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	83	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	84	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	85	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	86	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	87	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	88	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	89	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	90	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	91	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	92	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	93	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	94	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	95	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	96	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	97	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	98	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	99	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	100	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	101	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	102	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	103	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	104	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	105	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	106	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	107	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	108	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	109	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	110	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	111	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		
	112	粗粒砂礫・灰白色砂礫	6-10		粗粒砂礫系 (KK6-62)	NGM-66		

第2節 各層出土の遺物と地層の年代

以下に各層から出土した土器類について上位の地層から順を追って記述するが、色調や焼成、胎土については特徴的なものはその都度、これ以外のものについてはそれぞれの器種の説明後に述べる。

1) 第2～4層出土遺物(図8・9)

第2層から出土した遺物には肥前磁器染付碗1がある。

第3層から出土した遺物には瓦器4・5がある。4は碗で、高台が消失する直前の段階と思われる。5は皿で、口縁部分のみが瓦質で、ヘラミガキも施されていない。これらは鈴木編年のⅣ期頃に当り、14世紀頃に属する。瓦器碗2・土師器碗6はともに第3～4-2層から出土した。2は4と同時期で、第3層の遺物であると思われる。6は平安時代Ⅱ期頃と思われ、本来は第4層に属する遺物である可能性が高い。

第4層から出土した遺物には、本来、下位層に帰属すると思われる遺物が多く含まれていたが、もともと新しく、地層の年代を示すものとしては、土師器3・7、黒色土器8がある。3は碗で、口縁部の内外面にみにナデを加える。平安時代Ⅱ期頃に属する。7は皿で平安時代Ⅲ期頃のものともみられる。8は内黒の碗で、外面はヘラミガキの前にヘラケズリを行う黒色土器初期のもので、平安時代Ⅱ期に属する。これらは10世紀から11世紀のもので、3点とも第4-1層から出土しているが、第4層の年代もこれらに代表させて大過はないものと思われる。

須恵器9・10・25は第3から4層中より出土したが、本来、下位の第6層に帰属するものと思われる。9は扁平なつまみが付いた須恵器杯蓋の細片である。10はつまみを欠損した須恵器杯Gの蓋で、かえりは短く、天井部の1/3をヘラケズリ調整している。25は体部の中ほど以下を欠損した須恵器杯身で、立上がりは短く内傾している。9は難波Ⅳ新段階、10・25は難波Ⅲ古～中段階に属するものであろう。

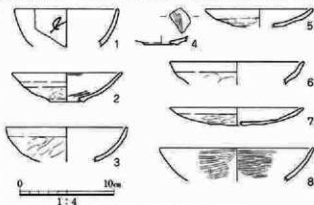


図8 第2～4層出土遺物実測図
第2層：1、第3-1層：4、第3層：5、第3-4-2層：2・6
第4-1層：3・7・8

2) 第6層出土遺物(図9～11)

第6層に含まれる遺物でもっとも新しく、地層の年代を示すものとしては、土師器89・90、須恵器24・28がある。89(図版38)は口径12.2cm、器高5.7cmの杯で、口縁部は丸味のある体部から短く開く。器体の調整は外面が左右のハケで、内面はナデの後、正放射暗文を施している。色調はにぶい褐色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母のほか、多量のチャート粒を含む。90は第6-1層の上部から出土

した。口径17.0cm、器高5.0cmの土師器杯で、口縁端部は内傾している。体部の調整は外面上半がユビオサエおよびナデ、下半は左右のヘラケズリで、内面はヨコナデの後、正放射暗文を施している。色調はにぶい橙色で、胎土中に3mm以下の長石粒を多く含む。24は須恵器杯蓋で、口径は12.4cmである。28は口径11.5cm、器高4.2cmの杯身である。口縁部は体部から外上方に開いており、端部は丸い。口縁部の内外面および体部の内面の調整はヨコナデ、体部外面は横方向のユビナデである。これらは難波Ⅲ古～中段階に属するものである。

次に第6層以外に、調査時に第6～8層一括として取上げた遺物についても第6層に含めて記述する。46・54・59～61・69・73・82・84・85は須恵器、87は土師器である。これらは形態的にみて古墳時代中期の遺物であり、本来、下位の第7層に帰属するものであるが、第6～1層形成時の耕作によって本層準に含まれたのであろう。

46は天井部の中央を欠損した杯蓋である。口径は13.0cmあり、口縁部と天井部の境の稜線は突出する。口縁端部は内傾しており、天井部の2/3近くをヘラケズリ調整している。54は底部径約9cmの平底鉢とみられる破片で、外面を縦方向の平行タタキの後、底部の外縁部のみヨコナデ調整している。61は口径13.2cmの広口壺で、体部の中ほど以下を欠損している。口縁部は緩やかに外反しており、端部の外端面が浅く凹む。器体の内外面ともにヨコナデ調整している。59は口縁部が大きく開いた壺である。口縁端部の下方に1条の突帯と頸部の上端に1条の櫛描波状文が巡る。60も口縁部が大きく開いた直口壺の口頸部で、外面に2条のにぶい突帯と櫛描波状文が巡る。73は口縁部が体部から湾曲する頸部をへて外上方に開く壺で、口縁端部は左右に肥厚する。口縁部の下方に1条の突帯が巡っており、一見すると複合口縁部の印象を受ける。体部の外面は平行タタキで整形しており、口頸部の内外面および体部の内面をヨコナデ調整している。69(図版37)は口径11.9cm、器高9.9cmの平底の壺である。口縁部はやや扁平な体部から外上方に開いており、端部は丸い。口頸部の調整は内外面ともヨコナデで、体部はヘラミガキ状のナデの後、底部の外縁をヘラケズリ調整している。82は口径11.8cm、器高7.2cmの把手付碗で、口縁部は体部から短く開く。体部の外面には2条の突帯間に1条の櫛描波状文が巡る。底部の外縁をヘラケズリ調整するほか、口縁部の下方には断面円形の把手の痕がある。84も体部の中ほど以下を欠損した把手付碗で、口縁部は一旦内傾した後、端部の近くで短く開く。体部の外面にはにぶい沈線間に2条の櫛描波状文が巡る。85は底径約15cmで、裾部が筒部から「ハ」字状に開く筒形器台の脚部である。筒部下方の2条の突帯上に長方形のスカシ孔を穿つほか、裾部にも2条の波状文→1条のにぶい突帯→1条の波状文が巡る。以上の須恵器の色調は灰色を基調としており、焼成も良い。59・60・69・84・85の断面の色調はセピア色である。46・82はTK216型式、ほかのものはⅠ期前半に属するものであろう。

87は口径9.9cm、器高3.6cmの杯で、口縁部がわずかに開く。底部は小さな平底である。体部外面の調整は器面が磨滅しており不明であるが、内面はヨコハケの後、ナデを施す。色調は灰白色で、胎土中に2mm以下の長石・石英・雲母粒を含む。下位層からの混入品と思われるもので、Ⅰ期後半[田中清美1999]に属するものであろう。

(田中・高橋)

3) 第7-1層出土遺物(図9~13)

須恵器11・16・18・23・27・29・30・32・35・38~44・47・49~52・58・64~66・68・75~77・79~81・86、土師器88・93・96・97・107~110・112~115、韓式系土器99~103・111・116、弥生土器121・123などが第7-1層から出土した。なお、ここでは調査時に第7層一括、第7層、第7層中土器溜まりとして取上げたものについても、各層間で接合するものを多く含むことから第7-1層に含めて報告する。まず、須恵器から以下に述べる。

11・12は天井部の中央を欠損した有蓋高杯の蓋である。口縁部と天井部の境の稜線はにぶく、前者は口縁端部を面取り、後者は丸くおさめる。11の天井部には列点文が巡る。23は有蓋高杯蓋の天井部の細片で、櫛描直線文と列点文がある。37は口縁部を欠損した有蓋高杯の蓋で、天井部の中央には逆台形状のつまみがある。口縁部と天井部の境の稜線は鋭く、天井部には櫛描直線文と列点文が巡る。39~43も口径11.2~12.8cmの有蓋高杯の蓋である。いずれも天井部の中央を欠くが、39・40(図版37)・41には櫛描直線文と列点文が巡る。口縁部と天井部の境の稜線は断面三角形で鋭いものが多い。44は口径が8.8cmの小型の蓋で、短頸壺の蓋の可能性ある。45は口径13.0cm、器高4.3cmの杯蓋で、口縁部がわずかに開き、端部の内面は沈線状に凹む。天井部をヘラケズリの後、中央部のみ静止ヘラケズリで調整している。47も天井部の中央を欠く杯蓋で、口縁端部はわずかに内傾している。天井部はやや丸味をもち、2/3をヘラケズリで調整している。27は体部が釜形の杯身の細片である。

13~18は無蓋高杯の杯部である。いずれも口縁端部が短く開く。14以外の口縁部の下端にはにぶい沈線か稜線がある。29~33は口縁部が外上方に開く無蓋高杯で、口縁端部が内傾する30以外は端部を面取る。いずれも口縁部の下端ににぶい沈線か稜線がある。19~22・35は高杯の脚部である。19・20の裾部は緩やかに開いており、柱状部下端の4方向に19は円形スカシ孔、20は菱形スカシ孔を穿つ。35は裾部が大きく開いており、外端部が浅く凹む。48は底径6.0cmで、平坦な底部から体部が外上方に伸びる把手付鉢である。底部は外縁部が上方に反っており、裏面をヘラケズリ調整している。体部の調整は外面が横および縦方向のナデ、内面は縦から横方向のナデである。49・50は口径8.8および10.7cmの腿の口縁部であろう。51は口径10.2cmで、口縁部が一旦短く外反した後、外上方に開く腿である。口縁部には櫛描波状文が巡る。体部は中ほど以下を欠損しているが残存部からみて、玉葱状を呈するものと思われる。53(図版37)は口縁部を欠損した腿で、玉葱状の体部の中ほどに沈線と緩杉状の列点文を施した後、円孔を穿つ。頸部にも櫛描波状文を密に施している。52は口縁部および脚部の大半を欠損した台付壺である。体部には一對の断面長方形の把手がある。体部の下半部をカキメの後、ヨコナデ調整している。色調は灰色で、胎土も緻密、硬質に焼成されており、伽耶地域の陶質土器の可能性ある。56は直口壺の口頸部で、口縁部は頸部から内湾しながら外上方に開く。頸部の外面には3条の沈線と2条の櫛描波状文が巡る。67・68も直口壺の口頸部で、口縁部は前者がわずかに開いており、後者は内傾している。頸部に前者は2条の沈線が、後者は6条のにぶい突帯が巡る。58は直立する頸部から口縁部が短く開く壺で、口縁端部の下方に1条の突帯がある。頸部の外面には2条の突帯と3条の櫛描波状文が巡る。62は口縁部が緩やかに開く広口壺で、口縁端部がわずかに凹む。外面は頸部から体部を平行タタキで整形しており、体部には3条のヘラ描沈線がある。74は

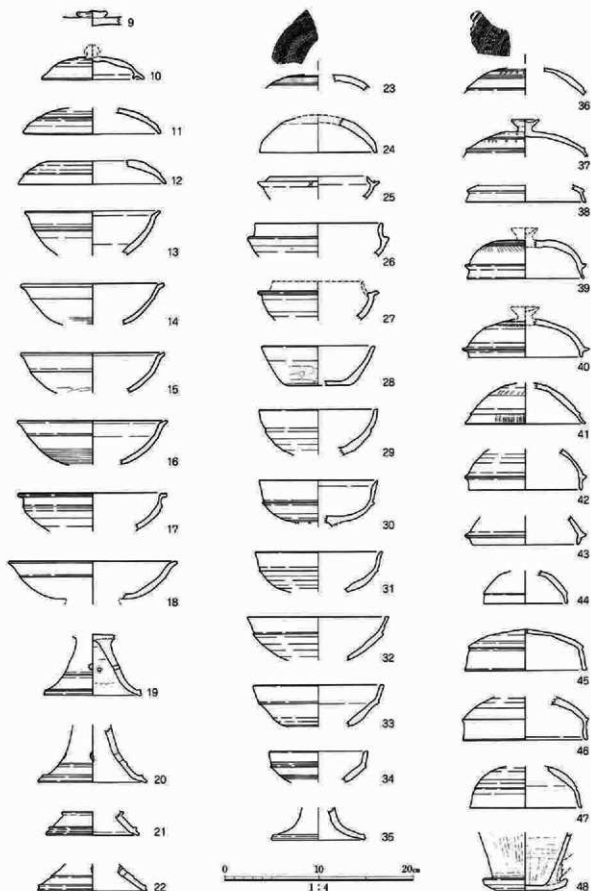


図9 各層出土の遺物(須恵器)実測図(1)

第3～4層: 9・25, 第4～2層: 10, 第6～1層: 24, 第6層: 28, 第6～7層: 37・46, 第7～1層: 11～15, 18・23・27・29・30・32・35・38～40・42～44・47, 第7～3層: 26・31・34・36, 第7～1・3層: 16・41, 第7層: 17・19～22・33・45・48

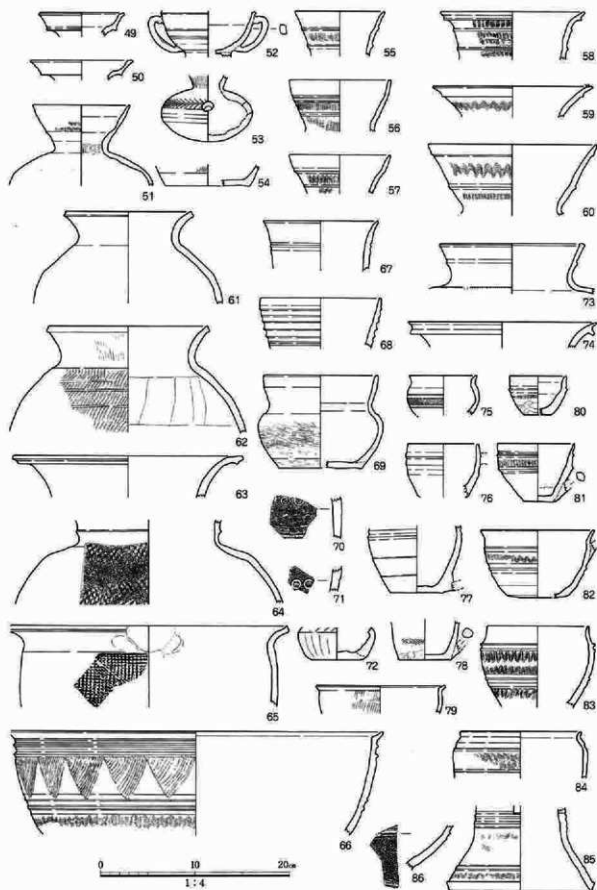


図10 各層出土の遺物(須恵器)実測図(2)

第6層: 54、第6~7層: 59~61・69・82・84・85、第6~2~7層: 73、第7~1層: 49~52・58・64~66・68
71・75~77・79~81・86、第7~3層: 55~57・63、第7層: 53・56・62・67・70・72・74・78・83

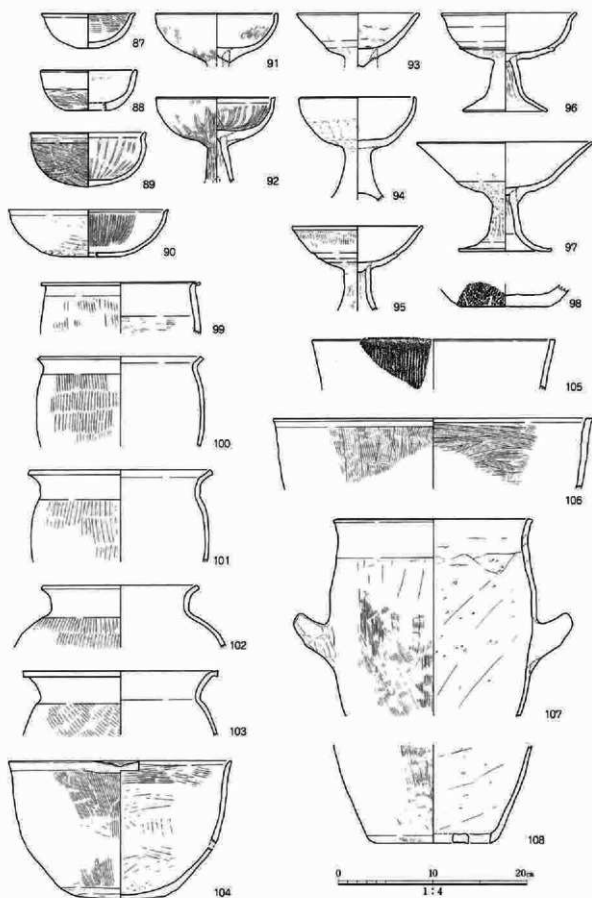


図11 各層出土の遺物(土師器・韓式系土器)実測図(1)

第6-1層: 89・90、第6-7層: 87・91・102、第7-1層: 88・93・96・97・99~101、第7-3層: 104~106
第7層: 92・94・95・98・103・107・108

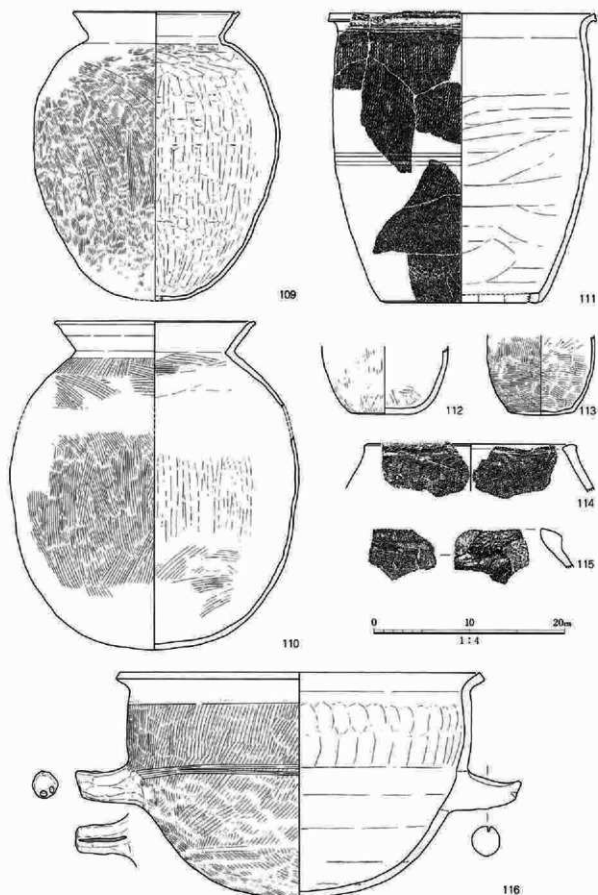


図12 各層出土の遺物(土師器・韓式系土器)実測図(2)

第7層中土器遺り：110～112、第7層：109・113・114・116 (SD717と接合)、第6～7層：115

口縁部が緩やかに開く壺で、口縁端部の下方に1条の突帯がある。64は口縁部を欠損した壺で、頸部には1条の突帯がある。張りのある体部の外面は長方形の格子タタキを施した後、部分的にヨコナデ調整しており、内面は全体をヨコナデ調整する。65は緩やかに開いた口縁部に片口が付く鍋で、口縁端部は上方に肥厚する。体部の外面を正方形の格子タタキで整形しており、内面はナデ整えている。66(図版37)は口径39.8cmの高杯形器台の杯部である。口縁部はわずかに内湾しながら短く開いており、体部の外面は2条一単位の突帯間にヘラ描の鋸歯文、この下に櫛描波状文が巡る。杯部の内面にオリープ灰色の自然釉が付着している。86も高杯形器台の杯部片で、突帯下に鋸歯文と波状文がある。70は壺の体部片と思われるもので、外面にスタンプ状の竹管文がある。71は第7層から出土した70と同一個体とみられるもので、ともに焼成時に色調が黒色に変化する物質(ベンガラ?)を施文前に塗布している。72は底部が平底で、体部が扁平な器体の特徴からみて、三国時代の陶質土器の小型埴と思われる。肩部に列点文、体部に縦方向のヘラ描文が巡る。79は口縁部が短く開く鉢である。体部の外面を縦方向の平行タタキで整形しており、口頸部および体部の内面はヨコナデ調整である。同様な鉢は、次章で紹介するSX706出土の須恵器447や、大坂城跡OS99-16次調査[大阪市文化財協会2002b]および龍野市尾崎遺跡[龍野市教育委員会1995]で出土しているほか、類似品は朝鮮半島南西部の三国時代の陶質土器に散見される。75-78・80・81・83は把手付碗である。いずれも把手を欠損しているが、77・78・81の底部にはやや不成形な断面円形の把手の一部が残る。口縁部は湾曲しながら短く開く75、内湾する76、上方に開く80・81、わずかに内傾する83がある。体部の上半には2条のぶい突帯下に1条の櫛描波状文のある80、2条の突帯間に櫛描波状文が巡る81(図版37)、2条の沈線間に1条の櫛描波状文を巡らす75、体部の下方に1条の櫛描波状文がある78、2条一単位の突帯間に2条の櫛描波状文、この下に1条の櫛描波状文が巡る83などがある。76・78・80は体部から底部の外面を静止ヘラケズリあるいはヘラケズリ調整している。

土師器には88・91-97・107-110・112-115などがある。88は口径10.2cm、器高4.2cmの杯である。口縁部は器壁の厚い体部からわずかに開いており、端部は丸い。口縁部の内外面および体部内面の調整はヨコナデ、体部から底部の外面は粗いハケで整えている。91は脚部を欠損した杯部が碗形の高杯である。口縁端部を面取っており、器体の内面には正放射暗文がある。92(図版36)は口径12.5cmで、口縁部にややひずみのある碗形の高杯である。口縁端部は内傾しており、器体の調整は杯部の外面が縦方向のハケ、内面にはナデの後、正放射暗文を施している。脚部の調整は柱状部を縦方向のハケの後、同方向のヘラミガキで、下端部の4方向に円形スカシ孔を穿つ。色調はぶい橙色で、胎土中に微細な長石・雲母・シャモット粒を含む。93(図版36)は口径12.8cmで、口縁部が外上方に直線的に開く高杯である。脚部を欠損しており、杯部の調整は内外面とも細かいハケの後、ヨコナデである。94(図版36)は脚部を欠損した口径12.0cmの高杯である。杯部は口径の割に深さのある碗形を呈しており、底部に別作りの脚部を接合している。調整は杯部の内外面がヨコナデ、脚部は縦方向のナデである。色調は橙色で、胎土中に1-3mmの長石・石英・雲母・チャート・シャモット・角閃石粒を含む。95は口径13.6cmで、杯部の下方にぶい段のある高杯である。杯部から脚部の調整は粗い縦方向のハケの後、横あるいは縦方向の粗いナデである。柱状部の内面にはシボリメが残る。96(図

版36)は口径14.2cm、器高10.5cmの高杯で、口縁部は段のある体部から外上方に短く開く。脚部は柱状部から「ハ」字状に開いており、調整は内外面ともヨコナデで、柱状部の内面にはシボリメが残る。色調は橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。97(図版36)は口径18.6cm、器高11.6cmの高杯で、口縁部は体部から直線的に大きく開く。杯部の上半はヨコナデ調整するが、下半から脚部の上端部には指頭圧痕が残る。脚部は柱状部から緩やかに大きく開いており、調整は柱状部が縦方向のナデ、裾部の内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母・角閃石粒を含む。以上の高杯のうち、94以外は粘土紐の接合痕跡や調整などの観察から、まず脚部および杯底部を成形した後、少し時間が経過してから杯上部を、最後に柱状部に粘土円盤を充填する製作過程が復元された。107は底部を欠損した口径20.4cmの瓶である。口縁部は体部からわずかに外反しており、内外面をヨコナデ調整している。口縁端部を面取っており、体部の調整は外面が縦および横方向の細いハケで、内面は右上がりのヘラケズリである。体部の中ほどに内面から上向きの角状の把手を挿入している。108は体部の下半以上を欠損した瓶で、蒸気孔は中央の1孔の周囲に直径約2cmの円孔を穿っている。器体の調整や色調、胎土などからみて、107と同一個体の可能性がある。109(図版37)は口径17.4cm、器高30.8cmの長胴甕で、口縁部は体部から短く立つ頸部を経て外上方に開く。口縁端部は内傾しており、わずかに凹む。体部の調整は外面が縦および左上がりのハケ、内面は縦方向の強いナデである。色調は浅い黄橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母・角閃石粒を含む。口縁端部の形態からみて、布留式系の土器といえよう。110は口径21.0cm、器高35cm前後の長胴甕である。口縁部は体部から直線的に開いており、端部の上面がわずかに凹む。体部の調整は外面が縦および左右の断続的なハケ、内面は右上がりのハケの後に縦方向の強いナデを施すが、頸部にハケメが残る。底部の調整は内外面ともハケの後、ナデである。112・113は体部の中ほど以上を欠損した平底鉢と思われる。112の外面はタテハケの後、底部側縁をナデしており、内面はタテハケの後、左上がりのヘラケズリを施している。113の調整は外面がタテハケの後、ヨコハケで、内面は下半が左上がりのハケである。114・115は移動式竈の破片で、架け口の形態は後者が断面三角形に肥厚しており、外面には同心円状のタタキメ痕が、内面にはハケメが残る。前者も架け口の端部がわずかに肥厚しており、調整は内外面ともハケの後、ナデである。色調は115がにぶい黄褐色で、114は浅い黄色、前者の胎土中には3mm以下の長石・角閃石粒を含む。115は生駒西麓地域からの搬入品であろう。以上の土師器の内、長胴甕109・110、平底鉢112をはじめ、後述する韓式系土器版111は調査区東部の第7層中の土器溜まりから出土したものである。

韓式系土器は98・99～103・111・116である。99～101は口径が16.8～19.0cmの鉢あるいは甕である。いずれも口縁部に強いヨコナデを加えており、内面あるいは上面が浅く凹む。体部の外面を縦方向の平行タタキで整形しており、内面は下半にハケメが残る99以外はナデである。102は口径16.1cmで、口縁部が張りのある体部から緩やかに外反する広口甕である。口頸部の調整はヨコナデで、口縁端部をわずかに面取る。体部の外面は縦方向の平行タタキで、内面はナデ整えている。103は口径20.8cmで、口縁部は一旦外反してから屈曲し、端部は上下にわずかに肥厚する。体部の外面は左上がりの平行タタキで整形しており、内面はナデである。色調はにぶい黄褐色で、胎土中に2mm以下の長

石・石英・シャモット・角閃石粒を含む。98は平底鉢か甕の底部である。外面および裏面を縄文タタキで整形しており、表面にはナデを加えている。色調はにぶい橙色で、胎土中に3mm以下の長石粒を多く含む。111は口径28.0cm、器高約31cmで、口縁部が緩やかに外反する甕である。口頸部の内外面に強いヨコナデ調整を加えており、口縁端部の外端面が浅く凹む。わずかに内湾しながら立つ体部の外面を縄文タタキで整形した後、底部の外縁に横方向のヘラケズリを加えている。器体内面の調整は上半がヨコナデ、下半は粗いナデである。体部外面の中ほどに2条のにぶい沈線があり、本来はここに一对の角状の把手が付くのであろう。底部の大半を欠損しており、裏面の蒸気孔も2孔残るのみである。色調は褐灰〜にぶい黄橙色で、胎土中に4mm以下の長石・石英・角閃石・雲母粒を含む。116(図版37)は口径38.2cm、器高23.7cmの把手付の鍋で、口縁部は直立する体部の上半から短く開き、端部を面取る。底部は丸底で、体部の中ほどには上面に切込みを入れた角状の把手を器体の内面から挿入している。口頸部内外面の調整はヨコナデ、体部と底部の外面を右上がりおよび縦方向の平行タタキで整形しており、底部には沈線状のナデをまばらに施している。体部の内面はヨコナデ調整するが、上半部には指頭圧痕が残る。色調は灰白色で、焼成はあまい。

弥生土器・庄内式土器は117～127・131がある。121・123は第7～1層から出土したもので、甕もしくは器台の口縁部である。いずれも下方に拡張した口縁部の端面を複合鋸歯文で加飾しており、121はヘラ状工具によるキザミメを上端に施している。また、123は口縁端部を赤色顔料により彩色している。121の内面の調整はヘラミガキである。胎土はいずれも精良で、長石・チャート・石英粒などを含み、にぶい橙色を呈する。これらは河内V様式に属する。

以下は第7層として一括で取上げたものである。117は甕の口頸部で、口縁端部を上方にわずかに肥厚させている。調整は不明であるが、口縁端部にはススが付着している。127は甕の頸部から体部の上半部で、外面を幅の広い櫛描簾状文と円形浮文で加飾する。器壁は薄く仕上げられており、内面の調整はナデとユビオサエによっている。胎土中に長石・チャート粒などを含んでおり、生駒西麓産とは異なる。色調はにぶい黄橙色を呈する。122は甕もしくは器台の口縁部である。下方に拡張した口縁部の端面を複合鋸歯文で加飾している。118(図版38)は甕の甕である。外面をハケ、内面をナデとユビオサエで調整しており、外面には黒斑がある。胎土中には長石・チャート粒を多く含み、浅黄色を呈する。124(図版38)は高杯もしくは器台とみられる。中実の脚柱部から内湾ぎみに伸びる裾部には4方向に円形スカシ孔を穿つ。外面には全面に横方向のヘラミガキを密に施す。119は鉢で、扁平な体部と受口状の口縁部をもつ。口縁部には櫛描簾状文を、体部には櫛描直線文と簾状文を配し、内外面をナデで調整する。胎土には長石・チャート粒を含み、浅黄色を呈する。近江V-2様式あたりから増加する近江地域の小型鉢の影響を受けたものであろう。125は台付鉢の脚台部である。小さな円孔を2段に穿ち、その下には2条の凹線文が巡る。外面の調整はヘラミガキで、裾端部から内面にかけては横方向のナデを施す。120・126は高杯である。杯部が碗形の120は器面が荒れているが、杯部内外面の調整はハケの後、ナデで、脚部の内外面はナデである。完形の126(図版38)は有段の杯部をもつ。口縁端部はわずかに凹んでおり、裾部には5方向に円形スカシ孔を穿つ。内外面の調整はハケの後、ヘラミガキである。端部に近い裾部の内面には、部分的に列状の小さな円形の凹みがあり、へ

ラミガキ原体など球状の先端をもつ工具の当たりと考えられる。131は器台と鉢が結合した形態の土器で、他地域からの搬入品であろう。多条の凹線文を巡らせた器台の口縁部に相当する部分に、4本一組の棒状浮文を8方向に貼付け、さらに棒状浮文の上には、下位の凹線文にあわせてキザミを施している。外面の調整はヘラミガキで、内面は横方向のハケの後、ヘラミガキである。

これらの土器のうち、117・125・127・131は河内Ⅳ様式、118～120・122は同Ⅴ様式に属する搬入品を含む資料で、124・126は庄内期の資料であろう。

(田中・池田)

4) 第7～3層出土遺物(図9～11・13)

須恵器は26・34・36・55・57・63がある。26は立上がりりがわずかに外反する杯身で、体部の上半以下を欠損している。36は有蓋高杯蓋の天井部片で、櫛描直線文と列点文が巡る。34は無蓋高杯の杯部片で、口縁部は体部から上方に開いており、体部外面には櫛描直線文が巡る。55・57は直口密の口

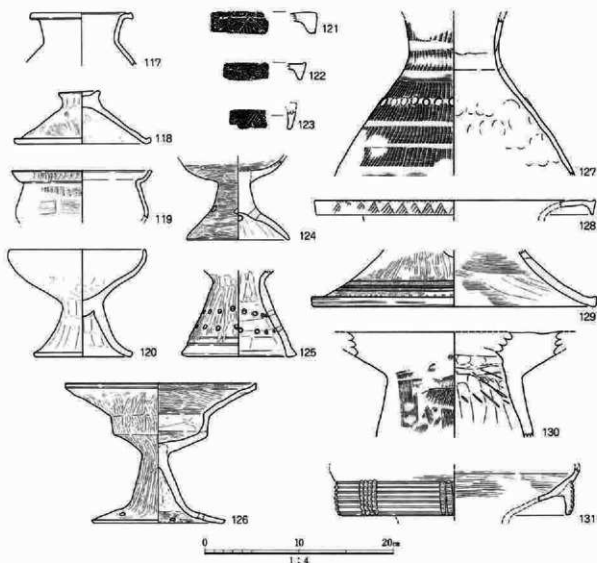


図13 各層出土の遺物(弥生土器)実測図

第7層: 117～120・122・124～127・131、第7～1層: 121・123、第7～3層: 128～130

頸部片で、外面には前者がにぶい突帯間に1条の櫛描波状文、後者は突帯間とその下に1条の櫛描波状文が巡る。63は口縁部が大きく開いた甕で、端部を面取り、この下に突帯が1条巡る。以上の須恵器の色調は黄灰色の34以外は灰色で焼成は良い。34・36・63はⅠ期前半、26・55・57はⅠ期後半に属するものであろう。

土師器は104・106がある。104は口径23.8cm、器高14.6cmの土師器片口鉢である。底部は丸底で、口縁部は体部からわずかに開く。口縁部の内外面の調整はヨコナデで、体部は外面が左上がりのハケ、内面は不定方向のヘラケズリおよびナデである。底部の内面および外縁をヘラケズリ調整しており、体部内面の上半にはヨコハケが残る。色調は黄灰色で、微細な長石・雲母粒を含む。106は口縁部が体部から直立する甕の破片である。体部の調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケである。色調はにぶい黄褐色で、胎土中に微細な長石・石英・チャート・雲母粒を含む。

韓式系土器は105がある。105は口縁部が外上方に直線的に開く甕の破片である。体部の外面は縦方向の平行タタキで整形しており、口頸部の内外面および体部の内面はヨコナデ調整である。色調はにぶい橙色で、胎土中に2mm以下の長石・石英・雲母・チャート粒を含む。以上のうち、土師器はⅠ期後半、韓式系土器はⅠ期前半に属するものであろう。

弥生土器は128～130がある。128は壺もしくは器台の口縁部で、128は「コ」の字状のキザミメを上端に施している。内外面の調整はヘラミガキである。130(図版38)は台形土器である。外面の調整は台部がナデで、脚部はハケの後、ナデである。脚部内面の調整は縦方向のナデであるが、複数の工具痕が残る。台部の欠損部分にもススが付着しており、2次的に火を受けたものとみられる。129は器台の裾部で、4条の沈線と2列の刺突列点文が巡る。調整は外面がハケの後、ヘラミガキで、内面はハケの後、ナデを加えている。胎土中に長石・チャート・石英・雲母粒などを含み、にぶい橙色を呈する。外面には黒斑がある。130は河内Ⅳ様式、128・129は河内Ⅴ様式に属する。

(田中・池田)

5) 第8層以下の地層出土遺物

第8・10層からは遺物はまったく出土しなかった。

NR1101上部に堆積した第9層からは、縄文時代後期中葉の北白川上層Ⅱ式が出土した。

第11層からは石器集束部LC1101に混って縄文時代後期初頭の中津式とみられる縄文土器片が、LC1102に混って縄文時代前期の羽鳥下層Ⅱ式とみられる縄文土器片が出土した。これらの遺物については次節で紹介する。

6) 各地層の年代

以上、出土遺物の編年観から、各地層の年代は以下のように考えられる。

第2層は肥前磁器染付を包含することから江戸時代以降に降る。

第3層は第Ⅳ期の瓦器を包含することから室町時代と考えられる。

第4層は、最上部の第4～1層にも瓦器を含まないことから12世紀には降らない。また、古式の黒色土器や口径の大きな土師器碗が10・11世紀代のものであること、そして次章第4節で述べるよう

に基底面検出の土器埋納遺構出土の土師器が9世紀代のものであることから平安時代の前・中期におさまると考えられる。

第6層については、第6-1層から出土した土師器杯・須恵器杯身の形態から飛鳥時代を中心とした時期が考えられる。第6-2層からは時期を特定できる遺物が出土しなかった。

第7層は地層断面では3層に細分できる個所もあったが、層相が近似していたため確実な分層発掘ができおらず、細分した層準の年代を確定することができなかった。しかし、第7層全体としてみると、もっとも新しく編年される遺物でも初期須恵器の時期より降るものはない。また、時期が明確な遺物でもっとも古いものは河内Ⅳ様式のものである。このことから第7層の上限は弥生時代中期後半ということになる。しかし、図化できなかった遺物の中に長原式土器らしい破片が存在する。長原式土器は弥生土器河内Ⅰ様式の前段階と共伴することが知られているので[田中清美1999b]、第7層の上限は弥生時代前期にまでさかのぼる可能性が高い。

第9層は出土した縄文土器片から、縄文時代後期中葉頃と考えられる。

第11層は出土した縄文土器片から、縄文時代前期から同後期頃と考えられる。

(高橋)

第Ⅲ章 各時代の調査成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1) 石器集中部

本調査地では、縄文時代以前の石器遺物が出土する可能性のある地層については東西方向に南北幅5mトレンチを設定して調査を行った。第11～12層(NG12～13層に相当)からは縄文土器とともにサヌカイト製の石器遺物が67点出土した。出土した石器遺物の内訳は細部調整がある剥片1点、石核2点、剥片64点、単純最大長1cm以上の石器遺物で、接合後の実数は60点であった。出土した石器遺物は2箇所の石器遺物集中部を形成していた(図15・16、図版3)。ただし、トレンチ調査としたため、集中部を完全に発掘することはできなかった。そのため、未調査部分に今回検出した集中部の遺物が残されている可能性があり、ほかの集中部が存在した可能性も否定できない。

LC1101 2つの集中部のうちの西側のものである。径3mほどの範囲内にやや密な分布を見え、ほぼ完掘されたものと思われる。集中部の石器遺物は36点であり、剥片35点(接合後の実数33点)、石核1点である。本集中部内からは縄文土器細片4点が出土している。

縄文土器134(図14)はその一つで、器形などは不明であるが、幅2.5mmの沈線が刻まれている。沈線の太さから縄文時代後期初頭の中津式である可能性がある。

LC1102 東側の集中部で、東西8mほどの範囲に散漫に石器遺物が分布している。トレンチ幅を5mとしたので、南北方向に遺物分布がどの程度拡がるのかは不明である。出土した石器遺物は28点で、細部調整がある剥片1点、石核1点、剥片26点(接合後の実数は24点)で構成される。また、本集中部でも縄文土器細片5点が石器遺物同様に散漫に分布していた。

縄文土器132(図14)は突刺による文様帯部分の破片で、断面はわずかに屈曲している。縄文時代前期羽島下層Ⅱ式の、胴部に屈曲をもつ鉢などの一部とみられる。

第11・12層は旧石器時代から縄文時代までの長期間にわたり形成された地層であるが、遺物の垂直断面からは、遺物垂直分布がやや幅をもつものの、複数時期の石器遺物の重なりを示すような状況は窺えない。また、縄文土器が石器遺物集中部とほぼ重複していることから見て、本調査で検出された二つの石器遺物集中部は縄文時代に帰属するものと判断されよう。

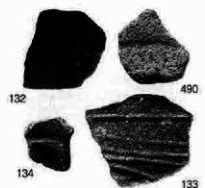


写真1 縄文土器

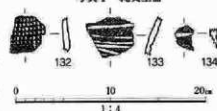


図14 縄文土器実測図

LC1102(132)、LC1101(134)、NR1101内第9層(133)、深掘トレンチ清掃中(490)

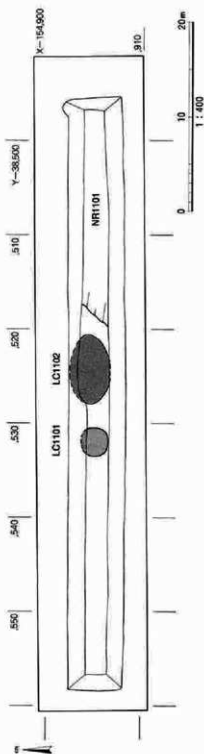


図15 縄文時代の遺構

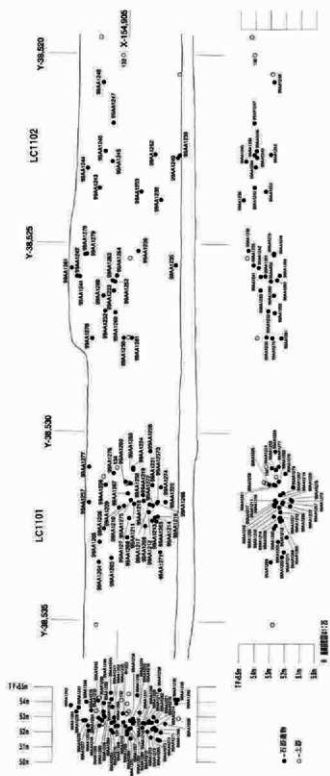


図16 石器の出土状況

2) 石器遺物

接合資料として6組が認められた(図17・18、図版18・19)。複数の剥片が接合した資料が1組、石核と剥片の接合資料が2組、剥片の折れ面接合が3組であった。

接合資料JAA-1 (99AA1267-1218-○-1206+1276-○-1274-1204)

剥片5点の接合資料である。同一の礫面打面から横位に打点をずらせながら、ほぼ連続して横形剥片あるいは短形剥片を剥離している。石核の素材はおそらく礫を分割するように剥離した分厚い剥片

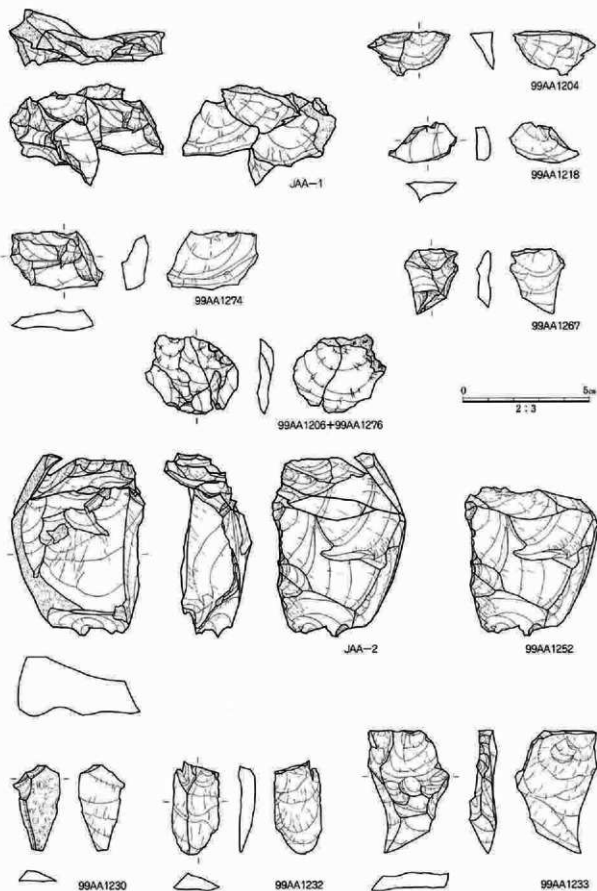


図17 縄文時代の石器実測図(1)

であろう。石核素材の大型剥片を剥離した原礫の形状は不明である。打面調整や石核整形はほとんど行われていない。剥片AA1267と1218、AA1274と1204はそれぞれ潜在割れ等に起因する同時割れの可能性が高い。また、AA1206+1276の剥片は打点から縦割れを起こしている。また、剥片の多くは末端が鋸歯状剥離を起こしており、石核自体の厚みがかなりあったことを窺わせる。

剥片AA1204は長25.9mm×幅21.1mm×厚6.9mm、1206+1276は長29.8mm×幅37.6mm×厚8.2mm、1218は長15.0mm×幅27.4mm×厚11.0mm、1267は長27.2mm×幅21.3mm×厚15.5mm、1274は長23.8mm×幅37.6mm×厚10.4mmである。

接合資料JAA-2(99AA1230-○-1233-1232-○-1252)

剥片3点(99AA1230、1232、1233)と石核(1252)1点で構成される接合資料である。石核の素材には円礫を分割するように打ち割った一片が使用されている。最初に石核素材が分割された時に形成された広く平坦な剥離面を打面として、その周縁に沿って連続して矩形剥片が剥離されている。AA1230、1233、1232はこの段階で剥離された剥片である。剥片AA1233の剥離に先行して、この剥片の表面右側縁上半に細かな剥離が連続して施されているが、これは剥片形状を整えるための石核調整であった可能性がある。この後、打面と作業面を入れ替えて剥片剥離が行われるが、この段階で幅広かつ縦長の剥片が剥離されている。複数回の剥離が行われたようである。最後は打面を180度転位して、石核の末端側から打面と作業面を交互に入れ替えながら横形剥片を剥離している。石核はこの段階で放棄されたと考えられる。なお、石核AA1252の裏面左側縁部には、細部調整とみられる細かな連続した剥離痕が認められ、最終的に削器へと転用されている。

剥片AA1230は長(33.7mm; 打面側欠損)×幅18.5mm×厚5.0mm、1232は長36.3mm×幅19.9mm×厚5.9mm、1233は長48.2mm×幅30.8mm×厚11.4mm、石核AA1252は長59.2mm×幅54.0mm×厚25.6mmである。

接合資料JAA-3(99AA1221+1277)

剥片の折れ面接合である。表面中央の剥離痕と主剥離面は同時割れとみられ、そのためか主剥離面には打面が残っていない。末端側に礫面が残る。長さ29.2mm、幅35.1mm、厚さ10.7mmである。

接合資料JAA-4(99AA1220-1213)

剥片(AA1220)と石核(AA1213)の接合資料である。石核の素材はやや小ぶりな礫を分割したものである。分割時に形成された剥離面や平坦な礫面を打面としている。小型の横形剥片を3~4枚程度剥離した後、ほぼ90度単位で打面転位を行っているが、作業面と打面を入れ替える交互剥離のような規則性は見られない。また、打面調整は施されておらず、剥離された剥片は礫面打面か平坦打面のいずれかである。剥片(AA1220)は長さ30.8mm、幅19.3mm、厚さ4.5mmで、石核(AA1213)は長さ25.5mm、幅60.0mm、厚さ35.7mmである。

接合資料JAA-5(99AA1263+1281)

長さ45.0mm、幅47.5mm、厚さ9.3mmを測る。横形剥片が縦割れを起こした接合資料である。剥離時に折損した可能性がある。表面は主剥離面と同方向の剥離痕が複数あり、右側縁には礫面を残す。打面は平坦打面である。

接合資料JAA-6(99AA1245+1247)

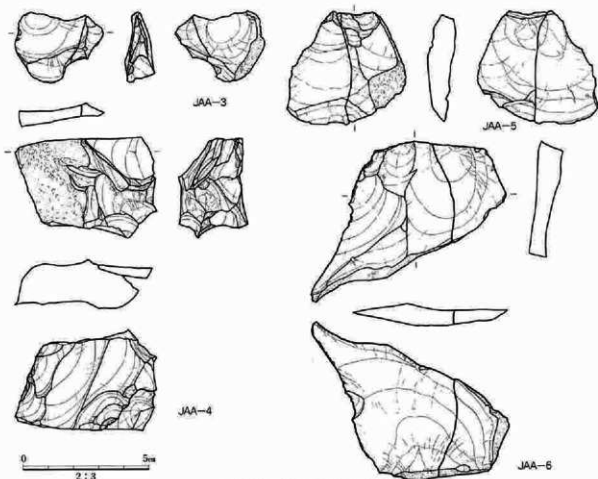


図18 縄文時代の石器実測図(2)

長さ61.0mm、幅79.7mm、厚さ9.2mmを測る。打点からずれた位置で縦割れした接合資料である。剥離時に折損した可能性が高い。小ぶりの礫から輪切りにするように剥離された大型の横形剥片で、表面には主剥離面とほぼ同方向の剥離痕が複数ある。末端縁辺は礫面が残る。打面も礫面打面である。

(絹川)

3) 自然流路

NR1101 調査区東半部で検出された(図15)。幅は22.5m以上、深さは1.2m以上である。確認できた埋土で最下位のものは第11層の河成堆積層であり、流路の始まりが少なくとも縄文時代にさかのぼることがわかる。その上には第10・8層の砂礫が堆積しており、縄文時代を通じてほぼ同じ場所を流れていたものと判断された。しかし、第9層段階の堆積物は粘土～シルトであり、縄文時代後期の一時期には別の場所に流れを変えたか、廃川となっていたようである。第8層を堆積させた複数回の洪水の供給源はこの流路であり、こうした流路の氾濫によって出戸自然堤防が形成され、それによって、次節以降で紹介する弥生～古墳時代にかけての居住に適した地形環境ができ上がったのである。

縄文土器133(図14)は流路内の第9層から出土した。外面に5条の沈線が見られ、図中、もっとも上の沈線を水平にみれば、鉢などの口縁に近い部分に当たると思われる。縄文時代後期中葉の北白川上層Ⅱ式に属する。

(高橋)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

第7層の層中で弥生・古墳時代の遺構が多数検出された。前章でも述べたとおり、第7層は3層に細分できるが、平面的に掘分けるのは困難であった。弥生時代の遺構がおもに検出されたのは第8層

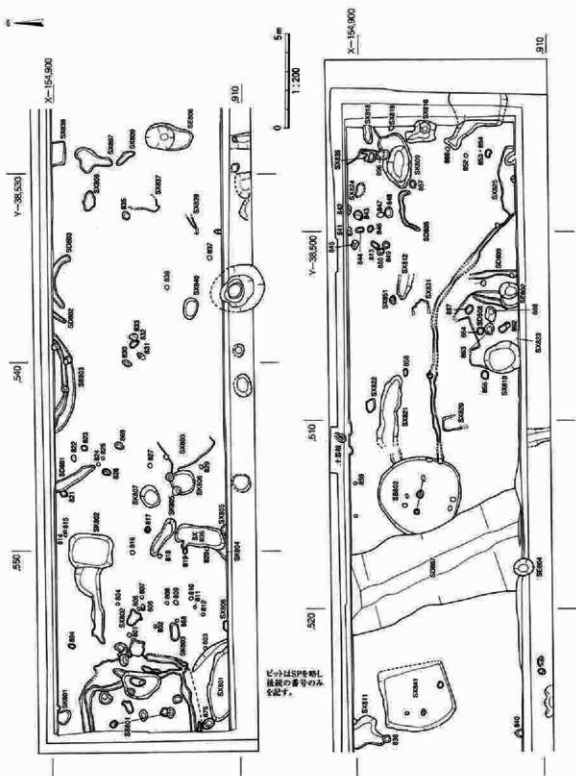


図19 弥生時代の遺構

の上面まで掘下げた段階であったが、第7層中でも両時代の遺構が同一面で検出されることもあった。出土遺物や切合い関係などを参考に弥生・古墳時代に分けて報告する。弥生時代の遺構は調査区全面に広がり、竪穴住居・井戸・土塋・溝などがあった(図19、図版4・5)。遺構の種類や出土土器の多さから判断して、この時代の調査地周辺は長期間継続して営まれた居住地に当ると考えられる。

1) 建物

SB801 調査区の西端で検出した竪穴住居で、住居全体のほぼ東側半分に当る(図20、図版4)。竪穴部分の平面形は隅丸方形で、南北6.26m、東西4.05m以上、深さは0.1m未満である。内部には幅約0.2m、深さ約0.1mの周壁溝が巡っており、この部分では南北5.62m、東西3.35m以上である。周

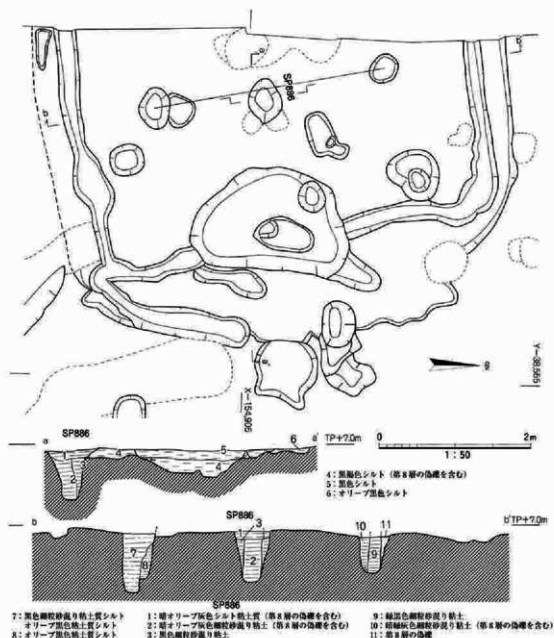


図20 SB801等実測図

壁溝を含む竪穴内部の埋土は黒褐色シルトで、偽礫など特に床面の整地層に当る堆積層は観察されなかった。この層の上から南北に並んで2個の柱穴が検出された。その間隔は3.15mである。柱穴は直径0.4mほどの円形で、深さは約0.5と0.8mで、柱痕跡と柱の抜き取り穴が明瞭に観察できた。北側のものの柱痕跡からみて柱の直径は0.18mほどであったとみられた。これらの柱穴が支柱穴であると考えれば、南北に長い長方形の平面形をもつ竪穴住居であったと考えられる。同様な竪穴住居としては、約350m西北西で大阪文化財センターによる城山遺跡(その2)Dトレンチで発見されたSB901が挙げられる。なお、2個の柱穴の中間に位置するSP886は、柱の抜き取り穴から弥生土器の高杯が出土し、その年代観から別時期のものと判断される。竪穴部分の埋土中から土器が出土した。

136・137(図21)は壺の口頸部である。床面上で出土した136は、下方に肥厚させた口縁部に2段の竹管文を配する。頸部の調整は外面がハケ、内面はナデである。胎土中には長石・石英粒などを含むが、粘土紐の接合部に当る頸部中ほどの欠損部分では、接合部分以下に用いられた生駒西麓産胎土が一部残存しており、一つの土器に2種類の胎土が併用されていたことを示している。137は下方に拡張した口縁部に山形に近い波状文を配する。器面が荒れているが、頸部の調整は外面がハケ、内面はヘラミガキであり、胎土は生駒西麓産である。ともに器形の全体を復元することは困難であるが、庄内期を中心とする時期の資料であろう。

139(図23、図版21)はSP886から出土した小型の高杯である。膨らみの小さい受け部から口縁部が大きく外反し、端部を外方につまみ出す。杯部内外面にはハケを施し、杯底部内面に板状工具によるナデを加えている。脚部には、内外面ともハケの後、ナデを加えている。水平口縁をもつ高杯が矮小化したものである可能性があり、河内V様式初め頃の資料とみられる。

SB802 調査区東部で検出された円形の竪穴住居である(図22、図版5)。竪穴部分の直径は約4.3m、深さは約0.1mで、埋土はオリブ黒色シルトであった。この埋土の上で2個の柱穴とその中間の位置に炉1基が検出された。柱穴はほぼ東西に並び、その間隔は1.8mである。柱穴は直径約0.3m、深

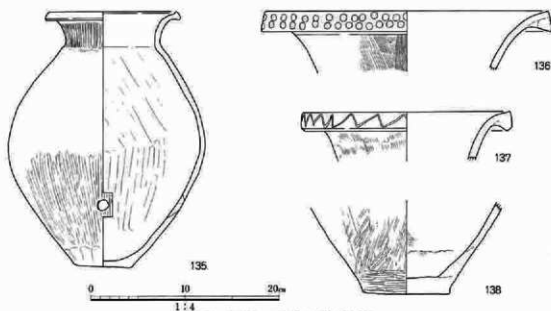


図21 SB801・802出土遺物実測図
SB801(136・137)、SB802(135・138)

さは約0.15mであった。炉は長径0.42m、短径0.32mの楕円形で、深さは約0.25mであった。炉の内
部には炭が薄く堆積しており、その上には竈135が置かれていた。竈穴の西端部はSD807によって切
られていた。竈穴の南東部か
ら東の外方に向けて排水溝と
みられる細い溝が取付いてい
た。溝は幅0.15～0.45m、深
さは0.1m未満で、7.5mほど
東へ延びた後、鈍角に南へ曲
り、東南東調査区外へ延びて
いた。地形的には東方の標高
が低いとみられるので、住居
内からの排水を目的とした溝
と考えられた。

135(図21、図版20)は中央
の炉から出土した広口短頸甕
である。最大径が体部の中ほ
どにある長手の体部から短い
頸部が立ち、口縁端部は上方
に肥厚させる。体部の下半に
は焼成後に外から内に向けて
穿たれた、直径10～15mm程
度の孔がある。器面が荒れて
いるが、頸部および体部下半
の調整は、外面が縦方向のヘ
ラミガキで、体部内面はナデ
である。体部外面の上半には
黒斑が、下半にはススの付着

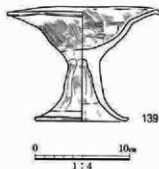


図23 SP886出土遺物実測図

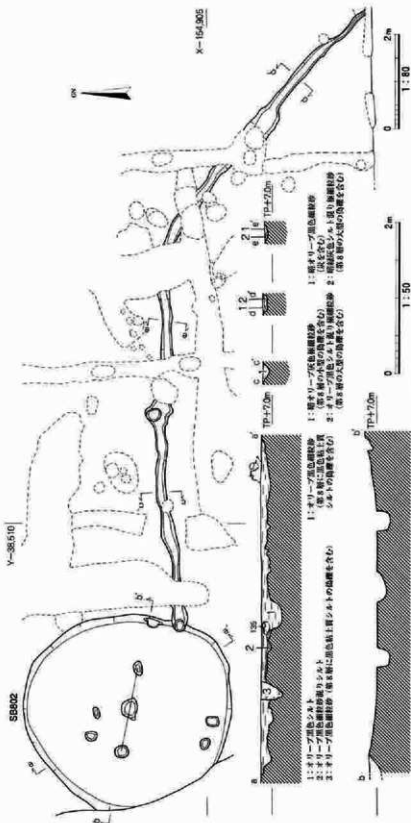


図22 SB802実測図

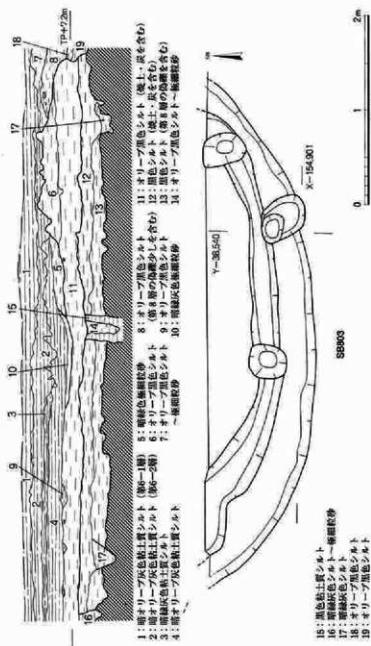


図24 SB803発掘図

が見られる。河内Ⅳ-2様式前後の資料であろう。138は堅穴部から出土した壺の底部である。調整は外面がヘラケズリの後、ヘラミガキで、内面はナデである。外面には黒斑があり、胎土中には多量の長石粒をはじめ、チャート・雲母粒などを含む。

SB803 調査区西部北壁沿いで検出した堅穴住居で、円形の堅穴住居の一部であろう(図24)。堅穴の深さは0.2~0.3mで、その内側には周壁溝と思われる小溝が巡る。床面には約0.1mの厚さでオリーブ黒色シルトに第8層の偽礫が混った堆積層が見られた。偽礫はおそらくは上からの圧力によって水平方向に扁平化して潰れており、この堆積層が床面の整地層として人為的に敷設されたものであることを示していた。周壁溝と思われる小溝は幅0.15~0.43m、深さ約0.2mで、埋土は暗緑灰色シルトであった。堅穴全体は第8層の偽礫が少量混った黒色シルトで埋没していた。小溝を切る柱穴はこの住居に伴うものとは考えられず、主柱穴等は不明である。

2) 井戸

SE801 (図25、図版7・8) 調査区中央部やや西よりの南壁際で検出した素掘りの井戸である。平面形は東西約2.4m、南北2.5m以上の楕円形で、深さは約1.8mであった。調査最終日に地層観察用の畔を崩す過程で検出されたため、埋土の詳しい堆積状況を観察することはできなかったが、おもに黒色砂質シルトで埋没しており、顕著な偽礫は見られなかったことから自然堆積によって埋没したものと考えられる。井戸内の中位からは弥生土器がまとめて出土した。

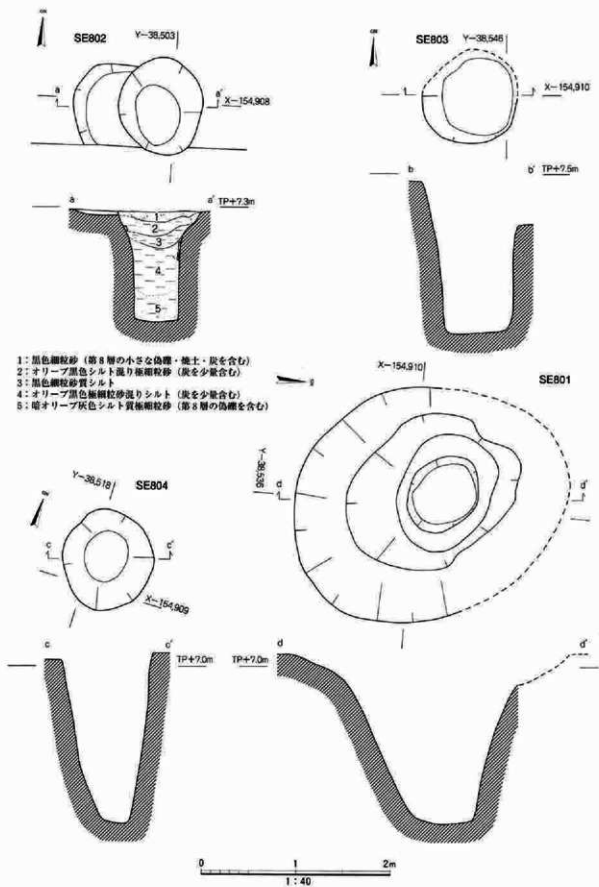


図25 弥生時代井戸実測図

140・142・144(図26、図版22)は長頸甕である。口縁端部はいずれも丸くおさめており、140・142は無花果形の、144は球形の胴部をもつ。頸部はいずれも太く、144・142の頸部の高さは器高の1/2をやや下回り、140は1/3程度ある。140は肩部に記号文的な沈線が巡る。外面にはハケの後、頸部と体部下半にヘラミガキを施す。内面の調整は頸部が横方向のハケで、体部はハケの後に板状工具によるナデを加える。142は頸部にジグザグ状の記号文が深く刻まれている。頸部および体部の外面にはハケの後、ヘラミガキを施すが、体部の上半には極めて細かいハケメが残る。また、肩部にはヘラミガキ原体の球状の先端の当たりとみられる痕跡が並ぶ。内面の調整は頸部および底部がナデで、体部は横方向のハケである。144の外面の調整は、頸部が縦方向のハケで、体部は中ほどに横方向のハケを、その上下には縦および斜め方向のハケを施す。内面の調整は頸部・体部ともにハケの後、頸部にはまばらに、体部には全体にナデを加える。これらの土器のうち、140・142の体部下半の外面には全面にススの附着が認められ、142・144には黒斑がある。

141・143(図26、図版23)は短頸甕である。141の頸部は無花果形の体部から直立ぎみに立ち、口縁部には浅い沈線が巡る。器面が荒れているが、外面にはヘラミガキを施し、内面はハケの後、ナデにより調整している。胎土中には粒径の大きい長石粒やチャート粒を多く含む。143は無花果形の体部から頸部が外湾ぎみに立ち、口縁端部は丸くおさめる。肩部には三日月形の記号文がある。器面が荒れているが、外面は頸部が縦方向のハケで、体部はタタキの上からハケで調整し、上半にはナデを、下半にはヘラミガキを加えている。内面はハケで調整し、頸部は横方向のナデを、体部上半はユビオサエと縦方向のナデを加えている。145は垂下させた口縁部に竹管文が巡る広口壺の口頸部である。頸部は内外面ともヘラミガキで調整している。146・147は口縁部に最大径がある小型の甕である。いずれも頸部が鋭く屈曲しており、外反する口縁部の外面にはヨコナデの下にタタキメが残る。体部外面はヘラケズリを施し、上半には縦方向の強いナデを加える。口縁部と体部の内面はハケ調整で、体部には縦方向のナデを加える。外面には全面にススが附着している。以上の土器は河内V-3様式に属するものであろう。

SE802 調査区東部の南壁際で検出された素掘りの井戸である(図25)。平面形は南北1.02m、東西0.90mの円形で、深さは1.15mである。埋土には少量の偽礫が混るものの、人為的に埋戻した痕跡はなかった。一部には、掘形に接して木片の残欠が遺存しており、本来、崩落を防ぐための板などが当てられていたのかもしれない。底部付近から土器が出土した。

150(図26、図版28)は生駒西麓産胎土の庄内式甕である。広い頸部から口縁部が鋭く屈曲しており、端部をつまみ上げている。体部は下すばまりで、尖り底を有する。体部の外面には細筋のタタキメが残り、下半には縦方向のハケを加えている。内面の調整はヘラケズリで、外面には全面にススが附着している。庄内期Ⅱに属する資料であらう。

SE803 調査区西部の南壁際で検出された素掘りの井戸である(図25、図版7)。平面形は直径約1mのほぼ円形で、深さは1.48mであった。調査最終日に検出されたため、埋土の詳しい堆積状況を観察することはできなかったが、内部上方約2/3の埋土は、第8層の暗緑色細粒砂と暗灰色シルトの偽礫からなる混合土で、人為的に埋戻されたものとみられた。下部1/3は細流砂・シルトなどの薄

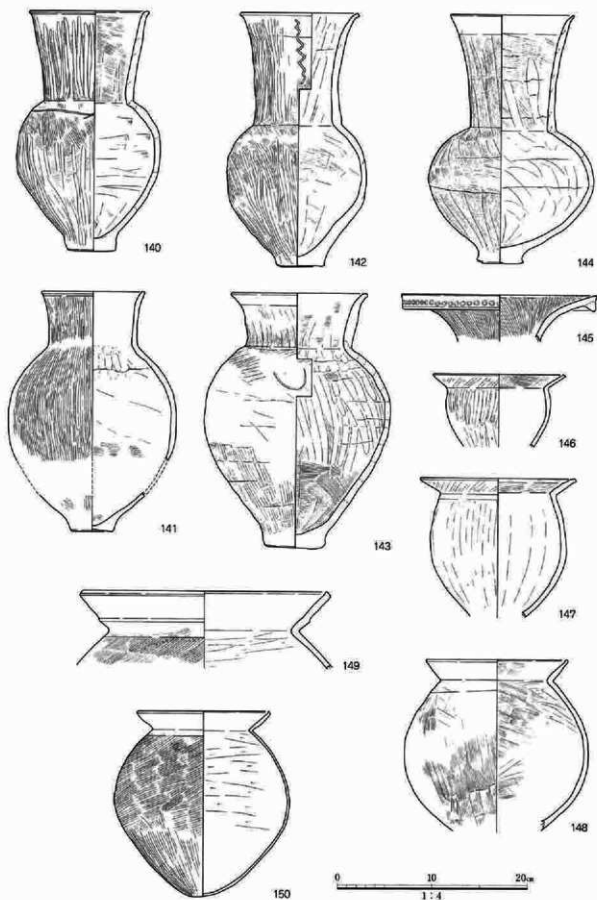


图26 弥生時代井戸出土遺物実測図
SE801(140~147)、SE802(150)、SE804(148・149)

層が互層に自然堆積していた。上層の最下部で弥生土器の壺類がまとまって出土した。土器が出土した高度はまとまりながらも高低差があり、井戸を埋めながら土器が投棄されたものとみられた。

151・157・159(図27、図版22)は長頸壺である。口縁端部をいずれも丸くおさめており、頸部の長さは、154・155・157が器高のほぼ $1/2$ で、151・152は $1/2$ をやや下回る。後者の頸部は前者に比して太く、体部は扁球形であり、器高もやや低い。外面の調整はハケを主体としながらも、ヘラミガキを意識したナデが施されたものが含まれる。体部には分割成形の痕跡を明瞭に残すものが少ない。151・152・154・156・159などの底部は、底部輪台技法によりドーナツ状を呈する。また、151・156には黒斑が見られる。151は頸部および体部上半の外面に縦方向のハケを、体部の下半には螺旋状のタタキの上に右上がりのハケを施す。内面は頸部がナデで、体部下半はハケの後、ナデを加える。154は頸部から体部上半の外面に縦方向のハケの後、軽いナデを加える。体部下半はタタキの上に縦方向のハケを施しており、さらにミガキを意識したとみられる縦方向のナデを加えている。内面は頸部が横方向のハケで、体部の上半はナデとユビオサエ、下半はハケを施す。体部下半の外面にはスガが付着している。肩の張る157は頸部と体部上半の外面にハケの後、ナデを加え、体部下半にはミガキを意識した縦方向のナデを施す。頸部および体部内面はともにハケの後、ナデで調整する。152は口縁部の内外面を細かい横方向のハケで調整しており、頸部外面には細かい縦方向のハケ、体部外面にはタタキの上から原体の異なる縦および斜め方向のハケを施す。頸部および体部内面の調整はハケの後、ナデとみられる。また、体部の下から $1/3$ ほどを境に、下部ではより砂粒の少ない精良な胎土が用いられており、ハケメの下に見られるタタキメの方向も上部とは異なるなど、分割成形技法の痕跡が明瞭に残る。155の外面の調整は、頸部が縦方向のハケで、体部は分割成形技法の接合部である下から $1/3$ ほどを境に、上部が縦方向のハケ、下部が横方向のナデである。また接合部の外面には横方向の工具痕が認められる。内面は頸部にはナデを、体部はハケの後、上部にはナデを施す。153・156・159はいずれも体部上半以上を欠損している。153の外面にはタタキの上から縦方向のハケを施し、底部付近にはナデを加える。内面はハケの後、板状工具によるナデで調整している。156は外面をハケの後、ナデで調整し、内面はハケの後、下部にはナデを、上部には左上がりのユビナデを加える。159の外面の調整は、上半が左上がりのハケで、下半は原体の異なる粗い縦方向のハケの後、ナデである。内面はハケの後、部分的にナデを加える。158(図27、図版22)は短頸壺である。肩の張らない倒卵形の体部から頸部が直立し、口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部は一部が残存しているのみであるが、小さな面をもつ。外面は全体をハケで調整した後、口縁部および頸部上半には横方向のナデ、頸部下半の一部と体部にナデを加え、体部にはさらにヘラミガキを施す。内面には口縁部および頸部上半に横方向のナデ、頸部下半から体部上半には縦方向のユビナデ、体部下半には板状工具によるとみられるナデを施す。

以上、これらの土器群は、長頸壺の頸部長の萎縮と、ヘラミガキの省略という変化が進行しつつあり、河内V-2様式からV-3様式の過渡期の段階に当る一括性の高い資料であるといえよう。

SE804 調査区中央部やや東寄りの南壁沿いで検出された素掘りの井戸である(図25)。平面形は、南北1.05m、東西0.92mのほぼ円形で、深さは1.82mであった。埋土はオリブ黒色細粒砂泥りシル

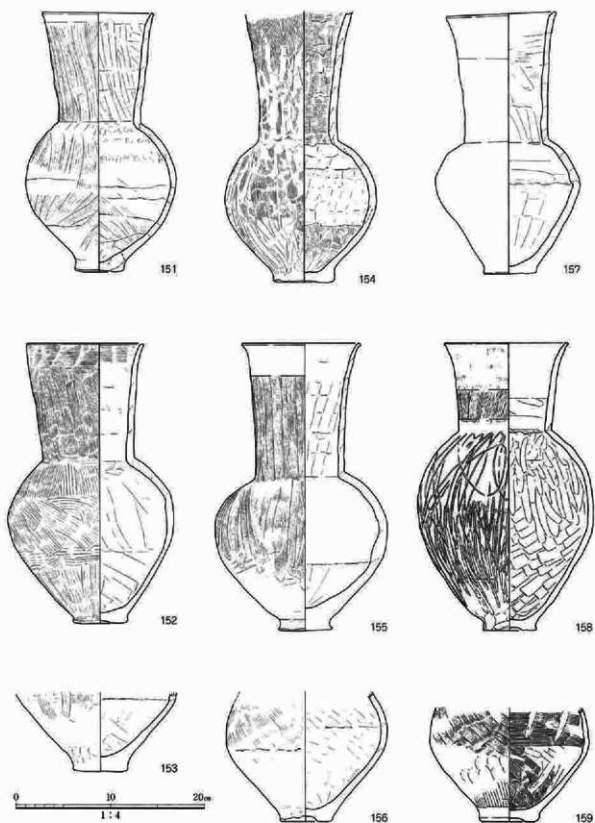


図27 SE803出土遺物実測図
SE803(151~159)

トで、薄いラミナが観察でき、周囲から徐々に土砂が流入して埋没したものとみられた。埋土中からは炭とともに土器片が出土した。

149(図26)は生駒西麓産胎土の庄内式甕である。口縁部は強いヨコナデにより下部が段状を呈し、

端部は上方につまみ上げている。体部の外面には細筋のタタキメが残り、肩部には横方向のハケを施す。内面はヘラケズリで調整しており、外面にはススが付着している。148は庄内式の影響を受けたとみられる甕で、口縁部は球形の体部から鋭く屈曲して外反しており、端部を丸く肥厚させる。口縁部の調整は、外面がヨコナデで、内面はハケの後、横方向のナデを加える。体部の調整は外面がハケで、上半には部分的にナデを加えている。内面はハケの後、ヘラケズリおよびナデを部分的に施しており、器壁は薄く仕上げている。胎土は精良で、微細な長石・石英粒などを含み、にぶい黄色を呈する。体部の外面にはススが付着しており、内面には焼成時の炭素の吸着が全体に及んでいる。いずれも庄内式の中でも布留式に近い段階の資料であろう。

SE805 調査区南壁沿いで、SE801の西側で検出された素掘りの井戸である(図19、図版7)。平面形は、東西約1.2m、南北約1.0mの楕円形で、深さは約1.2mであった。埋土の上部は黒褐色粘土質シルトを主とする埋戻し土で、下部は細粒砂・シルトなどからなる自然地積層であった。埋戻し土に混って弥生土器が出土した。

160・161(図28)は胎土が生駒西麓産の広口壺の口頸部である。いずれも口縁部を垂下させ、161は頸部と口縁部に縞状文を施す。160は頸部外面をヘラミガキ、内面をナデで調整しており、161は頸部内面をハケで調整している。162は壺の底部で、外面をハケの後ナデで、内面をナデで調整している。163は胎土が生駒西麓産の壺底部である。外面をヘラミガキで、内面をハケで調整する。164・166は甕で、いずれも口縁端部をつまみ上げており、体部上半には部分的に列点文を施す。164は器面が荒れているが、内面には粗いハケメが観察される。色調は褐灰色で、胎土中には長石・雲母粒を少量含む。器壁を薄く仕上げる166は、体部上半に水平および右下がりのタタキを施した後、ハケを加え、下半はヘラケズリで調整する。内面の調整はハケの後、ナデである。色調は灰黄色を呈し、胎土中には微細な長石・雲母粒を含む。外面には体部下半を中心にススが付着している。164・166は

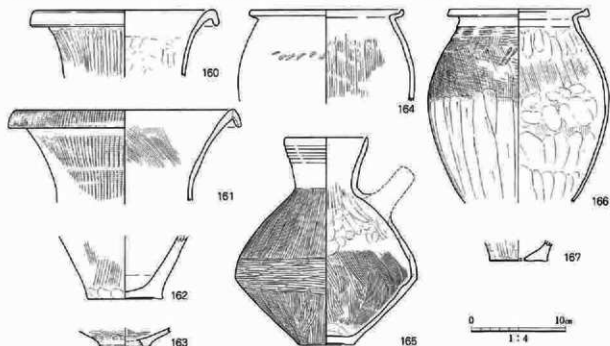


図28 SE805出土遺物実測図
SE805(160~167)

ともに中部瀬戸内地域の影響を受けた可能性がある。167は胎土が生駒西麓産の堯の底部である。体部および底部外面の調整はヘラミガキで、内面はナデによる。165(図版21)は水差しである。口縁部には3条の凹線文が巡り、算盤玉状に張る体部には充填式の把手が取付く。本遺構から出土した土器のうち、161～163・165にはいずれも2次的に火を受けた痕跡が見られる。また、これらの土器はいずれも河内IV様式に属するが、簾状文に幅の広い原体を用いる161や、無文化した160などは新しい段階に位置づけられるもので、体部が張り充填式の把手をもつ165などは古い段階に属するものである。

SE806 調査区中央部で検出された素掘りの井戸である(図29)。平面形は南北2.52m、東西1.36mの楕円形で、深さは1.68mである。南部に舌状の浅い落込みが取付いていた。埋土は3層に分かれ、上層には顕著な偽礫など埋戻した痕跡があり、中・下層にはラミナが観察できたことから自然に堆積したものと考えられた。おもに中層から土器片が出土した。

168(図29)は庄内式の影響を受けた甕であろう。球形の体部と鋭く屈曲する頸部をもち、口縁端部を丸く肥厚させる。体部外面には細筋のタタキの上から縦方向のハケを施す。内面の調整はヘラケズリで、器壁を薄く仕上げている。胎土中には長石・チャート・石英・シャモット・雲母粒などを含み、浅黄橙色を呈する。

3)土坑

SK802 調査区西部、SB801の北東で検出された(図30、図版4)。平面形は、南北1.18m、東西0.94mの隅丸方形で、深さは0.57mである。西側に長さ約4m、最大で深さ0.1mの不整形の落込みが取付く。埋土は大きく3層に分けることができ、中・下層(図中の2～4)は第8層起源の偽礫を含み、人為的に埋戻されたものと見られた。上層(図中の1)には微細なラミナが観察され、自然に堆積したものと考えられた。底面で多くの弥生土器片が出土した。土器片とともに炭も出土し、一部の土器には

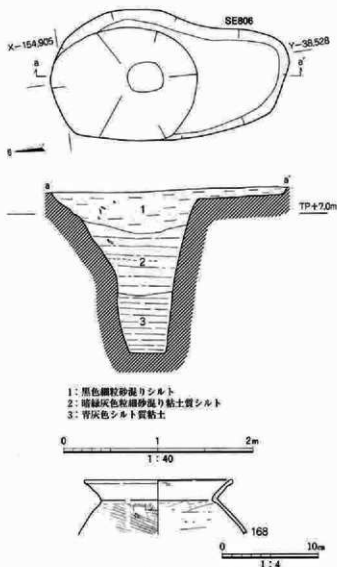


図29 SE806と出土遺物実測図
SE806(168)

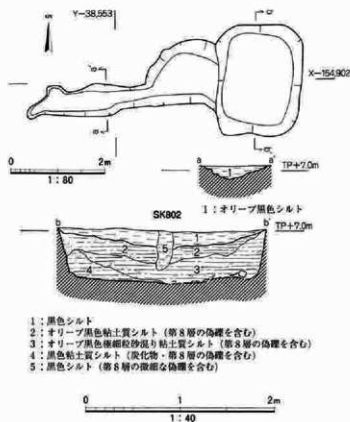


図30 SK802実測図

2次的に熱を受けて変色したものがあることから、遺構内で土器とともに何かを燃やしたものと考えられる。ゴミなどを廃棄するための土壌か、火を用いた祭祀を行った土壌である可能性がある。

179(図31、図版20)は口縁部と底部を欠く壺で、体部上半から頸部にかけて縞状文で加飾している。外面はハケの後、体部下半にヘラミガキを施す。内面の調整は体部上半および頸部がハケで、体部下半にはナデを施しているとみられる。胎土中には長石・石英・雲母粒などを含み、生駒西麓産とは異なる。176は無頸壺である。体部の中ほどで強く屈曲し、口縁部は段状に肥厚する。体部の調整は外面がナデで、内面はハケの後、ナデによる。口縁部にはススが付着している。

169～173・175は甕である。169・171・172は体部の上半に最大径があり、口縁部は強く外反し、端部は肥厚せず小さな面をもつか、あるいは丸くおさめている。169(図版20)の底部には焼成後の穿孔が見られる。体部の調整は、外面がヘラミガキ、内面はナデである。171・172は器面が荒れていて調整が観察しにくい。172の体部外面の調整はハケで、内面はハケの後、ナデによるとみられ、171は内外面ともヘラミガキである。169・171の胎土は生駒西麓産である。170の口縁部は、頸部から鋭く屈曲し、口縁端部を上方に拡張している。体部外面の調整は上半がハケ、下半はヘラミガキである。内面の調整はユビオサエとハケによる。173の調整は外面がヘラケズリ、内面はナデである。175の口縁部は強く外反しており、やや肥厚する端部には1条の凹線が巡る。これらの甕のうち、170～173は2次的に火を受けているため器面が荒れている。

174・178は水差しである。174は外面に櫛描流水文と縞状文を配し、流水文の上には暗文状の縦方向のヘラミガキを加えている。体部の調整は、下部の外面がヘラミガキで、内面は板状工具によるナデである。178は体部に把手の剥がれた痕跡がある。外面の調整は、体部の上半が縦方向、下半が横方向、底部が不定方向の密なヘラミガキである。体部の内面の調整は大半がヘラケズリ状の強いナデで、底部に近い部分はナデである。体部の外面にはススが付着しており、胎土は生駒西麓産である。177は台付鉢の脚台であろう。中空の脚柱部と裾部の間に粘土円盤を充填しており、裾部内外面の調整はハケである。外面にはススが付着しており、胎土は生駒西麓産である。これらの土器の大部分は、河内Ⅳ-3～4様式に属するものと考えられる。

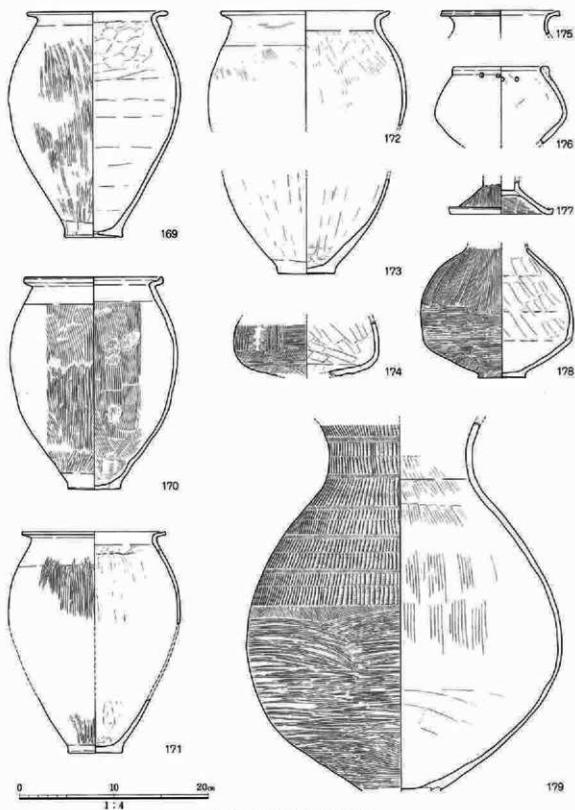


図31 SK802出土遺物実測図
SK802(169~179)

SK805 SK802の南東ではSK805~807の3基の土壌が検出された。SK805は西北西方向に主軸をもち、長さ2.17m、最大幅0.55mの溝状の土壌である(図32・図版8)。深さは0.07mで、埋土は黒色シルトであった。内部からは弥生土器片が出土した。

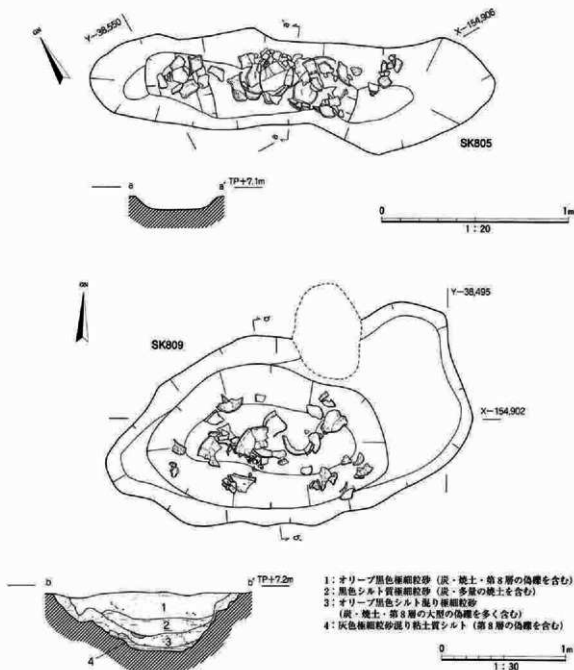


図32 SK805・809実測図

180(図33)は生駒西麓産胎土の甕である。器面が荒れているが、体部外面の調整はヘラミガキで、内面はユビオサエとナデである。胎土中の角閃石・長石粒には細礫大程度の粒径の大きなものが含まれる。河内V-0~1様式に属する資料とみられる。

SK806 平面形は直径約1.2mの円形で、深さは0.17mである(図34)。埋土は緑黒色粘土質シルトで、底面から水差などを含む弥生時代中期の土器片が出土したが、図化できるものはなかった。

SK807 平面形はほぼ円形で、東西1.12m、南北1.00m、深さは0.28mである(図34)。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトであった。若干の弥生土器片が出土したが、詳しい時期は特定できなかった。

SK809 調査区東端付近のやや北寄りで見出された(図32・図版8)。東西2.94m、南北1.56mで、

深さは0.45mである。埋土の下部(図中の3・4)にはラミナが観察でき、周囲から土砂が流入して堆積したものとみられた。3層内には炭の薄層が堆積していた。埋土の上部(同1・2)には第8層に起源する偽礫が混り、人為的に埋戻されたものとみられた。おもに埋土の3・4層から多くの弥生土器が出土したが、そのほとんどは破損したものであった。これらのことから、この土壌は廃棄用として設けられ、機能時に3・4層が堆積し、廃絶時に埋戻されたものと考えられる。

185・186・188・193・194は広口壺である(図35、図版21)。185・186は垂下させた口縁端部と頸部の外面に簾状文を施す。185の内面は器面が荒れて調整は不明であるが、186の調整は内外面ともヘラミガキである。188・193・194の口縁部はいずれも上下に拡張しており、外面には簾状文を施した後、193は扇形文を、188には上下2段の刺突文を組み合わせている。188の刺突文は一部が貫通し頸部まで達している。いずれも器面が荒れており、頸部の施文の有無や調整は不明なものが多いが、193の外面には簾状文が施されており、188の内面にはハケメとユビオサエの痕跡が認められる。

181~184・187は甕である。いずれも体部上半に最大径があり、口縁部は頸部から「く」の字状に外

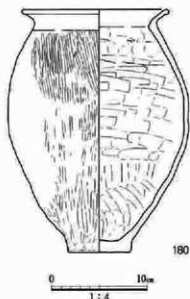


図33 SK805出土遺物実測図
SK805(180)

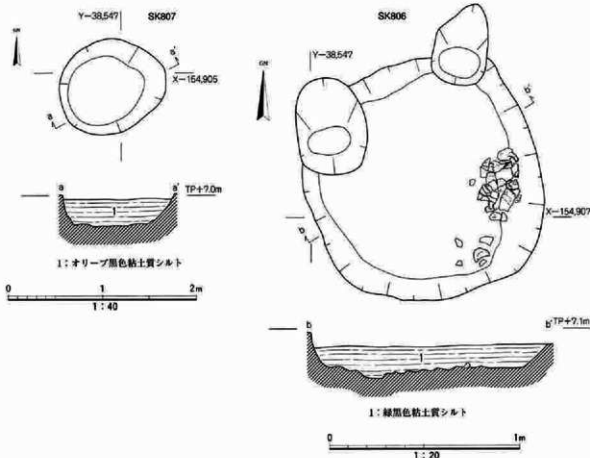


図34 SK806・807実測図

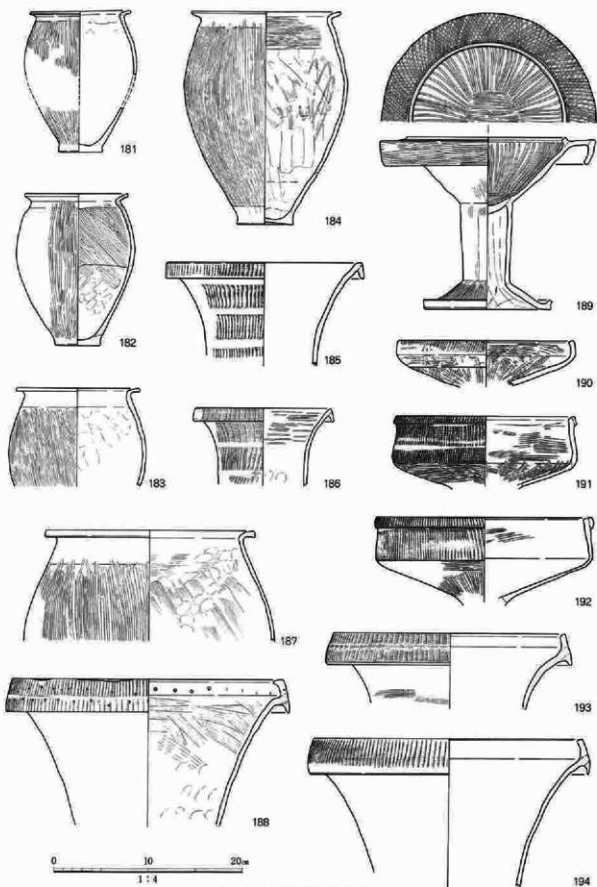


图35 SK809出土遗物实测图
SK809(181~194)

反し、187のみ口縁端部を肥厚させている。181・183の体部の調整は、外面がヘラミガキで、内面はナデである。181は底部の外面にもヘラミガキを施す。182は体部の外面をヘラミガキで、内面上半をハケ、下半をナデとユビオサエで調整し、内面には粘土柱の接痕痕がある。184の体部の調整は、外面がヘラミガキで、内面の上部は横方向のヘラミガキ、それ以下はハケの後、ナデである。大型の187は口縁部の下端をやや肥厚させている。体部の調整は外面がヘラミガキで、内面はハケの後、ナデである。また、体部の外面には部分的にスガが付着している。

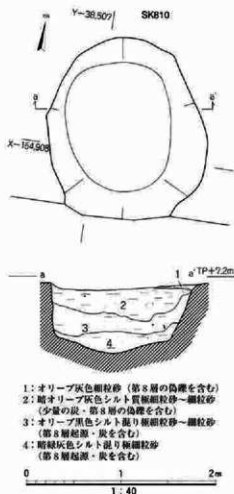
190～192は口縁部や体部の外面に簾状文を施す高杯および鉢である。190は口縁端部を内側に、191・192は段状に肥厚させる。器面の調整は外面がいずれもヘラミガキである。内面については、190・191がハケの後にナデを施し、さらに放射状のヘラミガキを加えており、192は部分的にハケメの痕跡が認められる。189は水平口縁の高杯である。口縁端部を垂下させ、杯部内面には突帯を有する。杯部と脚部の接合部は円盤を充填している。中空の脚柱部から鋭く屈曲して広がる裾部の端部を上方に拡張する。杯部の調整は横方向のナデの後、細かいヘラミガキで、さらに受け部内面を放射状の、口縁部上面を斜格子状のヘラミガキで飾る。口縁部外面は横方向、杯部から裾部の外面には縦方向のヘラミガキを施しており、脚部内面から裾端部の調整はナデである。

これらの土器の胎土はいずれも生駒西麓産であり、河内Ⅳ-1～2様式に属するものであろう。

SK810 調査区東部、SB802の南東で検出された(図36)。平面形はほぼ円形で東西1.68m、南北1.9m以上で、深さは0.72mである。図中3の埋土の下部は水つきの状態で堆積した状況が見られ、同2以上には第8層に起源する偽礫が混り、埋戻された痕跡があった。3の埋土から少量の弥生土器が出土した。

4) 溝

SD807 (図37・図版6)調査区中央のやや東寄りで検出され、北北西方向に延びる。幅は3.9～5.1m、深さは約1.2mである。埋土は上層(図中の1・2)、中層(同3・4)、下層(同5・6)に大きく分けることができた。下層の6層には小礫が混り、若干の流水があったものとみられた。中層の4層は第8層に起源する偽礫がかなり混っており、人為的に埋戻した形跡であろう。それ以外の埋土は周囲から土砂が流入して徐々に埋没したものと考えられる。上層の下部(2)は土壌化・暗色化しており、



- 1: オリーブ灰色細粒砂 (第8層の偽礫を含む)
- 2: 暗オリーブ灰色シルト質細粒砂～細粒砂 (少量の炭・第8層の偽礫を含む)
- 3: オリーブ黒色シルト混り微細粒砂～細粒砂 (第8層起源・炭を含む)
- 4: 暗緑灰色シルト混り微細粒砂 (第8層起源・炭を含む)

図36 SK810実測図

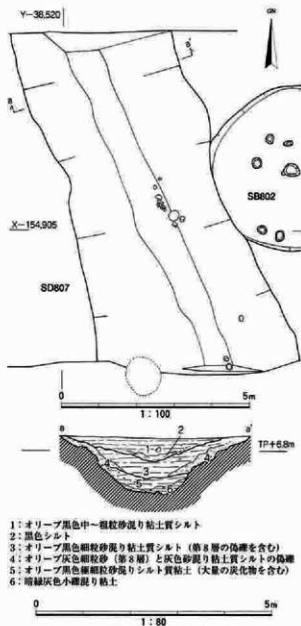


図37 SD807実測図

埋没が一時中断したものとみられた。遺構内各層から非常に多くの土器を出土した。また、上層堆積後も遺構は埋没しきらなかったようで、輪郭にそって浅い落込みが残り、黒色粘土質シルトが堆積していた。この落込みはSX832として後述する。

195～228は上層から出土した遺物である(図38・39、図版27・28)。198は小型丸底土器である。扁平な半球形の体部から発達した口縁部が内湾ぎみに立つ。口縁部の直下には粘土紐の接合痕が見られる。口縁部の内外面と体部外面をハケで、体部内面をヘラケズリの後、工具によるナデで調整する。199は直口壺の口縁部である。外面にはハケの後、横方向のヘラミガキを施し、さらに縦方向のヘラミガキを加えている。内面はナデの後、縦方向のヘラミガキをまばらに施している。200は壺の口頸部である。下方に肥厚させた口縁部は面をなしている。頸部の外面は縦方向のハケの後、縦方向のナデを施し、内面は横方向のハケで調整する。209は長頸壺の体部とみられる。肩部には矢印状の記号文が刻まれている。調整は外面がヘラミガキで、内面はハケの後、ナデを加えている。210は広口壺で、大きく張った体部をもつ。器面が荒れているが、体部外面の調整はヘラミガキで、内面

はユビナデを施す。生駒西麓産の胎土中には、粗粒の角閃石や長石粒を含む。

205は小型器台で、円錐形の脚台部には円形のスカシ孔を4方向に配する。受け部と脚台部のほぼ中央にはごく小さな円孔が貫通している。外面には横方向のヘラミガキを施し、シボリメがある内面はナデで調整する。207・208は碗形高杯の脚部である。短い脚柱部から裾部が鋭く屈曲して直線的に大きく広がる。いずれも円形のスカシ孔を4方向に配する。207は裾部外面に横方向のヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキを施しており、内面はハケで調整している。208は器面が荒れているが、裾部外面の調整はヘラミガキで、内面はナデであろう。高杯あるいは器台とみられる206は低い脚部から直線的に杯部が広がる。杯部外面と脚部内外面をユビオサエとナデで、杯部内面を横方向のヘラミガキで調整している。杯部内面には黒斑があり、胎土中には粗粒の長石とチャート粒を多く含む。202は壺または器台の口縁部である。上下に拡張する口縁端部は3面が面をなす方形形状を呈し、上面

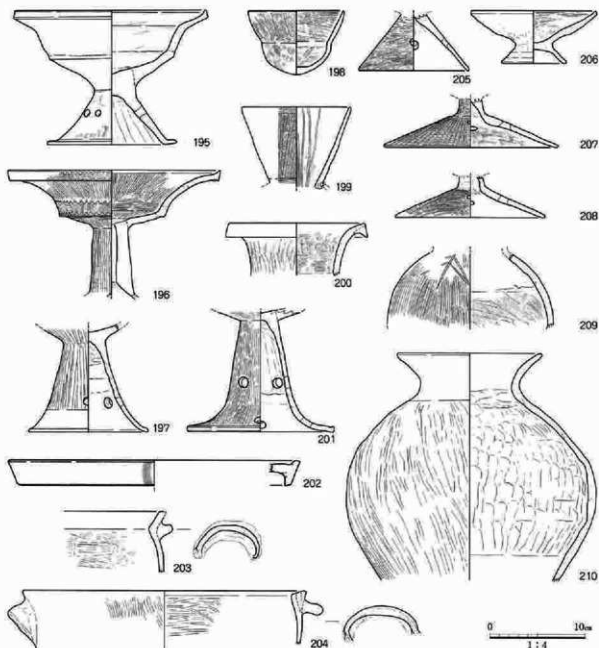


図38 SD807出土遺物実測図(1)

SD807上層(195~210)

には全周にわたり赤色顔料による彩色が施され、横面にも縦方向の帯状の彩色が1箇所ある。口縁部全体の1/6程度の破片であるため、彩色帯の配置については不明である。口縁部内面の調整はヘラミガキで、内外面には黒斑がある。

195~197・201は高杯である。195はほぼ完形の有段高杯で、脚部には2孔一対の円形スカシ孔を3方向に配する。器面が荒れているが、杯部内面の調整は横方向のナデで、脚部内外面は縦方向のハケの後、ナデを加える。杯部内外面にはススが付着している。196は受け部から大きく外湾して開く口縁部と、柱状の脚柱部をもつ。上方に拡張して面をなす口縁端部と、受け部に近い口縁部には山形を呈する多条の波状文が巡る。杯底部中央には、中空の脚柱部の上端が露出しているが、焼成

はその部分にも及んでいることから、粘土円盤により充填されていたか否かは不明である。杯部外面を縦方向のハケで、内面をハケの後、ヘラミガキで調整する。脚柱部の外面には横方向のナデの後、ヘラミガキを施し、内面はナデで調整する。197・201は裾部が湾曲して広がる脚部である。197は裾部に円形スカシ孔を5方向に配する。裾部に横方向のナデを施し、脚柱部外面は縦方向のヘラミガキで、内面を横方向のナデで調整する。裾部が大きく広がる201は3個一對の円形スカシ孔を2方向に配する。外面はヘラミガキ、内面はナデで調整しており、内面には粘土紐の接合痕とシボリメがある。

211～219・221～223は甕である。211・216・217・222は中ほどが張る球形に近い体部から、口縁部が外湾ぎみに開く。217は平底を、より球彫化の進行している211は尖り底を有しており、216・222の底部はさらに丸底に近いと考えられる。体部外面に残るタタキメは216・217がより粗く、内面はハケの後にナデを施す222を除き、いずれもナデで調整する。216・217・222の外面にはススが付着しており、217の胎土中には細砂～極細礫大の長石粒を多量に含む。

214・218・219は直口ぎみに立つ口縁部をもつ小型の甕である。尖り底に近いごく小さな平底を有する214・218は、タタキが底部から口縁部にまで及ぶ。214は口縁部の内外面を、218は内面のみを粗いハケで調整し、体部の外面には底部から口縁部方向への粗いハケをタタキメの上に加えている。体部内面は214が縦方向のユビナデで、218がナデとユビオサエで調整し、214の底部付近には工具痕が見られる。いずれも器壁が厚く、外面にはススが付着している。完形の219は小さな平底を有する。体部外面には粗いタタキメをそのまま残し、底部の周囲にヘラケズリを施す。体部の内面はハケの後、ナデにより調整する。体部外面から口縁部にかけてススが付着している。

213・215・221は出土層位が不明であるが、上層に伴うものと考えられる。213は212とともに、肩の張る体部から頸部が鋭く屈曲し、大きく外反する口縁部の端部を丸くおさめている。215は体部の内外面をナデで調整しているが、粘土紐の接合痕が明瞭に認められる。受口状の口縁部をもつ221は、体部外面をナデで、内面をユビオサエとナデで調整する。体部外面から口縁部内外面には全体にススが付着している。口縁部は213が外面をヨコナデで、内面をハケの後、ヨコナデで調整しており、212は内外面ともヨコナデを施す。体部については、213が外面をタタキメの上から粗いハケで、内面をヘラケズリで調整しており、212は内外面ともナデを施す。213の胎土は粗く、長石・チャート粒を多く含んでおり、212の体部外面にはススが付着している。

大型の223の口縁部は体部から鋭く屈曲して外反し、端部は面をなす。体部外面はタタキメの上からナデを加えている。内面にはハケの後、ナデを加えているが、下半には部分的にヘラケズリの痕跡が残る。

225は蓋で、2孔一對の紐孔を2方向に配している。外面を縦方向のヘラミガキで、内面をハケで調整する。

203・204・220・224・226～228は鉢である。203・204は耳状把手を2方向に貼付けた大型のものである。203の口縁部は体部から鋭く屈曲して外反しており、端部は面をなす。体部外面の調整は不明であるが、内面にはハケを施す。204は直口の口縁部の端部を肥厚させており、上面は広い面をなす。内外面ともヘラミガキで調整している。いずれも胎土中には長石・チャート・雲母粒などを含

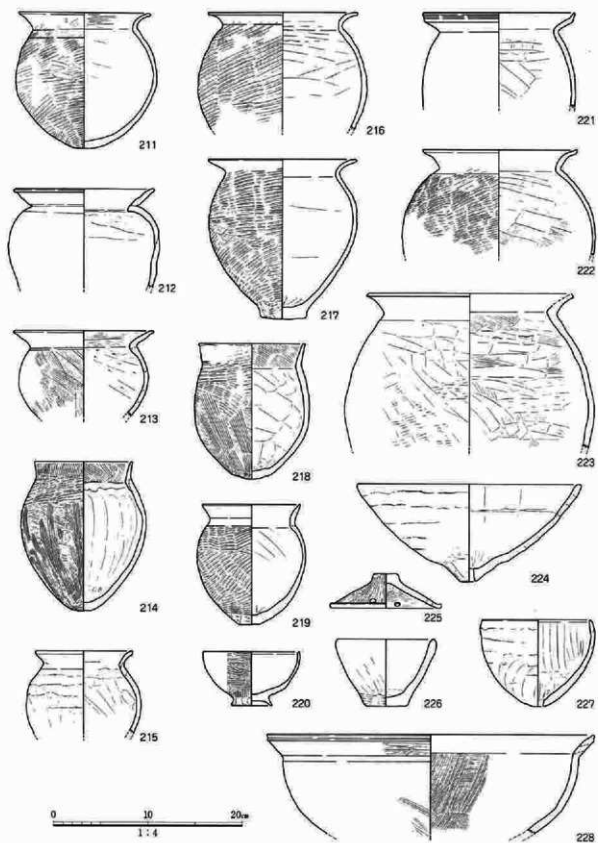


图39 SD807出土器物实测图(2)

SD807上層(211~228)

み、203はにぶい黄橙色、204は浅黄橙色を呈する。220は碗形の体部に高台が付く。体部の外面は横方向のヘラミガキを施し、内面はナデで調整しており、外面には部分的にスガが付着している。生駒西麓産の精良な胎土を用いている。224は穿孔のある突出した底部をもつ。器面が荒れているが、外面の調整はナデで、内面は板状工具によるナデである。焼成前に外から内方向に穿たれた孔の周囲は、ヘラケズリにより面取られて、多角錐状になっている。全体に作りは粗雑で、内外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残り、胎土中には砂粒を多く含む。226の体部は平底から直線的に広がる。外面はタタキメの上からナデを加え、内面は横方向のナデで調整しており、外面には黒斑がある。胎土は粗粒の長石やチャート粒を多く含む特徴のあるもので、浅黄色を呈する。227も224と同じく焼成前に内方向に穿たれた孔がある。内外面ともナデとユビオサエにより調整しているが、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。大型の228は体部下半を欠損しているが、平底もしくは脚台を有するものであろう。碗状の体部から外反する口縁の端部は、凹線状を呈している。体部の内外面をヘラミガキで調整しており、口縁部には黒斑がある。

229～304は中・下層出土の遺物である(図40～45、図版23～27)。233～235・237・240～242は広口壺で、239・232はその頸部および体部とみられる。233・234は口縁端部を肥厚させるが加飾しない。いずれも頸部の外面をハケで、内面をナデで調整しており、234の内面には工具痕が見られる。235・237・240・241は下方に拡張した口縁部を加飾している。235は綾杉状の列点文を、237は部分的に竹管文を配し、241は4条の凹線文の上に3個1組の円形竹管浮文をおそらく6方向に貼付けている。235は頸部にも同じ原体による列点文を配しており、頸部外面をハケで、内面を横方向のナデで調整する。237は頸部以下の外面を縦方向のハケで、内面を横方向のハケの後、ユビオサエとナデで調整する。239は外面を縦方向のヘラミガキで調整し、下端にはさらに横方向のヘラミガキを施す。241は頸部外面を縦方向のハケ、内面をナデで調整しており、胎土は生駒西麓産である。張りの強い球形の体部をもつ242は、肩部に「S」字を裏返した形状の記号文が刻まれている。上下に拡張する口縁端部は面をなし、底部は木葉底である。外面には黒斑がある。232は強く張る体部の外面をヘラミガキで、内面をハケで調整している。胎土は生駒西麓産である。出土層位は不明であるが、中・下層に伴う資料であろう。

231は無頸壺である。体部は張りが強く、上半には2個一対の紐孔を2方向に配する。やや肥厚させた口縁部の端部は内傾する面をなす。外面の調整は体部半ばに横方向の、その上下には縦方向のヘラミガキを施す。内面はナデにより調整するが、上部にはヘラケズリの痕跡が残る。体部の外面には黒斑がある。

229・230は小型の、251は大型の短頸壺である。229は外方向につまみ出した口縁端部が小さな面をなす。頸部の内外面には縦方向のヘラミガキを、体部の外面にはハケの後、縦方向のヘラミガキを施し、内面はていねいなナデで調整している。体部の内面には黒斑がある。胎土中には粗粒の長石を含み、橙色を呈する。230は外面をハケで調整した後、体部上半以上にはナデを、下半にはヘラミガキもしくはミガキ風のナデを加える。内面は頸部を横方向のナデで、体部をユビオサエと縦方向のナデで調整している。体部内外面には黒斑がある。精良な胎土中には長石・石英・雲母・チャート粒な

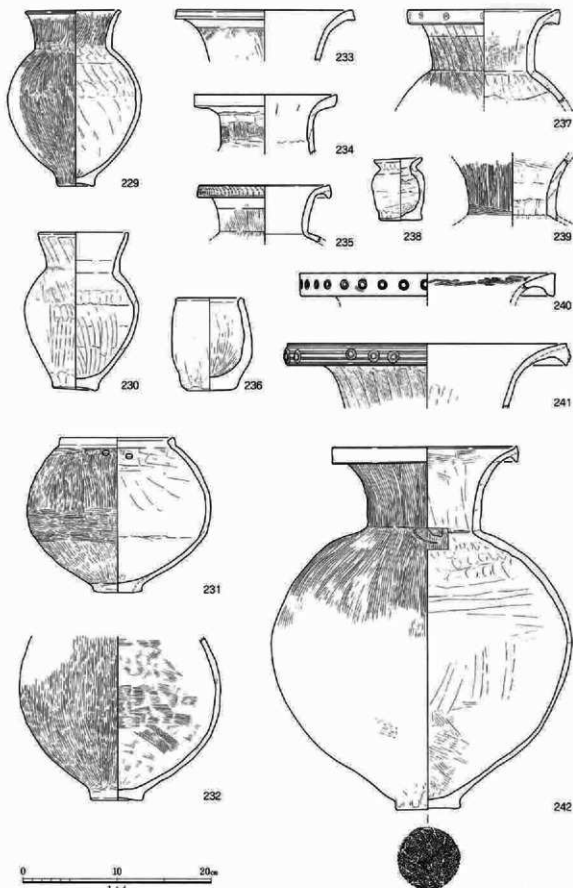


图40 SD807出土遗物实测图(3)

SD807中、下層(229~242)

どを含み、にぶい黄褐色を呈する。251は頸部外面をハケで調整し、ヘラミガキを部分的に加える。体部外面にはヘラミガキを施すが、器壁の凹凸が著しく全体に粗雑な作りである。内面はハケの後、ナデとユビオサエで調整しており、体部内外面には黒斑がある。

243～250は長頸壺である。全体の器形が復元できるものでは、口頸部長が器高の1/2を上回るもの244、ほぼ等しいもの248、下回るもの245があるが、その他についても1/2前後かやや下回るものが大半であるとみられる。頸部は244・249など直立ぎみに立つものと、246など外反するものがあり、体部は球形のもの245・248と扁平なもの244がある。口縁端部は243・244・246・248など丸くおさめるものと、245・247・250など面をなすものがある。243は頸部外面をヘラミガキ、内面を横方向のナデとユビオサエで調整する。胎土中には長石・チャート粒を比較的多く含み、褐色を呈する。244は頸部と扁平な体部の境に、帯状に塗布した赤色顔料が残る。外面の調整は頸部がハケの後、ヘラミガキで、体部はハケの後、底部に近い部分を除き横方向のヘラミガキを施す。内面はハケの後、底部に近い部分を除きナデを加える。胎土中には粒径の大きい長石やチャートを多く含み、にぶい褐色を呈する。245は、体部の上端に竹管による記号文があり、底部はドーナツ状を呈する。外面はヘラミガキで、内面はユビオサエとナデで調整する。胎土は精良で、浅黄色を呈する。246は頸部外面をヘラミガキ、内面をナデとユビオサエで調整する。胎土中にはチャート・シャモット、粒径の大きい長石粒などを含み、にぶい黄褐色を呈する。247は頸部の上半にジグザグ状の記号文が刻まれている。頸部および体部の外面はハケの後、ヘラミガキを施すが、ハケメの残る部分が多く調整は粗い。内面の調整は頸部がハケの後、ユビナデを加えており、体部はナデとみられる。胎土は精良であり、明黄褐色を呈する。248は器面が荒れているが、頸部および体部の外面はハケの後、ヘラミガキを施し、内面はハケの後、ナデにより調整している。胎土中には微細な長石・チャート・シャモット粒などを含み、灰黄色を呈する。249は頸部と体部との境に断面方形の突帯を段状に巡らせている。器壁は厚く、外面は縦方向のハケを施し、内面は上半が縦方向のユビナデとユビオサエ、下半が横方向のナデとユビオサエにより調整する。250の口縁部には描直線文を意識したと考えられる1帯のハケが巡る。頸部と体部の外面は縦方向のハケで、内面はナデで調整する。244の口縁部と体部外面の中ほどにはスガが付着し、245の底部外面、248の内外面の広い範囲、250の外面には黒斑がある。これらの長頸壺は、244・249のように河内V-1～2様式に属する資料から、245など河内V-3様式に属する資料まで型式幅をもった資料から構成されているといえよう。

238はミニチュアの壺である。器壁は厚く、内外面をユビオサエとナデで調整する。体部外面には黒斑がある。236は器壁の厚い小型の鉢で、いいだこ壺の可能性もある。内外面の調整は縦方向のナデで、外面には底部を中心に黒斑が見られる。

252～265・301・303は甕である。小型の255・260～265は口縁部に最大径がある。260・263・264は下すばまりの体部をもち、強く外反する口縁の端部を丸くおさめている。262と同じように外方向に突出した底部をもつ260は、体部外面にハケの後、ナデを加え、内面は板状工具によるナデで調整する。255・261・262・265は体部の上半がやや膨らみをもつ。口縁端部は丸くおさめる262を除き、面をなしており、255は上端を、265は下端を軽くつまみ出している。255は体部外面の上半に

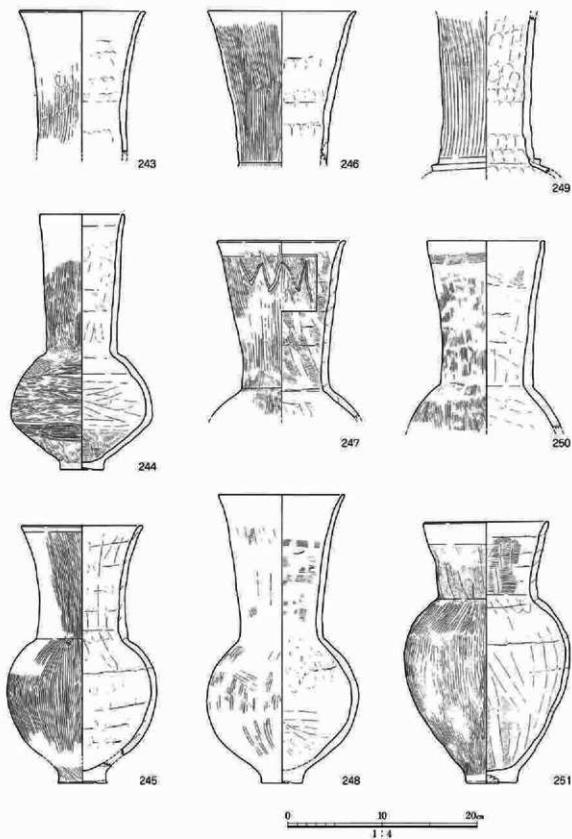


图41 SD807出土遺物実測図(4)

SD807中・下層(243~251)

タタキメを残し、下半にはヘラケズリを施す。内面はハケの後、上半にナデを加えている。261は体部外面にタタキメを残し、内面はハケで調整する。262は体部外面をナデで、底部外面と体部内面を板状工具によるナデで調整している。265は体部外面をハケ、内面をナデで調整する。255の体部外面と、262の口縁部の一部および体部外面の全体にはススの付着が、265の体部内外面には炭素の吸着が認められ、261は2次の焼成を受けている。

中型の甕252～254・256～259は体部の中ほどから上部にかけてに最大径がある。外反する口縁端部は、257と中央のやや凹む252が面をなし、254・256・259は丸くおさめている。252は口縁部の外面を縦方向の粗いハケで、内面を原体の異なる横方向のハケで調整する。体部外面には螺旋状のタタキメを残し、内面は斜め方向のハケを施す。胎土中には長石・雲母粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。受口状の口縁部をもつ253は、体部外面に螺旋状のタタキメを残し、内面にはハケの後、ナデを加える。胎土中には長石・雲母粒のほか、微細な角閃石粒を少量含み、黄褐色を呈する。254は口縁部内外面にハケの後、ヨコナデを加える。体部外面にはタタキメを残し、内面はハケの後、ユビナデで調整している。256は器面が荒れているが、体部外面をハケで調整した後、上半はナデで、下半はヘラミガキ風のナデで調整している。内面の調整は上半が板状工具によるナデで、下半はヘラケズリである。257は口縁部の外面をヨコナデで、内面をハケの後、ヨコナデで調整する。体部外面にはタタキメを残し、内面はナデで調整している。生駒西麓産胎土の258は、体部外面の上半にはタタキメを残し、下半は板状工具によるナデを加えている。内面は分割成形後の接合部とみられる部分を境に、上半を不定方向のナデで、下半をハケで調整する。底部がドーナツ状を呈する259は、体部外面にタタキメを残し、内面は板状工具によるナデで調整する。胎土中には雲母や、細礫の長石・チャート粒などを含む。254の体部内面には黒斑が、252・259の体部外面、254・256・257の口縁部と体部外面にはススの付着が認められ、特に254・257は広範囲に及ぶ。

303は受口状の口縁部をもち、下端が鋭い稜をなす端部には2条の縦凹線が巡る。口縁部の内外面には強いヨコナデを加え、体部外面は粗いタタキの後、上半は縦方向の、下半は不定方向のハケで調整しており、内面はヘラケズリを施す。暗灰黄色を呈する胎土中には粒径の大きい多量の角閃石や長石・雲母粒などを含むが、いわゆる生駒西麓産のものとはやや異質な印象を受ける。口縁部および体部外面には広い範囲でススが付着している。器形やハケを中心とする調整は、丹波地域の影響による可能性があるが、タタキを施す点などは畿内の技法との折衷の結果とも考えうる。

301は生駒西麓産胎土の庄内式甕で、混入資料であろう。頸部は鋭く屈曲し、外反する口縁部の端部はつまみ上げる。体部外面は細筋のタタキメの上にハケを施し、内面はヘラケズリで調整する。

266～284・286～291・293・294は高杯である。266～270・272～274・279・284・286～288は外反ぎみに立つ短い口縁部と受け部の境が稜をなす第Ⅴ様式に通なもので、275～278はその脚台であろう。それらのうち、口縁端部については、266・270・279が小さく肥厚させており、267～269・272～274は面をなしている。脚部については、267・278など裾部が緩やかに開く長い柱状のものと、266・274など短い円錐台形のものがあり、いずれも接合部分は円盤充填法による。スカシ孔は3方向272、4方向266・277、5方向267・268・275、7方向278のものがある。2段に配する

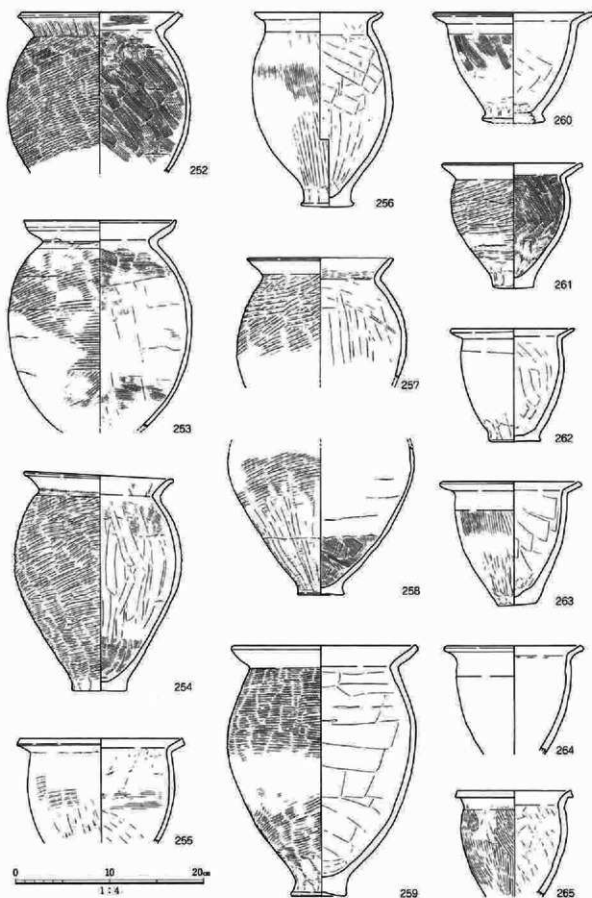


图42

图42 SD807出土器物实测图(5)
SD807中、下層(252~265)

ものでは、上段には単独のスカシ孔を2方向に、下段には2孔一組みのスカシ孔を3方向に穿つ279、4方向の円形スカシ孔を互い違いに穿つ284がある。1段に配するものには、3孔一組みのスカシ孔を2方向に穿つ276がある。色調は橙色を呈するもの266・270・273・275・278・284やぶい橙色のもの268・272・274・276・279が多く、ほかに浅黄色のもの269・286・288、ぶい黄橙色のもの267・287などがある。また、268・269・273・286の口縁部や272の裾端部には黒斑が、276の外面には薄いスの付着が認められる。

266は器面が荒れているが受け部内外面の調整はヘラミガキで、内面の口縁部との境にはヘラミガキの原体の球形の当たりが見られる。脚部の調整は外面がハケの後、上部を中心にヘラミガキを施しており、内面はナデによる。267は外面をハケの後、ヘラミガキで調整し、口縁部にはヨコナデの上から、ジグザグ状の暗文風のヘラミガキを施す。内面は杯部が放射状のヘラミガキで、脚部はユビオサエとユビナデで調整する。胎土中には長石・チャート・雲母粒を含む。268は受け部と脚部の外面をハケで調整し、受け部内面には横方向の粗いハケの後、暗文風の放射状ヘラミガキをまばらに施している。脚部内面はユビナデで調整する。胎土は精良であるが、整形や調整はやや粗い。269は口縁部内外面をヨコナデで調整した後、横方向のヘラミガキをまばらに施す。受け部外面は口縁部に近い部分を横方向の、それ以下を縦方向のヘラミガキで調整し、内面には放射状のヘラミガキを施す。脚部は外面がヘラミガキで、内面は脚柱部がユビオサエとナデ、裾部をハケで調整する。272は器面が荒れているが、受け部外面の調整はヘラミガキとみられる。273は受け部内外面をハケ調整した後、外面には縦方向の、内面には横方向のヘラミガキを施し、内面にはさらに放射状のヘラミガキを加える。脚部は外面がヘラミガキ、内面をユビオサエとナデで調整する。274は杯部が大きく傾斜し、口縁部は著しく歪んでおり、脚部にはスカシ孔をもたない。2次の焼成を受けているとみられ器面が荒れているが、受け部の内外面にヘラミガキを施し、脚部外面はヘラミガキ、内面はユビナデで調整している。270は口縁部の内外面をヨコナデで調整した後、外面には横方向のヘラミガキを加える。受け部外面は上部に粗いハケ、下部は原体の異なる細かいハケで調整した後、上部は横方向の、下部はまばらな縦方向のヘラミガキを施す。受け部内面の調整はハケの後、放射状のヘラミガキを施す。脚部の調整は外面がヘラミガキで、内面がユビオサエとナデである。ほぼ完形の279は口縁端部を、ヨコナデで生じた余分の胎土を外側に巻き込むことでやや肥厚させている。裾端部は上方にやや肥厚させ凹面をなす。受け部外面は横方向のハケの後、縦方向のハケを施し、さらに下部を中心にヘラミガキを加える。内面はハケおよびナデによる調整の後、放射状のヘラミガキを施す。脚部は内外面をハケで調整した後、外面にはヘラミガキを施しており、内面にはシボリメが顕著に見られる。284は口縁部に3本一組の棒状浮文を10～11組配し、受け部との境には断面三角形の突帯を貼付けている。上方に拡張した裾端部は面をなす。受け部の内外面と脚部外面の調整はヘラミガキで、脚柱部内面はユビナデ、裾部内面にはハケの後に横方向のナデを施す。286は杯部および脚部の外面に縦方向のヘラミガキを施し、受け部と口縁部の屈曲部には横方向のヘラミガキを加える。内面は杯部が放射状のヘラミガキで、脚部にはユビナデを施す。287は器壁が厚く、外面には受け部と口縁部の接合痕が残るなど、粗雑な作りである。受け部外面はハケの後、上部に板状工具によるナデを加え、内面には放

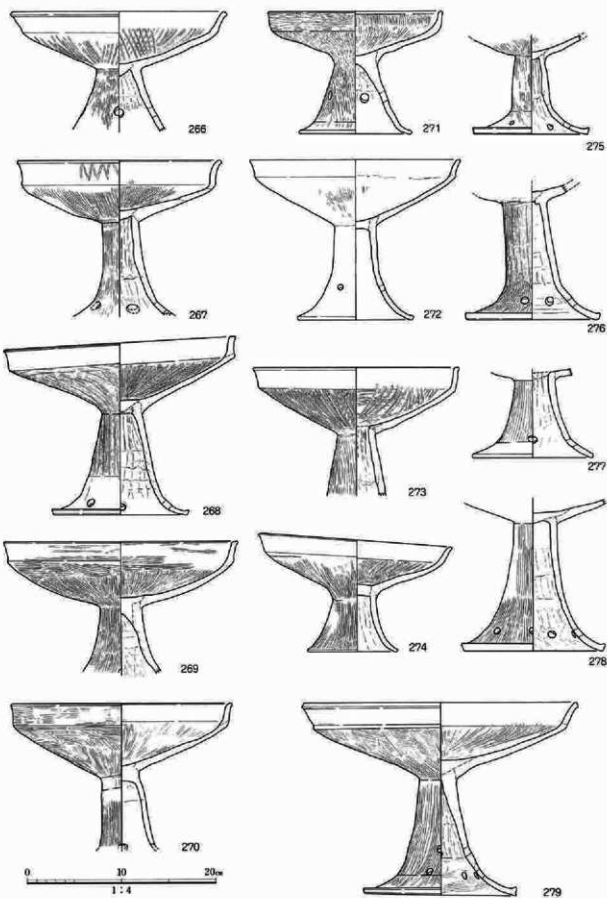


图43 SD807出土遗物实测图(6)
SD807中·下層(266~279)

射状のヘラミガキを施す。288は受け部の内外面にハケの後、ヘラミガキを施す。

275・276・278は上方にやや拡張した裾端部が面をなす。275は杯部の内外面にヘラミガキを施し、脚部外面をハケの後、ヘラミガキで、内面を板状工具によるナデで調整する。276の脚部外面にはハケの後、裾部を中心にヘラミガキを施す。内面は脚柱部がヘラケズリで、裾部はナデである。278は2次的な焼成を受けており器面が荒れているが、脚部外面の調整はヘラミガキ、内面はナデとみられる。生駒西麓産とみられる胎土はやや粗く、極粗粒砂大の長石や角閃石粒を多く含む。277は裾端部が面をなしており、脚柱部の調整は外面がヘラミガキ、内面がナデである。出土層位は不明であるが、中・下層に伴うものであろう。

271は直線的に開く受け部から、明瞭な後をもたず短い口縁部が立つもので、口縁端部は丸くおさめている。円錐台形の太い脚部には円形スカシ孔を5方向に配しており、受け部との接合は組合わせ法による。杯部の内面には放射状のヘラミガキを施し、外面は口縁部を横方向の、受け部を縦方向のヘラミガキで調整する。脚部は外面にヘラミガキを、内面にナデを施す。胎土は精良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

280～282は碗形高杯である。いずれも杯部と脚部の接合は組合わせ法による。280は杯部が浅く、長い柱状の脚柱部から裾部がなだらかに開く。裾部には4方向の円形スカシ孔を互い違いに上下2段に配し、端部は面をなす。杯部は外面をハケで調整した後、内外面にヘラミガキを施す。脚部は外面をヘラミガキ、内面をナデで調整する。杯部外面と裾端部には黒斑がある。281は影らみのある杯部をもち、内外面をヘラミガキで調整する。小型の282は深い杯部と「ハ」の字状に広がる脚部をもち、裾部には円形スカシ孔を4方向に配する。杯部内外面および脚部外面の調整はヘラミガキで、脚部内面はナデである。胎土はいずれも精良で、色調は282がにぶい橙色、281はにぶい黄色、280はにぶい黄橙色を呈する。283は長い柱状の脚部をもつ有段高杯である。杯部と脚部の接合部は円盤充填法による。杯部内外面および脚部外面は、ハケおよびナデの後、ヘラミガキを施しており、脚部内面はナデで調整する。脚柱部および裾部の上端にはヘラミガキやハケ調整の原体の当りがあり、色調は浅黄橙色を呈する。289は碗形の杯部から口縁部が大きく外反し、端部を上下に肥厚させている。柱状の脚柱部からなだらかに開く裾部には円形スカシ孔を3方向に配し、端部は丸くおさめている。杯部内面は縦方向と横方向のヘラミガキを交互に施しており、外面はハケで調整する。脚部の外面はハケ、内面はナデを施す。胎土は精良で、色調はにぶい橙色を呈する。Ⅳ様式以来の水平口縁高杯の退化したものとみられ、河内Ⅴ-0～1様式に属するものであろう。290は「ハ」の字状に湾曲して広がる短い脚部で、裾端部はヨコナデにより凹み、沈線状となっている。器壁は厚く、色調は灰黄褐色を呈しており、外面にはススが薄く付着する。291は裾部に円形スカシ孔を14方向に配しており、上下に肥厚させた端部が広い面をなすなどⅣ様式以来の古い要素をもつ。器壁は厚く、脚部の外面をナデ、内面をヘラケズリで調整し、杯部内面にはナデを施す。杯部と脚部の間に充填した円盤の脚部側の面には、脚部内面をヘラケズリした際の工具痕が弧状に残る。裾端部には黒斑が認められ、胎土中には長石・雲母粒を多く含む。293・294は多条の沈線で加飾した高杯の脚部である。やや上方に肥厚させた294の裾端部は面をなし、沈線文帯の上下には三角形の刺突列点文を配する。293は3方向に、294

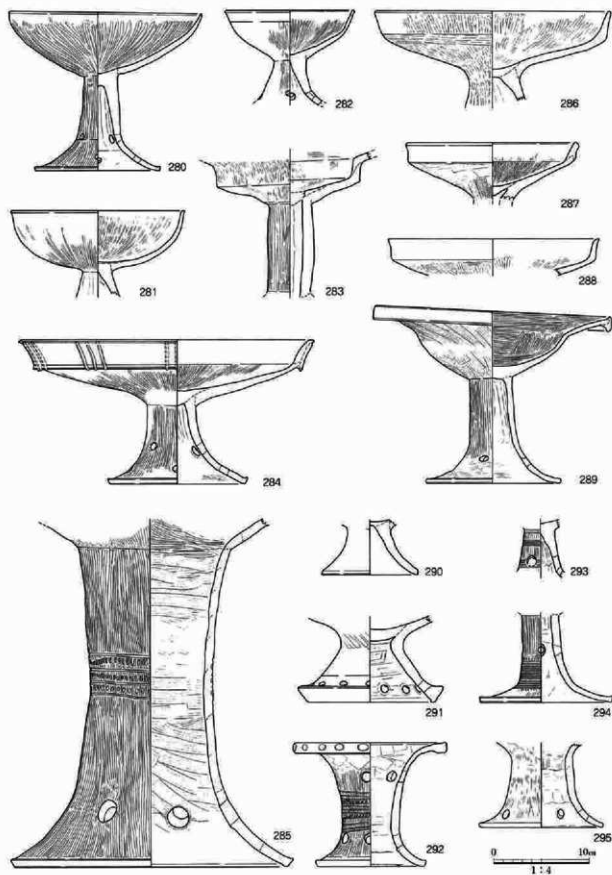


图44 SD807出土遗物实测图(7)

SD807中·下層(280~295)

は4方向に円形スカシ孔を穿つ。脚部外面をヘラミガキで調整し、294の内面には板状工具によるナデを加えている。いずれも胎土は精良で、微細な長石・チャート・雲母粒を含む。

285・292・295は器台である。大型の285は体部から鋭く屈曲して外反する受け部をもち、体部には4条の沈線の間に3段の刺突列点文を配する。円形のスカシ孔を5方向に配する裾部には、刺突列点文を施した後、すり消した痕跡が見られる。外面はハケの後、ヘラミガキを施す。粘土紐の接合痕が残る内面は、横方向の粗いハケの後、体部上半以上にヘラミガキを、体部中ほどと裾部に横方向のナデを加える。292は受け部が大きく外反し、肥厚して面をなす口縁端部には円形浮文を配する。原体の異なる2段の刺突列点文を間に配した11条の沈線で加飾する体部には、受け部と裾部の境にそれぞれ4方向の円形スカシ孔が穿たれている。外面はナデの後、ヘラミガキを施し、内面はナデで調整する。295は大きく広がる裾部に5方向の円形スカシ孔を配している。内外面ともハケの後、ナデを加えており、受け部と体部の境の内面には接合痕が明瞭に残る。いずれも長石・チャート・雲母粒などを含む精良な胎土を用い、色調は285が橙色、292はにぶい橙色、295はにぶい黄橙色を呈する。これらの器台には、無文化したもののや、凹線が退化して沈線状となったものが見られること、また裾部・体部・受け部の区別が明確になりつつあることなどから、河内V-0～2様式に属するものと考えられる。

296～300は壺である。つまみは296・300の天井部が大きく凹むのに対し、297・299は平坦面をなす。296は外面を不定方向のナデ、内面をハケで調整しており、297は内外面をハケで調整する。299は2孔一対の紐孔を内面に向けて2箇所穿つ。つまみと天井部外面をヘラミガキで、内面をナデで調整する。上方につまみ上げた口縁端部には工具痕が部分的に残る。300は外面をハケで、内面をナデで調整する。298は2孔一対の紐孔をおそらく2方向に配する。扁平な天井部と口縁部の間には太い凹線文が巡り、全面をユビナデにより調整する。出土層位は不明であるが、中・下層に属する資料

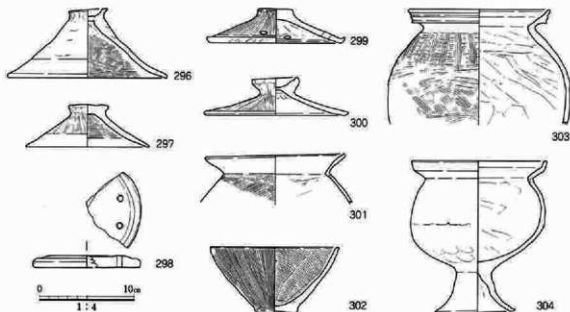


図45 SD807出土遺物実測図(8)

SD807中・下層(296～304)

であると考えられる。これらの蓋のうち、296・299の外面には黒斑があり、296・298は内面に、297は口縁部内外面と天井部内面に、300は口縁部にススが付着している。

302は碗形の鉢である。外面を縦方向の、内面をクモの巣状のハケで調整する。内外面には薄い黒斑が認められる。304は「ハ」の字状に広がる脚台と、受口の口縁部をもつ台付鉢である。体部外面はユビナデで、内面はハケの後、板状工具によるナデで調整しており、脚部は内外面をナデで調整する。胎土中には多量の長石・黒雲母や、少量の微細な角閃石粒を含み、色調はにぶい黄色を呈する。

上層から出土した土器は、205・207・208など庄内期Ⅳ～Ⅴとみられる新しい資料を一部に含むが、大半は、河内第Ⅵ様式から庄内期Ⅱに属する資料であると考えられる。中・下層出土の土器群は、河内Ⅴ-0～1様式の資料を少量含みながら、長原遺跡SB01出土品[大阪市文化財協会1978]を基準資料とする河内Ⅴ-2様式、あるいは、それよりもやや型式的に新しい要素のある資料を主体としており、瓜破北遺跡SE01・02[大阪市文化財協会1981]出土品を基準資料とする河内Ⅴ-3様式までは降らないと考えられる。このことから、SD807は河内Ⅴ-2様式の段階に掘られ、最終的に庄内期に埋没したものと考えられる。

また、出土土器の組成の面では長原遺跡SB01や瓜破北遺跡SE01・02出土資料では量的に乏しかった長頸壺や中型甕などを含めて、この地域の弥生時代後期前葉から中葉にかけての土器様式を明らかにする上で貴重な資料であるといえよう。

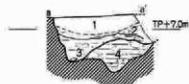
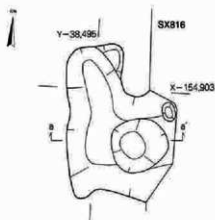
5) その他の遺構

SX801 調査区西南隅で検出された不整形な落込みで、東西4.7m以上、南北1.9m以上、深さ約0.4m(図19)である。埋土は黒色極細粒砂混りシルトで、内部から弥生土器・庄内式土器が出土した。

308(図47)は生駒西麓産胎土の高杯、あるいは台付鉢の脚台部である。裾部には円形スカシ孔を8方向に穿ち、上下に肥厚させた端部は面をなす。脚柱部には8条一組の沈線状の退化凹線を2帯巡らせる。裾部外面の調整はヘラミガキで、内面はヘラケズリである。外面には黒斑が見られる。裾端部に凹線文を配さず、脚柱部の凹線文が沈線化していることなどからみて、Ⅳ様式末からⅤ様式初め頃にかけての資料とみられる。309は有段の高杯の脚部である。裾部の下段にはおそらく6方向の、上段には4方向の円形スカシ孔を穿つ。調整は外面がヘラケズリで、内面はナデである。310は生駒西麓産胎土の甕である。肩の張らない体部から、口縁部が外湾ぎみに立ち、外方に肥厚させた端部は面をなす。タタキは口縁部にまで及んでおり、内面は口縁部を横方向のハケで、胴部をユビオサエとナデで調整する。庄内期前後の資料かとみられる。このように弥生時代中期末から終末期までの遺物が含まれており、この間に埋没したものと考えられる。

SX816 調査区東端で検出された土壌状の遺構で、東西1.2m以上、南北1.65m、深さ0.59mである(図46)。少量の弥生土器が出土した。

314(図47)は広口短頸壺である。口縁部には紐孔を3方向に穿ち、上下に肥厚させた端部に1条の凹線が巡る。体部内外面をハケで調整しており、頸部内面には工具痕が残る。口縁部の内外面にはススが付着している。河内Ⅳ-3様式前後の資料とみられる。



- 1: オリーブ黒色細粒砂
- 2: 暗オリーブ黒色シルト混り極細粒砂
(第8層の大型の偽埋を含む)
- 3: オリーブ黒色シルト質極細粒砂
(多量の炭・第8層の大型の偽埋を含む)
- 4: オリーブ灰色細粒砂混り粘土質シルト
(多量の炭・第8層の大型の偽埋を含む)

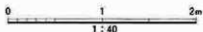


図46 SX816実測図

SX821 SB802の北東で検出された溝状の遺構で、東西3.5m以上、南北約1mで、深さは0.25mである(図48、図版9)。埋土はオリーブ黒色シルト質極細粒砂で、偽埋等の顕著な堆積構造はみられず、周囲から土砂が流入して徐々に埋没したものとみられた。埋土中からは弥生土器が出土したが、出土レベルはまちまちで、一括して投棄されたという状態ではなかった。

316(図49、図版21)は蓋で、調整は内外面ともハケの後、ヘラミガキを施す。胎土中には雲母粒を多く含む。317は胎土が生駒西麓産の無頸壺である。段状に肥厚させた口縁端部と体部には簾状文が施されており、体部の簾状文には幅広の原体を用いる。318は胎土が生駒西麓産の壺で、大きく外反する短い口縁部の端部は下方にやや肥厚する。胴部の調整は内外面ともヘラミガキである。319は胎土が生駒西麓産の鉢で、肥厚させた口縁端部と体部外面に簾状文を施す。体部の調整は内外面がヘラミガキで、胎土中には角閃石粒と粒径の大きい長石粒を含む。これらは河内Ⅳ-3様式に属する。

SX832 SD807が埋没に残った落込みに、オリーブ黒色細

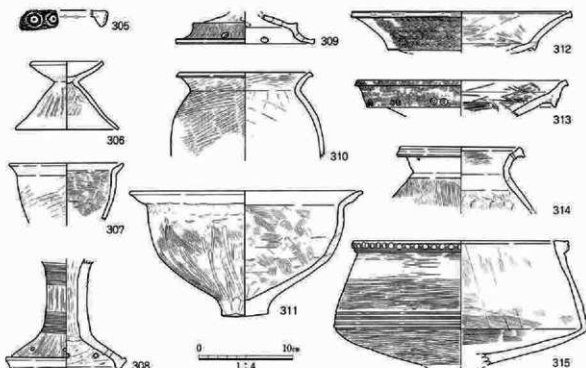


図47 その他の遺構出土遺物実測図

SX801(308~310)、SX816(314)、SX834(312)、SX835(306)、SX836(311)、SX837(307)
SX838(305)、SX840(315)、SP896(313)

粒砂混りシルトが堆積した遺構である(図58)。主軸はSD807と同じ北北西方向で、幅は最大で5.5m、深さは最大で0.2mである。多くの弥生土器・庄内式土器が出土した。

320・321(図50、図版28)はV様式系の小型の甕である。320は最大径が口縁部にあり、底部は平底で突出している。受口状の口縁部の下端にはにぶい沈線が1条走る。調整は口縁部内外面がハケの後、ナデで、体部は外面がハケ、内面はナデである。321の口縁

部は短く直口ぎみに立上がり、底部は尖底に近い。口縁部および体部の調整は、外面がタタキの後に縦方向の粗いハケである。口縁部の調整は内面が斜め方向の粗いハケで、直下には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。体部の調整は内面の上半が斜め方向のナデ、下半が縦方向のユビナデで、底部の付近には工具痕が見られる。器壁は厚く、外面にはススが附着している。322・323は庄内式甕で、胎土は精良な生駒西麓産である。ともに頸部が鋭く屈曲し、口縁端部をつまみ上げている。体部外面には細筋のタタキメが残り、調整は口縁部内外面がヨコナデ、内面はヘラケズリである。322の体部外面の一部はタタキの後、ハケ調整している。325・327は鉢である。脚台が付く325は扁平な体部から口縁部が内湾ぎみに立上がる。外面には横方向の、内面には縦方向のヘラミガキを密に施す。外面には黒斑がある。327は口径が38.8cmに復元された大型品で、口縁部は強いヨコナデにより中ほどが段状を

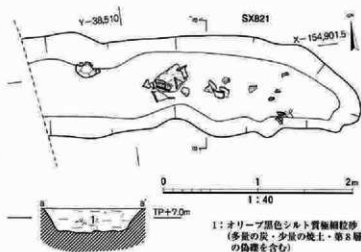


図48 SX821実測図

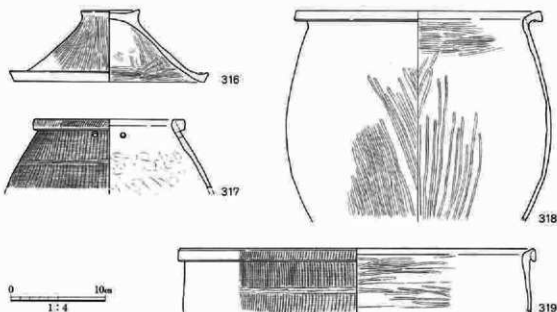


図49 SX821出土遺物実測図
SX821(316~319)

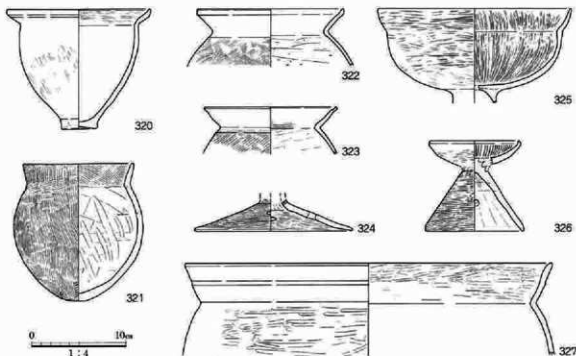


図50 SX832出土遺物実測図
SX832 (320~327)

呈している。口縁部の内面と体部の外面を横方向のヘラミガキで、体部の内面をナデで調整する。324は碗形高杯の脚台部とみられ、短い脚柱部と直線的に広がる裾部の間は強く屈曲する。裾部には円形スカシ孔を4方向に穿つ。調整は外面が横方向の細かいヘラミガキで、内面はハケである。326は小型器台である。端部をつまみ上げた皿状の受け部と、円形のスカシ孔を2方向に穿つ円錐形の台部からなる。受け部と台部の外面は細かな横方向のヘラミガキを、受け部内面は放射状のヘラミガキを施し、台部内面はナデにより調整する。

これらの土器は320など一部に古い要素を残す資料が含まれるが、組成や調整方法などから、大半は庄内式の土器様式がすでに定着した段階のものと評価できる。庄内期Ⅲ前後の資料といえよう。

SX834 調査区中央の南壁沿いで検出された遺構である(図19)。東西1.40m、南北0.7m以上、深さは約0.3mである。埋土は黒色粘土質シルトで、少量の庄内式土器が出土した。

312(図47)は有段高杯の杯部である。受け部から段をなし大きく外湾する口縁部には7条一単位の櫛描波状文を6帯巡らせ、面をなす口縁端部にも櫛描波状文を配する。内面の調整はハケの後、ヘラミガキである。胎土中には長石・雲母粒などを含む。庄内期の資料とみられる。

SX835 調査区北東隅付近で検出した遺構である(図19)。東西0.55m、南北0.7m以上、深さは0.20mで、埋土は黒色極細粒砂である。少量の庄内式土器が出土した。

306(図47)は庄内式の小型器台である。円錐状の台部と、端部をつまみ上げた受け部を有する。器面が荒れているが、台部の調整は内外面ともヘラケズリの後、ナデを加えており、外面にはさらにまばらなヘラミガキを施している。受け部の調整は内外面ともナデである。

SX836 SK805の南側で検出された不整形の落込みである(図19)。東西約1.1m、南北2.7m以上、

深さは約0.1mである。埋土は黒色シルトで、土器311が出土した。

311(図47、図版28)は生駒西麓産胎土の大型の鉢である。体部の調整は外面がハケの後、ヘラミガキで、内面はハケの後、ナデを加えている。河内Ⅵ様式から庄内期にかけての資料とみられる。

SX837 調査区中央部やや西寄りで検出された不整形の落込みで、SX706などに切られる(図19)。東西0.8m以上、南北1.4m以上、深さ約0.1mである。埋土はオリブ黒色シルトで、土器307が出土した。

307(図47)は生駒西麓産胎土の小型の鉢である。体部外面には粗いタタキメを残し、内面はハケで調整している。口縁部から体部の上半の外面には黒斑がある。河内Ⅵ様式に属する資料であろう。

SX838 調査区中央、北壁際で検出された土壇状の遺構である(図19)。東西1.32m、南北0.8m以上、深さ約0.3mで、埋土は暗オリブ色粘土質細粒砂であった。弥生土器が少量出土した。

305(図47)は器台もしくは壺の口縁部である。下方に拡張して面をなす端部には円形竹管浮文を配し、竹管文内には赤色顔料による彩色を施す。胎土中には長石・石英粒を含み、黄橙色を呈する。河内Ⅴ様式に属する資料と思われる。

SX840 SE801の北側で検出された土壇状の遺構である(図19)。東西1.05m、南北0.68m、深さ0.05mで、埋土は黒色シルトであった。弥生土器315が横倒しになった状態で出土した。

315(図47、図版21)は大型の鉢で、台付である可能性がある。幅の狭い段状口縁の端部の上面には3条の、外面には4条の沈線状に退化した凹線文が廻り、外面にはその上から円形浮文を貼付けている。体部の屈曲部の直上には4条の凹線文が廻る。体部外面の調整は横方向のヘラミガキで、内面にはハケの後、ナデを加える。体部の外面には黒斑がある。河内Ⅳ～Ⅴ～Ⅵ様式の資料であろう。

SX841 調査区のほぼ中央で検

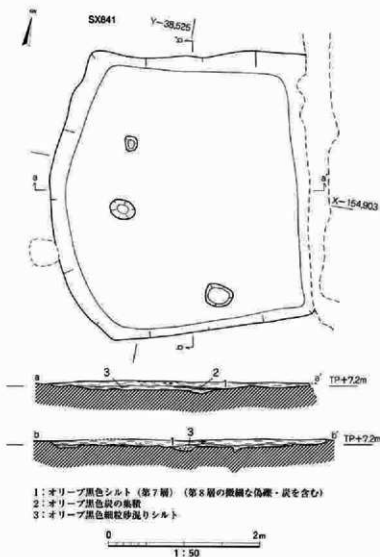


図51 SX841実測図

出した(図51)。東西3.4m以上、南北3.79m、深さ約0.15mで、平面形はほぼ方形である。底面で3個の小穴が検出された。小穴の深さはもっとも深いもので0.25mであるが、ほかの2個は0.05m未満である。埋土中に炭の集積が平面的に広がる部分があり、堅穴住居の可能性もあったが、明確な柱穴が検出されなかったことから機能は不明である。図化できるものはなかったが、河内V様式に属する甕や器台の破片が出土した。

SP896 調査区北東隅で検出された柱穴で、SK809・SX835を切る(図19)。平面形は楕円形で、東西0.52m、南北0.75m、深さ0.55mである。柱の抜き取り穴がみられ、柱穴と判断されたが、これに組み合うものは見つからなかった。遺構内から少量の土器片が出土した。

313(図47)は器台の受け部である。上下に肥厚して広い面をなす口縁端部は、上端がつまみ出され段状を呈する。口縁部の端面には櫛描波状文を巡らせた上に、2個一組の竹管文を配している。受け部外面の調整は縦方向のナデで、内面は細かいヘラミガキによる。胎土中には長石・石英・雲母粒などを含み、灰黄褐色を呈する。内面にはススが附着している。庄内期の資料であろう。

土器棺墓 調査区東部、SB802の北側の北壁沿いで検出された(図19・52、図版9)。掘形は、東西0.75m、南北0.4m以上、深さ0.4m以上で、この中に大型の甕と鉢を合わせ口にした土器棺を納めていた。

掘形内の埋土は、第7層に起源するオリブ黒色細粒砂に第8層に起源する細粒砂・シルトの偽礫が混る混合土であった。両者ともに土圧で潰れた状態で出土したが、鉢329は口縁を下にして棺蓋として用い、甕328は口縁を上にして棺身として用いていた。土器棺内の土を洗浄したが、何も出土しなかった。

328(図53、図版20)は生駒西麓産胎土の大型の甕である。口径は36.6cm、器高は43.8cmある。上部に最大径がある体部から鋭く外反する短い口縁部をもつ。上方に肥厚させ広い面をなす口縁端部には、1条の凹線が走る。口縁部内外面をヨコナデで、底部外面を一定方向のナデにより調整する。体部外面は上部に細かいナデを、中ほどには板状工具によるナデを、下部にはヘラミガキを施す。内面は上部が横方向のハケで、それ以下を斜め方向のハケで調整する。体部外面には黒斑が認められる。329(図53、図版20)は生駒西麓産胎土の大型の段状口縁鉢である。口径は53.3cm、器高は32.3cmである。口縁端部は櫛描波状文で加飾した後、ヨコナデを施す。体部上半には3帯の櫛描波状文と、3条の凹線文を巡らせる。施文部以下の体部外面の調整は、横方向のハケを施した後、下部にヘラケズリを行い、さらにヘラミガキを施す。内面は横方向のハケの後、上部には横方向のナデを、下部には

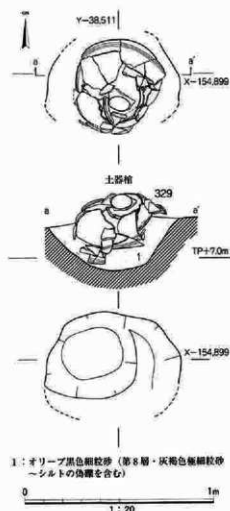
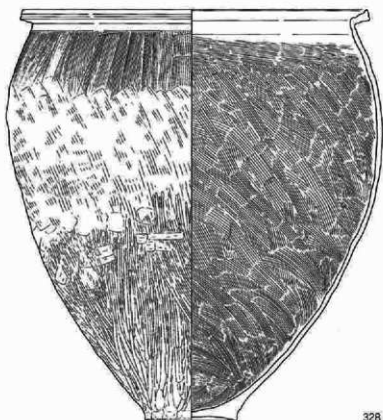
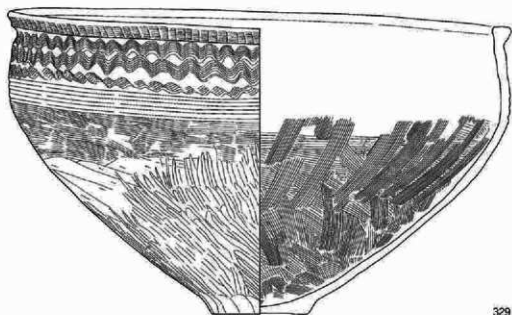


図52 土器棺墓実測図



328



329

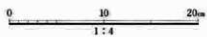


圖53 土器棺構成土器実測図
土器棺蓋(329)、土器棺身(328)

タテ方向のハケを加える。底部内外面の調整はナデである。口縁部から体部の上部にかけて黒斑が認められる。これらの土器は河内Ⅳ-2～3様式に属する資料であろう。

(高橋・池田)

6) 石製遺物

形態からみて弥生時代の石器と判断されるものをここでまとめて紹介する(図54～57、図版29・30)。打製石器(図54・55、図版29)の石材はすべてサヌカイトである。99AA1021はSB802、99AA947はSX817、99AA1013はSX821から、99AA302・99AA303・99AA157・99AA209・99AA805は第7層中から出土した。弥生時代の遺構以外にも、99AA62は第4層中から、99AA809・99AA511は古墳時代のSB702から、99AA591・99AA798はSX702から出土した。これらは、弥生時代の遺物が後世の遺構や地層に混入したものである。

99AA1021は刮器である。礫面を打面として、輪切りするように剥離された大型の横形剥片が素材である。剥片末端部分にあたる縁辺を刃部として設定しており、刃部は表裏両面から薄形の剥離をほぼ連続させた細部調整によって形成されている。全体がわずかに磨耗を受けているが、使用によるものではなく、水流の影響など、自然為によるものと考えられる。最大長83.5mm、最大幅36.5mm、最大厚15mmである。

99AA947は刮器である。横長剥片を素材としており、剥片末端にあたる縁辺に薄形の剥離を表裏両面から加えて刃部を形成している。特に裏面側からの剥離はいねいであり、刃部縁を整える目的があったと思われる。一方の素材剥片の打面側は、表面左側縁上半部に折り取りによる整形が施され、同下半部は素材剥片の厚みを減ずるために表裏両面から調整剥離が施されている。最大長71.0mm、最大幅31.5mm、最大厚10.9mmである。

99AA302は搔器である。上端部と表面下半および右側縁上半に礫面を残す。やや分厚い剥片を素材とし、その末端部分に弧状の刃部が設定されている。刃部は表裏両面から薄形浅形の剥離によって形成されている。上半のつまみ部はほとんど整形されておらず、表面右側縁の礫面と同左側縁の折れ面がそのまま利用されている。最大長56.5mm、最大幅48.1mm、最大厚14.6mmである。

99AA1013は尖頭器の未成品である。素材は大型剥片である。基端部と先端に礫面を残す。表裏両側縁から薄形かつ深形の剥離が行われている。特に表面右側縁はいねいな調整が加えられている。全体の形状は表面左側縁が弧状に張り出した非対称形をなすが、この張り出し部分は素材となった剥片が肥厚していた部分であったため、左右同時に均等な整形加工ができなかったようである。この張り出し部分に認められる細かな調整剥離は張り出し部分を除去するための準備であり、次段階の整形剥離のための打面縁調整を目的としたものと思われる。続いて左右対称形へと整形加工が行われるはずだったが、作業途中で放棄されている。最大長76.8mm、最大幅43.0mm、最大厚16.5mmである。

99AA303は大型石鏃あるいは尖頭器の未成品とみられる。素材は分厚い板状の大型剥片である。表裏両側縁から急角度で深い剥離を行っている。表面左側縁は素材剥片の肥厚した部分であったため、縁辺を潰すように入念に施された細かな剥離痕が連続して認められる。しかし、この調整剥離によ

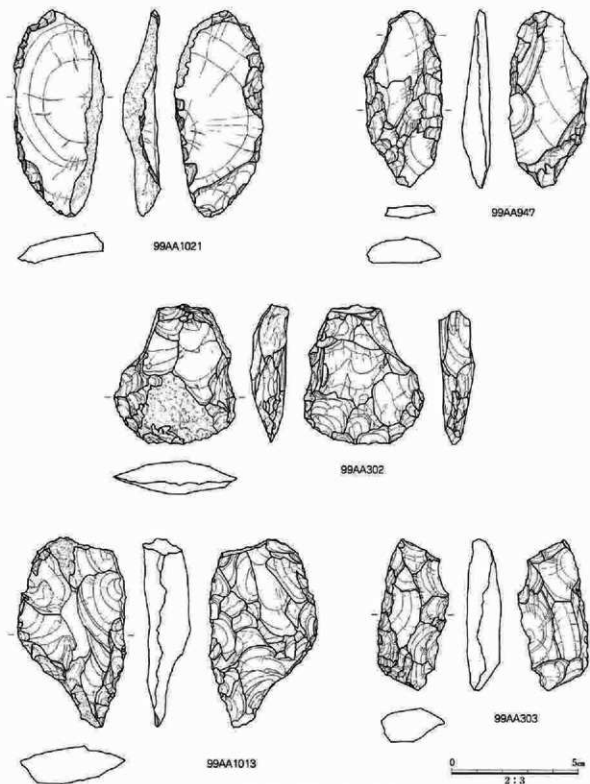


図54 弥生時代の打製石器実測図(1)

SB802(99AA1021)、SX817(99AA947)、SX821(99AA1013)、第7-3層(99AA302-99AA303)

でも素材の厚みを減ずることができなかったため、作業途上で放棄されたものと見られる。最大長59.5mm、最大幅26.5mm、最大厚13.0mmである。

99AA62は円基無茎式石鏃である。切先から作用部にかけての両側縁は鋸歯縁となるように調整さ

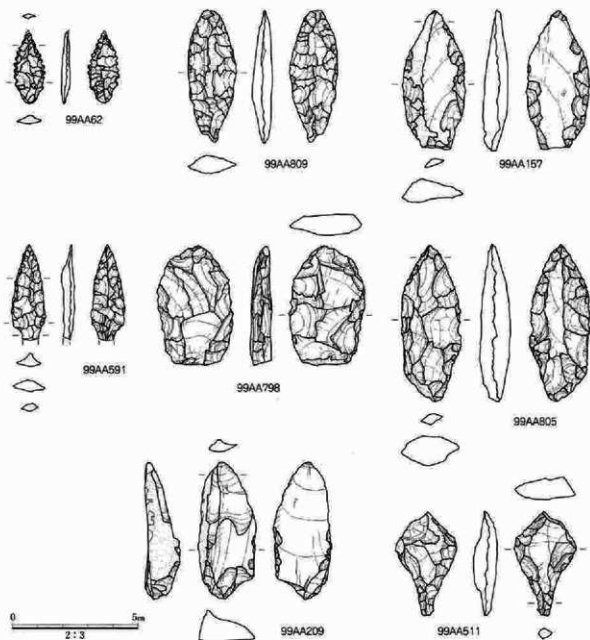


図55 弥生時代の打製石器実測図(2)

SB702(99AA511・809)、SX702(99AA591・798)、第7～1層(99AA157・209)、第7層((99AA805)
第4～2層(99AA62)

れている。薄い剥片を素材としており、細部調整もていねいである。最大長28.2mm、最大幅12.5mm、最大厚3.1mmである。

99AA809は無茎式石鏃の未成品である。表面中央部には稜面が残る。表裏面ともに薄形かつ深形の調整剥離が施されている。基部側がやや細かく整形されていることを考慮するなら、有茎式石鏃の未成品の可能性も否定できない。全体的に調整剥離がていねいなことから、製作の最終段階のものと考えられる。最大長53.1mm、最大幅19.5mm、最大厚7.5mmである。

99AA591は有茎式石鏃である。茎部が欠損する。切先角は55°で、表裏とも薄形かつ深形の非常に丁寧な調整剥離が施されている。最大長38.0mm、最大幅14.5mm、最大厚5.2mmである。

99AA157は尖頭器である。表面左側縁に礫面を残す。横形剥片を素材としており、細部調整は薄形かつ浅形の剥離でやや不連続な部分がある。素材の形状を大きく変えることなく仕上げられている。最大長56.3mm、最大幅25.5mm、最大厚9.5mmである。

99AA798は石鏃の未完成品である。礫面打面の縦長剥片を素材とする。表裏両面より薄形の調整剥離が施されている。最大長48.5mm、最大幅30.5mm、最大厚8.5mmである。

99AA805は尖頭器である。やや分厚い剥片を素材とする。基端部に礫面を残す。細部調整は表裏両側縁からやや厚形で深形の剥離によって整形を行った後、仕上げに側縁に沿って細かな剥離を連続して施している。最大長63.2mm、最大幅24.2mm、最大厚11.4mmである。

99AA209は微細剥離痕のある剥片である。裏面左側縁下半に連続した微細剥離痕が認められる。最大長55.4mm、最大幅23.9mm、最大厚12.4mmである。

99AA511は石鏃で、鏃部が上下両端に設定された多頭鏃である。横形剥片を素材とする。下端部を茎状の鏃部として作り出すとともに、相対する上端にも細かな剥離によって尖頭状の鏃部が形成されている。最大長42.5mm、最大幅24.9mm、最大厚9.5mmで、茎状の鏃部は幅5.1mm、厚3.0mmである。

(絹川)

330～335の6点は石廬丁である(図56、図版30)。331・332・334は古墳時代の遺構から出土しているが、混入品と判断した。全体が遺存しているものはないが、330・331が半月形、332・333が舟形、334・335が翼形のプロポーシオンをもつ。いずれも背側に両面から穿孔した小孔があり、332は

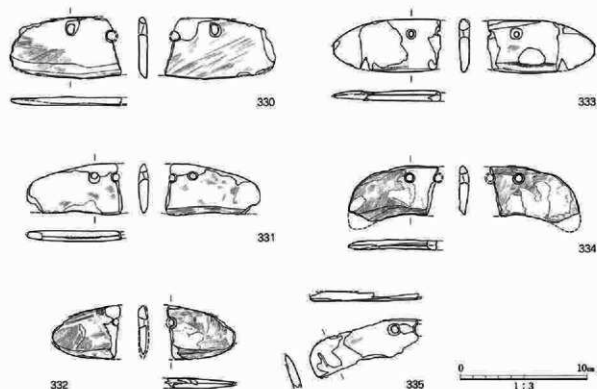


図56 石廬丁実測図

SB801・SK805(333)、SX816(335)、第7層(330)、SB701(332)、SB702(331)、SP733(334)

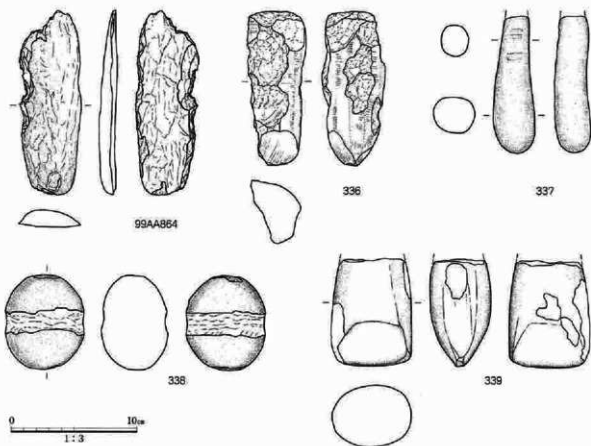


図57 弥生時代の磨製石器等実測図

SP826(338)、SK705(99AA864・336・339)、第7層(337)

1孔のみ遺存するが、本来、すべて2孔が穿たれていたものとみられる。刃部および身の部分に研磨痕が残る。石材はすべて結晶片岩である。

その他の石器(図57、図版30) 99AA864はサヌカイトの石核、336・339は太型蛤刃石斧である。石斧は弥生時代の遺物であるが3点とも古墳時代のSK705から出土したもので、混入品である。336は長軸方向の剥離が激しいが、本来は横断面が楕円形のものであったとみられる。339は基部を破損している。残存部分での研磨は良好である。ともに刃部には使用による刃こぼれが見られる。石材は336が凝灰岩もしくは緑色岩、339が砂岩である。337は砂岩製の石棒で、柄端部を欠損するが、10.8cmが遺存する。全体によく研磨されている。338は石錘で、調査区西部、SK802東側のSP826の柱抜き取り穴から出土した。高さ7.8cm、重さ350.4gで、球形の砂岩の体部を帯状に打ち欠いて1周している。また、頂部と基部にも打欠きを加えて小さな平坦面を作っている。打欠きの後、全体を丁寧に研磨している。また、実測図は掲げていないが、図版30の483・484は叩き石である。いずれも砂岩製で、483は長径約5.2cm、重さ104.4gで、484は長径約5.8cm、重さ134.4gである。微細な敲打痕が見られる。

(高橋)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、おもに第7層中で検出された。既に述べたように、第7層内の地層を3層に細分して地層ごとに検出作業を行うことはできていない。したがって、すべての遺構について切合いも

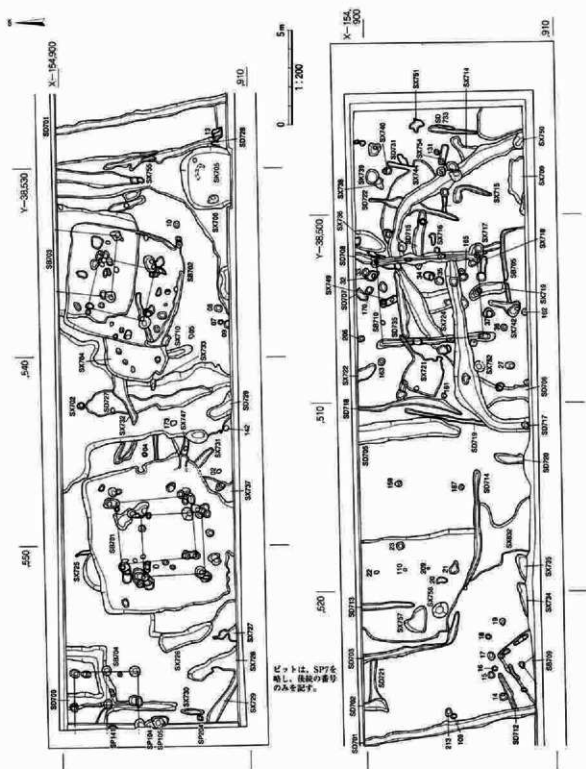


図58 古墳時代の遺構

含めて層位的な累重関係を正確に把握できたかは疑問が残る部分もある。たとえば、弥生・古墳時代の遺構を同一面で検出したばあい、時期を決定できる遺物が出土しなかったものについては弥生時代の遺構を古墳時代として捉えている可能性があるということである。ただし、出土遺物から古墳時代と判断されたものについては、初期須恵器の時期以外のものはなく、大きく所属時期をまちがえていることはないと思われる。また、遺構のベースとなる地層・遺構の埋土ともに黒色シルト～細粒砂と近似した堆積物であったため、遺構の上面を削り込んで検出しており、遺構上部の構造については正確に把握できていない可能性もある。ともあれ、以下に出土遺物や切合い関係から古墳時代と判断された遺構のうち主要なものを紹介する。同時期の遺構は調査区全域で発見され、竪穴住居・掘立柱建物・土塼・溝などがある。遺構の種類や出土遺物の多さからみて、調査地周辺は古墳時代中期の居住域内に当たるとみられた。

1) 建物

SB701 調査区西部で検出された平面方形の竪穴住居である(図60・図版11)。竪穴部分は東西7.1～8.1m、南北は約6.7m、底面までの深さは最大で0.15mである。南辺の中央部分が外に向って開いており、この部分が入り口であったのかもしれない。竪穴の内部には無数の柱穴・小穴が検出されたが、大きく見ると4群に分かれ、さらにそれぞれが2群に分かれるようであった。これらは、竪穴住居がほぼ同じ場所で複数回にわたって建替えられ、主柱穴どうしが切合った結果とみられた。竪穴部分が、南北に比べて東西に広いこともこれに起因するものであろう。厳密に主柱穴どうしの組合せを復元することは困難であったが、図のように主柱穴を4個とした。竪穴部分にも切合いがあったはず

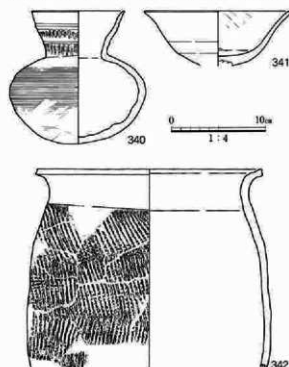


図59 SB701出土遺物実測図
SB701(340～342)

であるが、断面の検討を経ても確認することはできなかった。北辺中央の内側には直径0.5mほどで床面が熱を受けて赤く変色した部分が2箇所あった。このうち北側の1箇所では、赤変部分の周辺で、甌や甕などの煮沸用土器の破片や、支脚などに使われたと思われる石材などが出土した(図版11)。これらのことから赤変部分は竈のあった位置を示していると考えられる。とすれば、北辺中央から外方へ向って延びる小規模な溝は竈の煙出しの一部であろう。竈の痕跡が複数あることも、この竪穴住居がほぼ同じ場所で建替えられたことを示している。竪穴内の埋土は黒褐～オリーブ黒色シルトで、断面で検討したが貼床に相当するものや周壁溝は確認できなかった。柱穴内の柱痕跡からみて、本来の柱の太さは0.1m程度であったとみられた。竈痕跡の周辺のほか、竪穴内部から土師

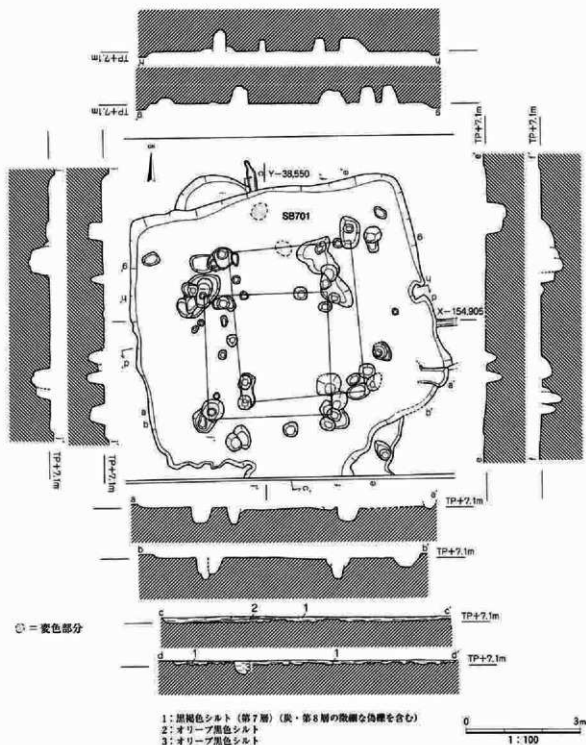


図60 SB701実測図

器・須恵器・韓式系土器・滑石製玉類(図80・図版39)・砥石487(図版30)が出土した。

340(図59、図版31)は口径9.8cm、器高14.1cmの須恵器細頸甕である。口頸部は玉葱状の体部から外上方に開いており、口縁部の下端および頸部の外面には2条のにぶい突帯と2帯の御描波状文が巡る。底部は内面から突き出しており、器体の内面の調整はナデおよびヨコナデである。TK216型式に属するものであろう。341は脚部を欠損した土師器高杯で、口縁部は体部から屈折して短く開く。

色調は灰黄色で、胎土中に長石・石英・チャート粒を含む。342(図59、図版31)は体部の中ほど以下を欠損した韓式系土器長胴甕で、口縁部は緩やかに外反した後、短く開く。体部の外面は右上りの粗い平行タタキの後、同一原体による左上りおよび縦方向の平行タタキで整形しており、内面は横方向のナデ調整である。色調は黄橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。以上はⅠ期後半に属するものであろう。

SB702 調査区中央のやや西寄り、SB701の東で検出された竪穴住居である(図62、図版10・12)。2棟が切合っており、上がSB702、下がSB703で、平面形はともに方形である。SB702は、竪穴部分で東西5.97m、南北6.18m、底面までの深さは約0.1mである。竪穴内の埋土は、黒褐色シルトに第8層に起源する暗オリーブ色細粒砂の微細な偽礫が混ったもので、これは人為的に敷かれた貼床とみられた。本来、柱穴は貼床の上で検出できるはずであるが、貼床と見分けることは困難で、竪穴の底面まで掘下げた段階で検出した。柱穴・小穴は多数検出され、厳密に組合わせを特定することは困難であったが、その分布がおおむね4個所に分かれることから主柱穴は4個と復元した。なお、柱穴・小穴の数から判断して同位置での建替や拡張があった可能性が高い。竪穴内の南辺と東辺では幅0.1~0.3m、深さ0.05mほどの周壁溝が検出された。北辺中央部には直径0.35mで熱を受けて床面が赤く変色している個所があり、この位置に竈が設けられていたものと考えられた。床面の上面が完全に遺存し、それを検出できたかは疑問が残るが、変色部分の周辺には竈を構築する際に用いられる粘土などはみられなかった。このことから包含層から出土した114・115のような移動式竈が設置されていたものと考えられる。土師器・須恵器・韓式系土器・滑石製白玉462(図80・図版39)が出土した。

346(図61、図版31)は口径11.4cm、器高5.0cmの有蓋高杯である。口縁部と天井部の境界には断面三角形の突帯があり、口縁部の厚みはほかに比べて薄い。丸みのある天井部には3帯の襷目直線文が巡る。天井部の中心には逆台形状のつまみがあり、この内面側には当て具痕が残る。色調は灰色で、焼成は良い。三国時代の嶺南地方に類似例があるが、作風や色調、胎土などからみて、TK73型式に

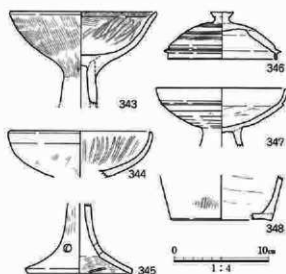


図61 SB702・703出土遺物実測図
SB702(343~347)、SB702・703(348)

属する須恵器と思われる。347(図61、図版31)は脚部の上半以下を欠損した須恵器無蓋高杯である。口縁部の下になぶい後縁があり、口縁端部は内傾してわずかに凹む。杯底部の2/3以上をヘラケズリ調整しており、脚部を底部に貼付けている。色調は灰色で、焼成は良い。TK73型式に属するものであろう。348はSB702とSB703出土のものが接合したもので、韓式系土器平底鉢の底部片である。器体の調整は外面が平行タタキの後でヨコナデ、内面は横方向のナデである。Ⅰ期前半に属するものとみられる。343~345は土師器高杯である。343(図61、図版31)は脚部の中ほど以下を欠損しているが、杯部はほぼ原型を保っている。

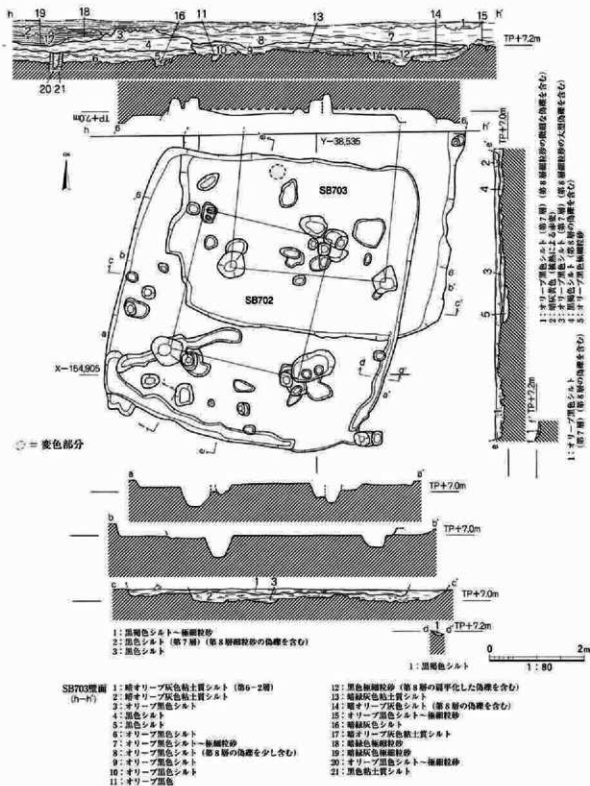


図62 SB702・703実測図

口縁部は体部からわずかに開いており、杯部の調整は外面が縦方向の粗いハケで、内面は左上がりの粗いハケの後、螺旋状のヘラミガキを施している。344は碗形の高杯で、口縁部にヨコナデを加えて端部を丸くおさめている。調整は外面が細かいタテハケの後、ナデで、内面には正放射暗文がある。

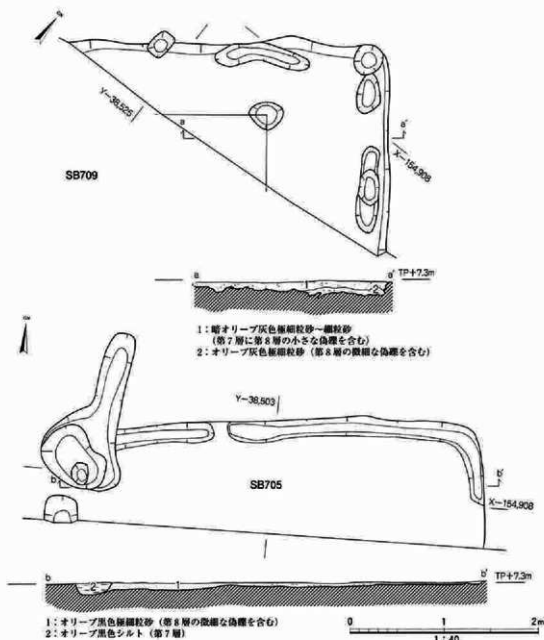


図63 SB705・709実測図

345は細身の柱状部から裾部が開いた高杯の脚部である。柱状部の下端に円形スカシ孔を3方向に穿ち、裾部の裏面には横方向のハケの後に施されたヘラ記号がある。以上の土師器高杯の色調は橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。時期はⅠ期前半の範疇におさまるものと考えられる。

SB703 堅穴部分は東西5.86m、南北は4.5m以上、深さは北壁断面で0.24mであった(図62、図版10・12)。堅穴の底部には約0.1mの厚さで、オリーブ黒色シルトに第8層の偽層が混る貼床が施されていた(図中の10・12)。断面の観察で、貼床中の偽層は上からの加重によって扁平に潰れた状況が看取された。貼床の上位には厚さ約0.1mでオリーブ黒色シルトが堆積していた(図中の9)。これは周囲から土砂が流入したもので、住居としての機能が停止した後に堆積したものと考えられる。

また、断面観察により、堅穴の西側には幅1.73m、高さ0.22mの盛土が存在したことがわかった(図中の3)。東側にはこの盛土は見られず、SB702によって破壊されたものと考えられるが、本来、堅穴の大半を取巻いていた可能性がある。この盛土層と堅穴内を完全に埋めているのが図中の8層で、オリブ黒色シルト中に第8層に起源する細粒砂シルトが混ることから、人為的な盛土層とみられた。この盛土については、SB703の廃絶時に堅穴を埋戻して整地したか、SB702の堅穴を取巻く盛土の一部のどちらか、あるいは両方の可能性が考えられる。盛土(3)の上位には自然堆積の細粒砂～シルトの17・18層が堆積していた。この層は出戸自然堤防上の居住地が放棄される原因となった洪水[高橋工1999 a]で堆積したRK7A vi～vii層に比定されるものであろう。柱穴は堅穴内の南側に偏って2個が検出されたが、本来は、4個の主柱穴があったものと考えられる。周壁溝に相当する溝は発見されなかった。

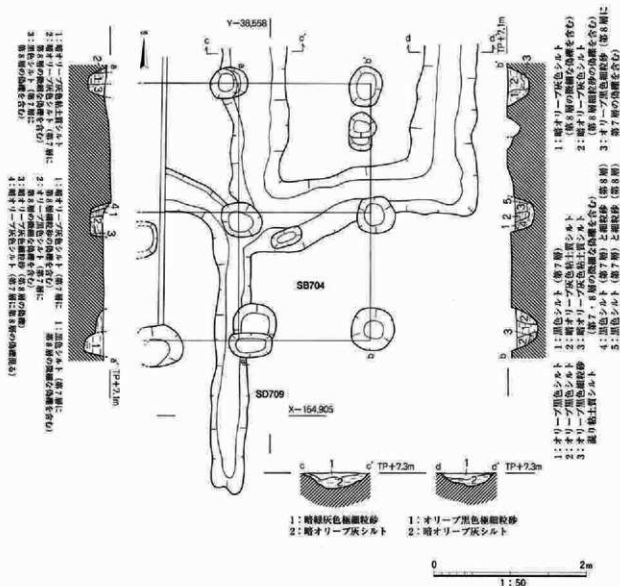


図64 SB704・SD709実測図

SB705 調査区東側の南壁際で検出した平面方形の竪穴住居である(図63)。住居北側の一部が検出されたに留まるが、東西4.67m、南北1.28m以上、深さは最大で0.1mである。竪穴部の埋土は、第8層の微細な偽礫を含むオリブ黒色極細粒砂で、貼床の残欠であろう。竪穴内の北辺に沿って幅約0.2mの周壁溝が検出された。詳細に時期を決定できる遺物は発見されなかったが、須恵器片が出土していることから古墳時代の遺構と判断した。

SB709 調査区中央の南壁際で検出した平面方形の竪穴住居である(図63)。住居北東の一角が検出

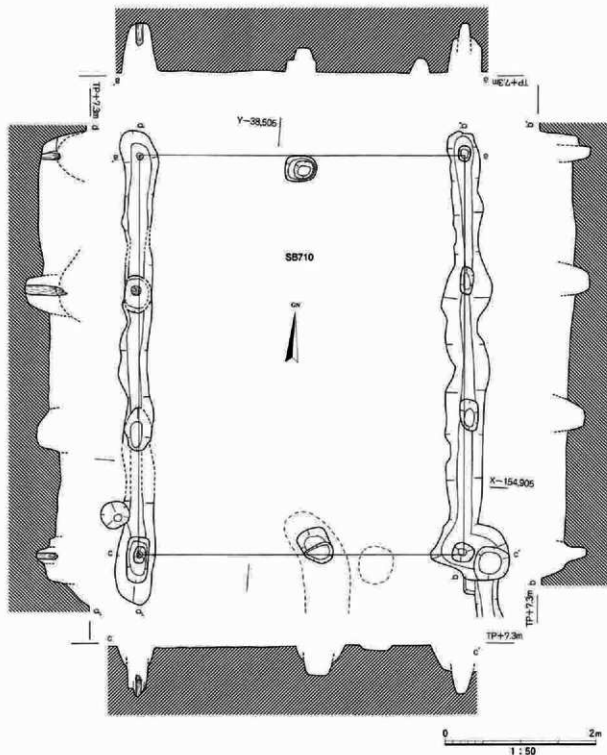


図65 SB710実測図

されたに留まり、平面の大きさは不明である。深さは約0.1mである。堅穴内では周壁溝の残欠とみられる浅い落込みと柱穴1個が検出された。柱穴の位置から判断して、主柱穴は4個であると考えられる。詳細に時期を決定できる遺物はなかったが、須恵器の薄片が出土していることから古墳時代の遺構と判断した。

SB704 調査区の北西隅で検出した総柱の掘立柱建物である(図64)。平面的に検出した柱穴では東西1間、南北2間であるが、西壁の地層断面にかかっている柱穴があったため、2間以上×2間以上である。南北3.38m、東西3.0m以上を測る柱穴の平面形は円形で、直径は0.5m前後、深さは0.2～0.3mほどである。柱痕跡からみて直径0.10～0.15mの柱が立っていたものとみられる。詳細に時期を決定できる遺物は出土しなかったが、柱穴の掘形部分から甕とみられる土師器片が出土しており、古墳時代の遺構と判断した。

SB710 調査区の東部で検出した掘立柱建物である(図65、図版10・12)。桁行5.260m(3間)、梁行4.310m(2間)の側柱建物で、桁行の柱穴を布掘りにしていた。桁行の柱穴は、西側のものを参考にすると、長さ6.23m、幅約0.4mで、深さ0.34～0.65mの溝状で、柱は4個所に据えられ、その部分は底面をさらに0.2～0.3m掘下げていた。3個所で柱の基部が遺存しており、もっとも残りのよいもので直径は0.13mであった。柱間の距離は平均で1.753mであった。梁行の柱穴は妻柱の1個が単独で掘られていた。北側の柱穴は深さ0.32mで、桁行側のものと比べて明らかに浅く掘られていた。梁行側の柱間の距離は平均で2.155mであった。柱穴から出土した遺物で時期が判明したものは少なく、庄内式土器がもっとも新しい遺物であったが、本遺構が切るSD706と、切られるSD717の両方から古墳時代中期の遺物が出土していることから、本遺構も古墳時代中期に属するものと判断した。

2) 土壌

SK705 調査区中央部、SB702の南東で検出された。東西3.36m、南北2.6m以上、深さ0.33mである(図66、図版13・14)。埋土は6層に細分された。最下位の(図中の; 以下同)6層はおもに汚れた感じのする第8層の中粒砂の偽礫からなり、土壌掘削時に形成されたものとみられる。2～5層はおもにシルトからなり、周囲から有機物や微細な偽礫とともに土砂が流入して堆積したものと観察された。1層は土壌がほぼ埋没した後に残った浅い窪みに泥質の堆積物がたまったものである。6層の上面には焼土・炭化物が面的に広がる部分があり、火を焚いた形跡とみられた。遺物が出土したのは6層の上面から2層中にかけてで、土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器・滑石製玉類・石斧がある。石斧は弥生時代のもので混入品である。土器類の大部分は破損しており、完形品は少ない。遺構の機能としては、遺構の形態・焚き火の痕跡・玉類と製塩土器の出土・破損した土器、人為的に埋めていないという事実から、祭祀用の土壌ないしは廃棄用の土壌と考えられる。出土遺物の一括性については、遺構内の複数の埋土から出土したことから厳密には認定できないが、埋土の上下関係をこえて接合した資料も少なくなく、比較的短期間に放棄されたものと考えられる。内部から完形品を含む多数の土器類のほか、滑石製勾玉470・白玉463～467(図80・図版39)、弥生時代の石斧336・339(混入品; 図57・図版30)が出土した。

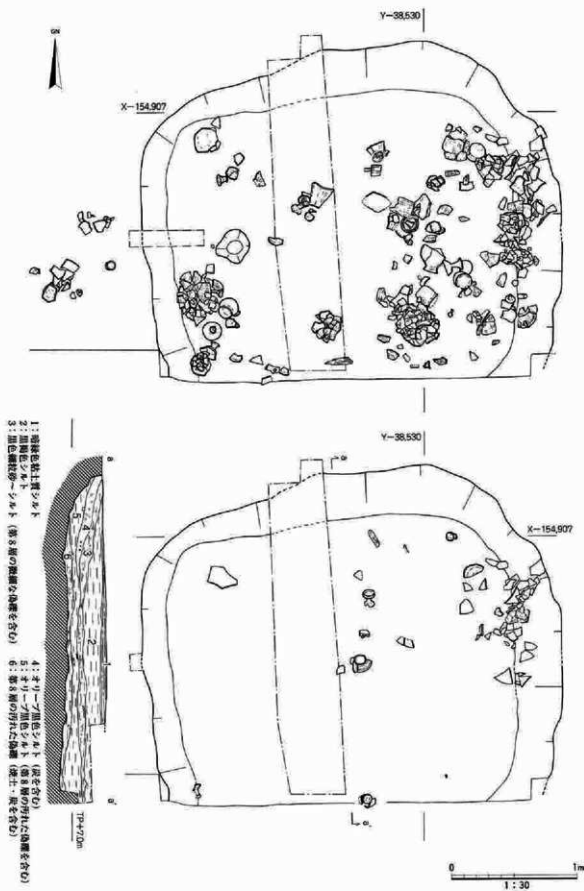


図66 SK705実測図



图67 SK705出土物实测图(1)

SK705(349~371)

出土土器のうち、須恵器25点、韓式系土器7点、土師器29点、製塩土器11点を図示した。まず、須恵器349～373について述べる(図67・68、図版33)。362は口径12.8cm、器高3.4cmで、天井部の中央に中凹みのつまみが付いた有蓋高杯の蓋である。口縁部と天井部の境界の稜線は鋭く、天井部には横溝直線文を挟んで同一原体による刺突文が施されている。色調は灰白色で、焼成は良い。363は口径10.0cm、器高5.1cmの杯身である。立上がりは受け部から折り込まれており、端部は丸い。体部は全体に器壁が厚く、調整は外面が静止ヘラケズリで、内面はヨコナデによっている。色調は灰白色で、焼成はやや甘い。胎土中に長石・チャート粒を含み、ほかの須恵器に比べて作りが稚拙である。364は脚部の大半を欠損した有蓋高杯で、杯部はいわゆる釜形である。立上がりは受け部からわずかに内傾しており、端部は丸い。杯体部の調整は内外面ともにヨコナデである。脚部の7方向に長方形スカシ孔を穿つ。色調は赤味を帯びた灰色で、焼成は良い。349は口径14.6cm、器高10.2cmの無蓋高杯で、脚部は3方向に円形スカシ孔を穿った柱状部下端から「ハ」字状に開く。口縁部と体部の境界の稜はやや鈍く、口縁端部はわずかに内傾しており、杯底部をカキメ調整する。350は口径15.0cm、器高11.5cmで、口縁部を短く折り曲げた無蓋高杯である。杯体部の上半には2条のぶい沈線が走り、これより下を静止ヘラケズリで調整している。脚部は柱状部と裾部の境界がやや不明瞭であるが、裾部は端部の近くで短く開く。脚部の中ほどに円形スカシ孔を4方向に穿つほか、これの下にも2条のぶい沈線が走る。351・352も脚部を欠損した無蓋高杯で、口縁端部の形態は350に類似している。ともに口縁部の下方に2条のぶい沈線と稜線が走る。353～355は高杯の脚部である。353・354は緩やかに広がる柱状部から裾部が短く開くもので、355の裾部は柱状部から2条の沈線と稜線を介して「ハ」字状に開く。この部分の形態は、349の脚部の形態に近い。354・355の柱状部の下端には4方向に円形スカシ孔を穿つ。以上の無蓋高杯や高杯脚部の色調は灰色あるいは灰白色で、胎土や焼成はいずれも良く似ている。356は口径13.6cm、器高10.9cmの無蓋高杯で、口縁部は端部の近くで外側に開く。口縁部と体部の境界には鋭い稜線が走り、底部の2/3以上をヘラケズリ調整している。脚部は柱状部から裾部が短く開いており、柱状部中ほどの3方向に縦長の円形スカシ孔を穿つ。357は口径15.9cm、器高12.0cmの無蓋高杯で、口縁部は体部からわずかに内傾して立つ。ヘラケズリ調整は体部の上半部まで及んでおり、ここに一對の板状飾り耳が付く。口縁部の下方には2条の稜線と1帯の横溝波状文が走り、脚部は裾部が緩やかに開くもので、4方向に縦に長い台形スカシ孔を穿つ。脚端部を内側に丸く折り曲げている。358は口径18.8cm、器高11.9cmの無蓋高杯で、口縁部は体部からわずかに開く。体部の上半部に2条の稜線と1帯の横溝波状文が走り、ここに一對の断面円形の飾り耳が付く。脚部は柱状部から裾部が短く開くもので、4方向にバチ形のスカシ孔を穿つ。杯部の表面には脚部を接合する際に入れた同心円状のカキメが残る。359は脚部を欠損した高杯で、口縁部を外上方に短く屈曲させており、体部の上半には2条一単位の鈍い沈線と稜線が走る。底部の調整は外面が粗いカキメで、内面は横方向にナデ整えている。365・366は高杯の脚部である。365の柱状部の上端には杯部に接合する際のカキメが残る。366の脚部は柱状部から短く開いており、端部は沈線状に凹む。ともに柱状部には3方向に円形スカシ孔を穿つ。以上の無蓋高杯の色調は灰色で、焼成は良い。360は口縁部がわずかに開く高杯形器台の杯部である。口縁部の下端から体部の中ほどに2条一単位の稜線

と一帯の櫛描波状文、これより下にヘラ描きの鋸歯文と櫛描波状文が各一帯巡る。色調は灰色、焼成は良好で、杯部内面には緑色の自然釉が付着している。361は高杯形器台の脚部で、色調や胎土、櫛描波状文などからみて、先に述べた高杯形器台360と同一個体と考えられるものである。脚部は裾部に向かって緩やかに開いており、器面を2条一単位の稜線で区画して、2条一単位の櫛描波状文を加えた後、長方形スカシ孔を交互に穿っている。367は器体の一部を欠損した把手付碗で、底部には板状把手が一部残っている。口縁部は内傾しており、体部の上端には1条のぶい沈線が巡る。368は口縁部の上端が短く開く壺あるいは甕の口頸部である。口縁端部の下方に1条の突帯があり、頸部には2条の櫛描波状文が巡る。369・370は壺の体部片と思われるもので、器表面には縄唐文タタキを行った後、ヘラ描沈線が施されている。色調や胎土は上述した須恵器と変わらない。371は口径53.6cmに復元された甕の口頸部である。口縁部は頸部から一旦直立した後、外上方に大きく開く。口縁端部は丸味をもち、これの下方にはぶい突帯が巡る。器体の調整は内外面ともにヨコナデである。色調はやや褐色味を帯びた灰色で、焼成は良好である。372は体部の大半を欠損した甕である。口縁部は緩やかに外反する頸部から開いており、内面がわずかに凹む。口縁端部は丸く、下端にはぶい突帯が巡る。体部の外面の整形には細い平行タタキを施しており、内面には当て具痕が残る。色調は灰褐色で、焼成はややあまい。なお、口頸部の内外面および体部外面にベンガラが塗布されており、焼成前に塗布されたものと考えると鉄釉すなわち、施釉陶器の一種となりうる[吉村聡志1998・2001]。本資料については科学的分析を実施していないものの、35mm大のルーペによる肉眼観察によれば、密着焼成された円筒埴輪の器表面に焼成前に塗布された赤色顔料の状態に酷似しているように思われた。この問題については、今後、同様な資料の収集と科学的な分析を行って検討を加えたい。373は甕の体部および底部である。調整は、外面はナデを施し、内面は左上りのハケの後、底部の器面に沿ってやや粗いハケを施している。丸い底部の裏面には「×」状のヘラ記号がある。色調は灰色で、焼成は良好である。

次に韓式系土器374～376・378～380・385について述べる(図68・69)。374は体部の下半以下を欠く長胴甕である。口縁部は緩やかに外反した後、端部近くで短く開いており、端部を面取っている。体部の外面は縦方向の平行タタキで整形しており、内面はナデで整えている。375は口縁部を欠損した丸底の長胴甕である。体部の外面を右上りおよび左上りの平行タタキで整形した後、底部を縦ぎ足したことが平行タタキの重なりから見て取れる。体部の内面には左上りのハケメが残る。口頸部はヨコナデ、底部の内面の調整はナデである。376は底部の大半および把手を欠損した甕である。口縁部は体部からわずかに内傾しながら上方に開く。体部から口縁部のほぼ上端まで外面を細筋の平行タタキで整形した後、口縁部をヨコナデ調整している。底部の蒸気孔は円形で、多孔のようである。378も甕の底部で、外面を細筋の平行タタキで整形した後、設置面の外面に横方向のヘラケズリを加えている。内面は左上りの強いナデを施しており、裏面の蒸気孔は円形で、中央の直径約4cmの孔の回りに7孔(直径1cm前後)、これの外側に10孔(直径約2cm)を二重に配置している。380は体部の中ほど以上を欠損した平底の鉢で、外面には縦方向の細筋の平行タタキを施している。底部の外面にはタタキ整形の後にナデおよびヘラケズリを加えており、ここにヘラ記号がある。385も同様な形態の平底

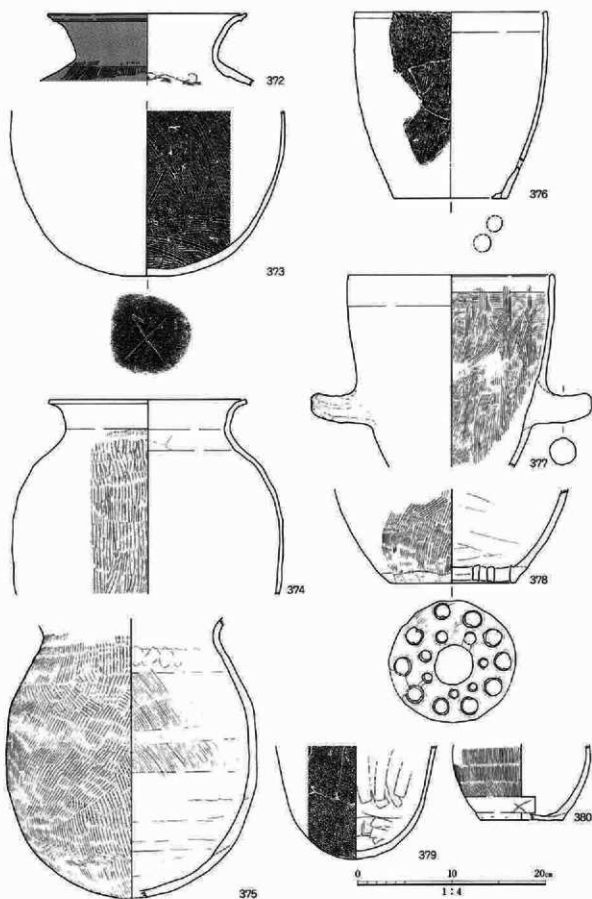


圖68 SK705出土遺物実測圖(2)
SK705(372~380)

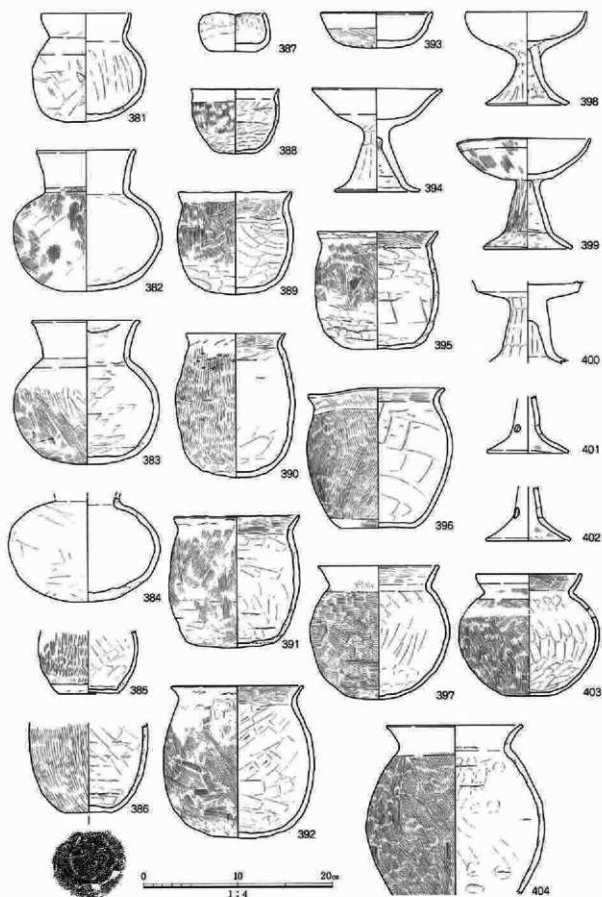


图69 SK705出土遗物实测图(3)

SK705(381~404)

鉢で、体部の外面は縦方向の平行タタキで整形している。379は体部の中ほど以上を欠損した長胴甕で、丸底である。器体の外面はやや粗い縄文タタキで整形するが、体部に縫いで底部を成形したことがタタキの重なりから判断される。内面は体部が縦方向のナデで、底部は横方向にナデ整えている。以上の韓式系土器の色調は灰色ないし灰白色の376・378、褐灰色の380以外は橙色系であり、胎土中に微細な長石・石英・チャート・雲母粒を含み、後述する土師器の色調や胎土とさほど変わらない。

次に土師器377・381～384・386～409について述べる(図68～70、図版34～38)。377は底部を欠損した瓶で、口縁部は体部からわずかに内傾しながら立ち、口縁端部を丸くおさめている。器体の調整は外面がていねいなナデで、内面は横方向のハケの後、同一原体による縦方向のハケである。体部のやや下がった位置に内面から一對の把手を挿入している。口縁部の内外面の調整はヨコナデである。381は口径9.3cm、器高11.5cmの壺である。口縁部はわずかに内湾しており、端部は丸い。体部の調整は外面がハケの後、ナデで、内面は縦方向のナデである。平底状の底部の内面はユビオサエで整えている。体部の中ほどには焼成後の穿孔がある。382は口径10.3cm、器高15.0cmの直口壺で、口頸部は球形に近い体部からわずかに開きながら立つ。口縁端部は丸い。体部の調整は外面が細かい縦および左上りのハケで、内面はナデである。383は口径11.3cm、器高15.3cmの直口壺で、口頸部は球形の体部から外上方に開く。口縁端部は外側に肥厚しており、口縁部の内面にはヘラ記号がある。体部の調整は外面が縦および左上りのハケで、内面はヘラケズリ状のナデである。底部はわずかに平底状を呈しており、体部との境に粘土紐の接合痕が残る。384は口頸部を欠損した直口壺で、体部の形態は玉葱状であり、調整は内外面ともにナデである。387は口径6.4cm、器高4.2cmの手づくね土器で、器体は平底の底部から口縁部にかけて内傾している。口縁部および体部上半はユビオサエで整えており、体部の下半部の調整は横方向のユビナデである。393は口径11.7cm、器高3.8cmの杯で、底部がやや厚い。口縁端部は内傾しており、口縁部はヨコナデ、体部から底部の外面を粗いハケ、内面はナデで調整している。

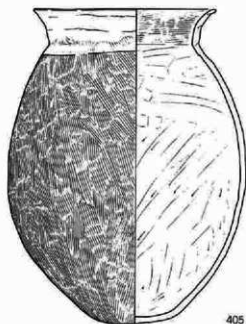
398は口径12.5cm、器高9.9cmの高杯である。杯部は碗形で、脚部は細い柱状部から大きく開く。器体の調整は杯部の内外面がヨコナデおよびナデで、脚部は外面が縦方向のナデ、柱状部の内面はヘラケズリである。杯部の下半から脚部の外面にはハケメが残る。394は口径13.6cm、器高11.1cmの高杯で、口縁部は体部から外上方に開く。脚部は「ハ」の字状に開く柱状部から短く開いており、器体の調整は杯部の内外面がヨコナデで、脚部は外面が縦方向のナデ、内面は柱状部がヘラケズリである。399は口径13.8cm、器高11.8cmの碗形の高杯で、脚部は柱状部から「ハ」の字状に開く。器体の調整は杯部の外面がタテハケ、内面はヨコハケの後にナデであり、脚部は外面がタテハケの後、ナデで、柱状部の内面はヘラケズリである。一般の須恵器高杯と同様に杯部に脚部を接合している。400～402は高杯の脚部である。400の柱状部の上半には粘土を充填しており、401・402の柱状部には3方向に円形スキャン孔がある。388～392は口径9.2～13.7cm、器高6.9～16.2cmの鉢あるいは甕である。いずれも口縁部は外上方に短く開いており、口縁部の調整はヨコナデであるが、388以外の内面にはヨコハケが残る。体部の調整は外面が縦および左上りのハケで、内面は上半部をヘラケズリする392以外は粗いナデであり、多くのものに成形過程の指頭圧痕や粘土紐の接合痕が残る。これらの中には底部

を平底状に成形するほか、396のように底部外面に横方向のナデを加えるもの、386のように粘土円板状の底部に粘土紐を縫ぎ足して体部を成形するなど、韓式系土器平底鉢の製作技法と同様なものが多く認められる。器面の調整は一般の土師器と同様にハケであるが、韓式系土器が土師器組成の中に加わって行く過程を明らかにする上で注目すべき資料であろう。なお、以上の土器の色調は灰白色の390・395以外は橙色系であり、胎土中に微細な長石・石英・チャート・雲母粒を含むものが多く、共存したほかの土師器と変わらない。

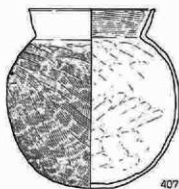
397・403は口径11.0～12.6cm、器高13.0～14.2cmの甕で、口縁部は前者が外上方に短く開いており、後者は一旦外反した後、端部の近くでわずかに内傾している。口縁端部を397は内側に肥厚させており、403は丸くおさめている。球形に近い体部の調整はともに外面が横方向および左上りのハケで、内面は縦方向のナデである。397の底部の内面はユビオサエで整えている。404は底部を欠損したやや体部の長い甕で、最大径は体部の中ほどにある。口縁部の調整はヨコナデで、端部はわずかに肥厚している。体部の調整は外面が左上りのハケで、内面はユビオサエおよび左上りのナデである。407は口径13.2cm、器高19.0cmの甕で、口縁部は球形の体部から外上方に開き、口縁端部はわずかに内傾している。体部の調整は外面が左上りのハケで、内面は右および左上りのナデである。口頸部はヨコナデ調整しているが、内面には横方向のハケメが残る。408は最大径が体部にある甕で、口縁端部はわずかに内傾している。体部の調整は外面が左上りおよび横方向のハケで、内面は縦方向のナデである。口縁部の内面にヨコハケが、体部の上半には指頭圧痕が残る。409は口径19.0cm、器高32.4cmの甕である。口縁部は球形の体部からわずかに内湾しながら外上方に開き、端部は内傾している。最大径は体部にあり、調整は外面が左上りのハケで、内面は縦から左上りのナデである。底部の内面はユビオサエで整えている。以上の甕のうち、体部が球形で口縁端部が内傾する甕397・407～409は布留式甕の系譜を引くものであるが、形態や内面の調整がヘラケズリからナデに変わっていることからみて、須恵器出現以降に位置づけられるものである。

405は口径19.3cm、器高33.2cmの長胴甕で、口縁部は体部から緩やかに外反しており、底部は平底である。体部の調整は外面が縦および左上りのハケで、内面は中ほど以下がヘラケズリ、上半はナデである。口縁部の内面には横方向のハケメが残る。406は口径15.9cm、器高33.8cmの長胴甕で、底部は平底である。口縁部は緩やかに外反した後、端部の近くでわずかに開く。体部の調整は外面が縦および左上りのハケで、内面は右上りのヘラケズリである。口頸部の内面には横方向のハケメが残る。以上の土師器甕類の色調は灰白色を呈する397・409以外は黄橙色を基調としており、胎土中に1～3mmの長石・石英・チャート・雲母粒を含むことから在地で製作された土器と思われる。なお、本遺構から出土した土師器の中には長原遺跡の東南部に位置するNG82-41次地区の井戸SE703から出土した土器類[大阪市文化財協会1999]の胎土に酷似したものが含まれており、両地点に居住した集団の土器製作の実態を明らかにする上で注意すべきものであろう。

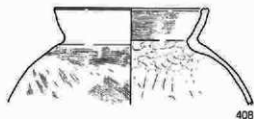
次に製塩土器410～420について述べる(図70)。製塩土器は約200点以上の破片が出土している。これらの多くは器面の整形が平行タキであり、ナデ調整のものは少ない。410～413は口径5.3～6.9cmで、器体の内面をナデで調整しており、体部の形態は416～419と同様であろう。416・417の底部



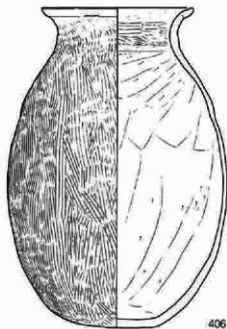
405



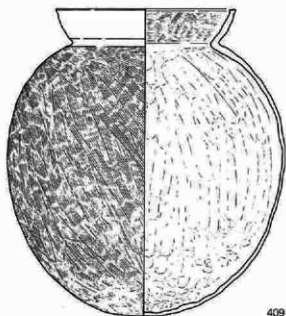
407



408



406



409



410



411



412



413



414



415



416



417



418



419



420

0 10 20cm
1:4

图70 SK705出土器物实测图(4)
SK705(405~420)

图70 SK705 出土器物实测图(4)

は丸底で、ナデで整えている。色調はにぶい赤褐色の419以外は黄橙～にぶい黄橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。414は器体の内面の調整に二枚貝の腹縁を用いている。色調は灰白色で、胎土中に白色粒を含む。415は口径4.9cmで、口縁部がわずかに外反しながら立ち、器体の調整は内外面ともナデである。色調は灰黄褐色で、胎土中に微細な長石粒を含む。

製塩土器は長原遺跡ではこれまでも5世紀中葉から後半の須恵器に相伴しており、形態や胎土などからみて、泉南方面を主とする大阪湾沿岸地域から搬入されたものと考えられる。

以上の須恵器や土器類の時期は、既述したような形態や製作技法を考慮すると、おおむねⅠ期後半の範疇に属するものと思われる。ただし、須恵器や韓式系土器の中にはⅠ期前半に属するものも若干認められるが、これらについては出土状態からみて混入品の可能性も否定しがたいように思われる。

3) 溝

SD701 調査区中央で検出した溝で、北北西に延びる(図71)。幅は約0.5mで、深さは0.13～0.25mであった。埋土はシルトから細粒砂で、顕著な流水があった形跡や人為的に埋戻した形跡はなく、周囲から土砂が流入して埋ったものとみられた。埋土から出土した遺物には庄内式の土器片があったが、本遺構に切られるSD712からは須恵器片が出土しているため、古墳時代の遺構と判断した。

SD705 調査区の東部、SB710の西側で検出された溝で、幅は約1.0m、深さは約0.3mである(図73)。埋土は3層に分かれ、最下層(図中の3)はおもに第8・7層の偽礫からなり、掘削時に形成されたものである。上位の2層(図中の1・2)はおもにシルトからなり、土砂が流入して堆積したものである。埋土から土師器・須恵器・韓式系土器が出土したが、図化可能なものはなかった。

SD706 調査区東側で検出された溝で、幅0.30～0.90m、深さは0.20～0.46mである(図73)。SB710、SD717に切られる。北東と北西部で緩く屈曲しており、それ以外は直線的であることから隅丸方形に巡る可能性がある。そのばあい、北西の1辺の長さは約10mほどになろう。埋土は、基本的に底部に第8層に起源する偽礫からなる加工時形成層があり、その上位に微細な偽礫を含みながら流入し、遺構を埋没させたおもにシルトからなる堆積層がみられた。上位の埋土から土師器・須恵器・韓式系土器・庄内式土器・弥生土器が出土したが、図化可能なものはなかった。

SD709 調査区北西隅で検出され、SB704を切る

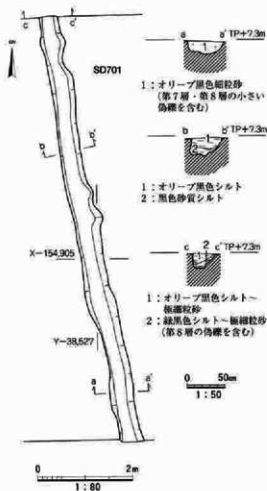


図71 SD701実測図

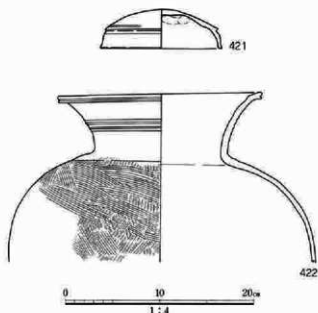


図72 SD714・718出土遺物実測図
SD714(422)、SD718(421)

(図64)。幅は最大0.85m、深さは約0.2mである。埋土はおおむね2層に分れ、下層はシルト、上層は極細粒砂である。人為的に埋戻した痕跡はなかった。

SD714 調査区中央の東側、SB709の北東で検出された(図58)。幅約0.3m、深さ約0.15mで、埋土はオリブ黒色シルトである。東西方向に延び、本来、SD703と一連であったとみられ、鈍角に屈曲して南北方向に続き、SX832やSX841を切っていた。

422(図72、図版37)は体部の中ほど以下を欠損しているが、口縁部が大きく外上方に開く甕である。口縁端部ににぶい凹線が巡るほか、頸部の中ほどにも3条のにぶい凹線を巡

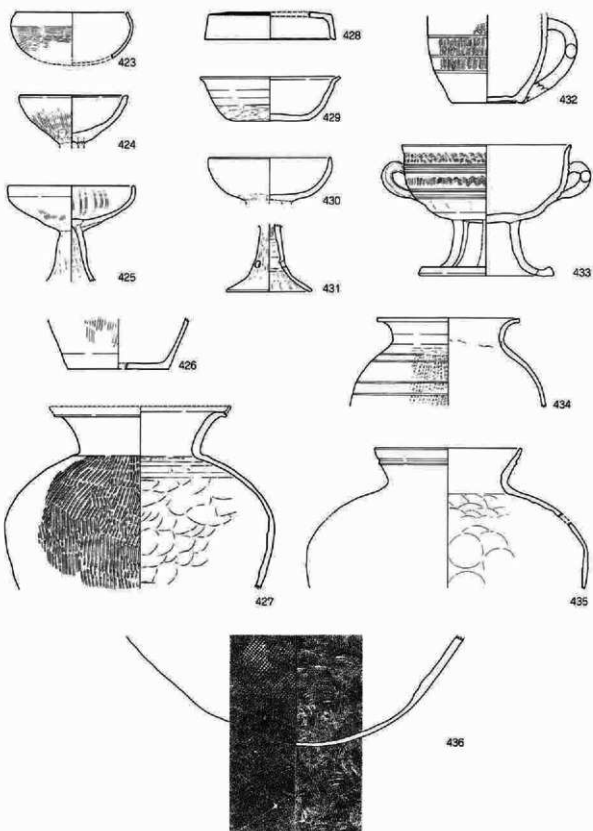
らせている。体部外面の調整はやや細かい平行タタキの後、左上りのハケで、内面は全体にナデで整えている。色調は灰色で、焼成はあまい。TK73型式に属するとみられるが、類例は少ない。

SD717 調査区東部、SB705の北西で検出され、SD706、SB710を切る(図73)。幅は最大で1.42m、深さは0.18~0.32mで、東西方向に延びた後、鈍角に屈曲してSD705と同じ南北方向に続く。埋土は2層に分けられ、下層は底部に掘削時に形成された第8層の偽礫からなり、上層は周囲から流入したシルトで、遺構を埋めていた。底部には一部に自然に堆積したと思われる細粒砂が堆積しており、若干の流水があった可能性がある。この溝の方向はSB705にほぼ平行しており、竪穴住居の周囲に掘られた排水・除湿のための溝と考えられる。おもに埋土上層から、土師器・須恵器・韓式系土器が出土した。

423は底部を欠損した土師器杯である(図74)。口縁部は体部から内湾しており、端部は丸い。体部の調整は外面がヨコハケで、内面はナデである。424(図版32)・425・430(図版32)・431は土師器高杯である。424の口縁部は器壁の厚い体部からわずかに内湾しながら外上方に開いている。口縁端部は内傾しており、体部の調整は外面はタテハケ、内面はナデである。425は脚部を欠損しているが、口縁部が内湾して立つ椀形の高杯である。体部の調整は外面がタテハケの後、ナデ、内面はナデである。杯部の内面には縦方向の暗文がある。脚部の上端に粘土紐を足して杯底部を成形した後、中央部を充填している。430は口縁部が内湾する椀形の高杯で、口縁端部は尖りぎみにおさめている。本例は須恵器の高杯と同様に杯部を成形した後、脚部を接合している。431は高杯の脚部で、裾部は短く開いており、柱状部には3方向に円形スカシ孔を穿つ。以上の色調は灰白色の423以外は橙色系で、胎土中には2mm前後の長石・石英・チャート・雲母粒ほか、424のように角閃石粒を含むものがある。

426は体部の下半以上を欠損した韓式系土器平底鉢の底部とみられるもので、外面には平行タタキメが残る。色調は橙色で、胎土は上述した424以外の土師器と変わらない。





0 10 20cm
1:4

图74 SD717出土遗物实测图
SD717(423~436)

428は天井部が平坦な須恵器蓋で、口縁部はわずかに内傾している。口縁部の内外面の調整はヨコナデで、天井部にはカキメがある。429(図版32)は口径14.6cm、器高4.7cmの須恵器杯身である。底部は平底で、口縁部は体部から外上方に短く開く。体部の調整は外面の下半部は静止ヘラケズリで、上半部はヨコナデである。器体の内面および口縁部の内外面の調整はヨコナデである。器形や口縁部の形態は三国時代の百済の陶質土器に類似している。432は口縁部を欠損した須恵器把手付碗で、把手は断面が円形である。体部の外面に3本の沈線と櫛描波状文を施している。433(図版32)は口径17.8cm、器高13.9cmの須恵器無蓋高杯で、杯部の外面には2条および1条の突帯と2条一組ならびに1条の櫛描波状文を施した後、1対の断面円形の飾り耳を付けている。杯部は口径の割りに深く、口縁部は端部の近くでわずかに外反している。脚部は裾部が緩やかに開いており、3方向に長方形スカシ孔を穿つ。434は口縁部が緩やかに外反した須恵器広口壺である。口縁端部を面取っており、体部の外面には縄唐文タタキの後、4条のヘラ描沈線を施している。435は張りのある体部から短い口頸部が外上方に開いた須恵器壺である。体部の調整は外面はナデであるが、内面には無文当て具痕が残る。427は口縁端部を欠損した須恵器甕あるいは壺で、体部の外面は細筋の平行タタキで整形しており、内面には無文当て具痕が残る。436は大型の甕の底部で、外面は格子タタキの後、ナデであり、内面には同心円状の当て具痕が残る。以上のうち、須恵器の色調は灰色系で、焼成は良い。三国時代の百済の陶質土器に類似する須恵器428・429・434以外はTK73~TK216型式、土師器高杯もⅠ期後半に属するものであろう。韓式系土器426も三国時代の軟質土器に類似している。

SD718 SD705のすぐ東で検出され、南北に延びる(図73)。最大幅0.45m、深さ約0.15mで、埋土は黒色シルトである。少量の土師器・須恵器が出土した。

421(図72、図版32)は須恵器杯蓋である。口縁端部は浅く凹んでおり、天井部は全体に丸い。口縁部と天井部の境界を凹線状におさめており、これの上方にも1条のぶい沈線が巡る。天井部のほぼ全体をヨコナデ調整しており、内面はユビオサエで整えている。色調は灰色で、焼成は良好である。TK216型式かON46型式に属するものであろう。

4) その他の遺構

SX702 SB701とSB702・703の間で検出された溝状の落込みである(図58)。南部では幅3mほどであるが、北部では8m以上に広がっている。深さは0.2~0.3mほどである。埋土は2層に分けることができ、下層は掘削時に形成された第8層の偽礫、上層は極細粒砂からなり、第7層の微細な偽礫や砂粒、多くの土器片を含みながら周囲から流入した機能時堆積層と判断された。この遺構は東西の堅穴住居共有の排水・除湿用の溝である可能性が高く、北側調査区外で東西に枝分かれして両住居を取巻いていたものと考えられる。SB702・703の東と南側にはSX706があり、SX702とともに堅穴住居を取巻いていたものとみられる。SB701の西側にはSX702に対応する明確な落込みはないが、全体に西に向かって傾斜し、SB701より低くなっていた。おもに埋土上層から土師器・須恵器・韓式系土器が出土した。

438・439・441~444は須恵器である。438は筒状の頸部から口縁部が大きく開いた壺で、頸部に

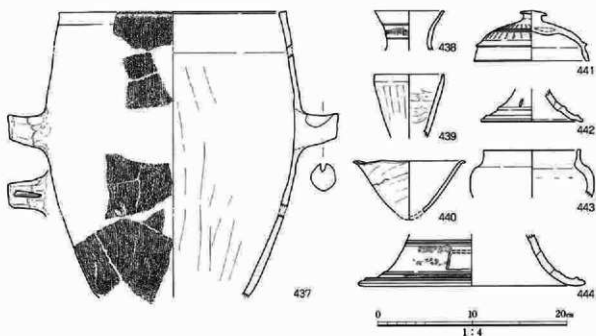


図75 SX702出土遺物実測図
SX702(437~444)

はにぶい2条の突帯間に1条の櫛描波状文を施している。色調は灰白色で、焼成は良い。439は底部を欠損した碗と思われるもので、口縁部はわずかに内傾している。器体の調整は外面が縦方向のナデ、内面は時計回りに横方向にナデを施している。色調は灰色で、焼成は良い。441(図75、図版31)は12.2cm、器高5.3cmで、天井部の中央にやや扁平な宝珠状のつまみが付いた有蓋高杯の蓋である。口縁部と天井部の境界は断面三角形の突帯で区分されており、天井部には1帯の櫛描直線文の上下に櫛描列点文を施している。器体の色調は灰色、断面は暗赤褐色で、焼成は良く、一部に焼影がある。442は裾部が開いた高杯の脚部片である。裾部を巡る1条の突帯の上に3個所の刺突文状のスカシ孔を穿つ。色調は灰色で、焼成はややあまい。443は体部の中ほど以下を欠く短頸壺である。口縁端部を面取りぎみにおさめている。色調は灰色で、焼成は良い。444は脚裾部が大きく開く高杯形器台の脚部片である。端部の近くに1条、裾部に2条1単位のにぶい突帯を巡らせており、この間にややみだれた櫛描波状文を施している。複数の方形スカシ孔を穿つものであろう。色調は灰色で、器体の一部に緑色の自然釉がかかる。焼成は良好である。

440は底部を欠損した土師器碗と思われるが、ミニチュアの甕の可能性もある。口縁部は外上方に直線的に伸びる体部から水平に開く。器体の内外面の調整はナデである。色調は黄橙色で、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。

437は口径24.2cmに復元された韓式系土器甕である。底部を欠くが、最大径は体部の中ほどにあり、ここにスリットを入れた角状の把手を内側から挿入している。器体の外面は細筋の縄文タタキで整形しており、口縁部の内外面の調整はヨコナデである。体部の内面には炭化物が付着している。色調はにぶい黄橙～褐灰色を呈しており、胎土中に微細な長石・石英・シャモット粒を含む。

以上の遺物のうち、須恵器類はTG232～ON231型式に属するものと思われる。これらに伴出した

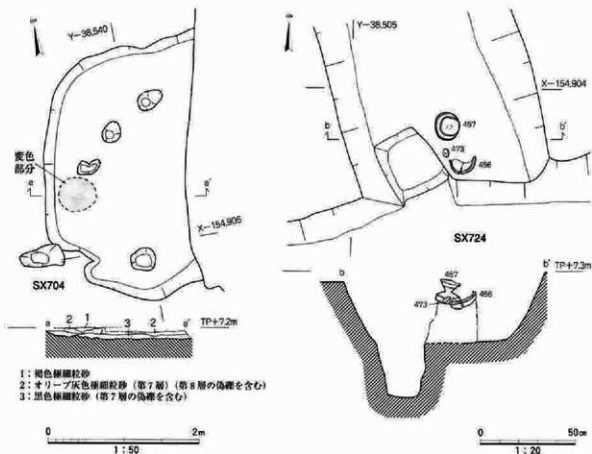


図76 SX704・724実測図

土師器や韓式系土器についてもⅠ期前半に属する一括資料とみて問題ないものであろう。

480～482は同一個体とみられる弥生土器壺の体部片で、混入品である(図版38)。間隔の広い横方向の直線と、狭い縦方向の直線を組み合わせた線刻が施されており、絵画の可能性もある。胎土中には長石・チャート・石英粒などを含み、橙色を呈する。

SX704 SB702の南西に接して検出され、同遺構に切られる(図76)。南北3.32m、東西1.8m以上、深さ0.13mを測る浅い土壊状の遺構である。内部に小穴3個が検出された。埋土は、最下位に掘削時に形成された第7層の偽層を含む層(図中の3)があり、その上に第7・8層の混合土からなる層(同2)があった。2の層は人為的に整地されたものらしく、貼床の可能性がある。この層の上面で、遺構内の西側に直径0.45mほどの熱をうけて赤く変色した部分があった。これは竪穴住居SB701・702でみられたように竈が設置されていた場所を示しているとみられる。貼床や受熱部分の存在から考えて、この遺構も小規模な竪穴住居の可能性はある。土師器・須恵器片が出土したが、図化可能なものはなかった。

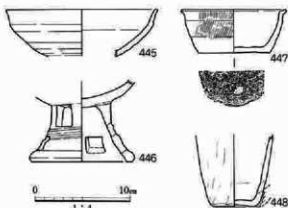


図77 SX706出土遺物実測図

SX706(445～448)

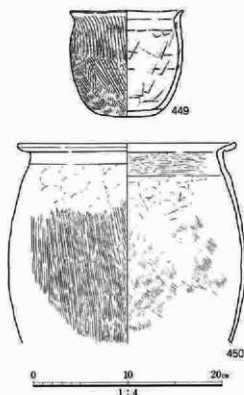


図78 SX718出土遺物実測図
SX718(449-450)

SX706 SB702・703の東から南にかけてを取巻くように延びる溝状の落込みである(図58)。SK705に切られる。幅は約2mで、深さは0.15～0.30mである。掘土の状況はSX702とほぼ同様で、掘削時形成層と機能時地積層が認められた。SB702との間には1.3～2.0mの帯状の空間があり、本来この部分にSB703の北側地層断面で見られたような盛土が施されたものと考えられる。SB702の南西では、SX702と本遺構がつながらず、空白部分が南西方向へ抜ける通路のようにになっている。おそらく、竪穴住居への入口として掘残されたのであろう。おもに埋土上層から土師器、須恵器、韓式系土器が出土した。

445(図77)は須恵器無蓋高杯の杯部で、口縁部は体部からわずかに開き、体部の外面をヘラケズリ調整している。446は杯部の大半を欠損した高杯である。脚部は裾部が開くもので、端部を丸くおさめている。脚部の中ほどを2条の突帯で上下に区画しており、ここに長方形スカシ孔を穿つ。色調は灰白色で、焼成は良い。器体の一部に灰

白色の自然釉がかかっている。形態や焼成、スカシ孔の形状などから、新羅の影響圏とみなされる洛東江東岸域に分布している三国時代新羅系の陶質土器に類似品がある。447(図版39)は口径11.0cm、器高4.6cmで、口縁部が短く開く杯である。体部外面の中ほどから口縁部にかけて平行タタキメが残る。底部を横方向の強いヨコナデで調整しており、その裏面には轆轤の下駄痕とみられる圧痕がある。色調は灰白色で、焼成は良い。器形や口縁部の形態は朝鮮半島の西南部地域に分布している三国時代百済の陶質土器に類似している。448は口縁部ならびに把手を欠損した碗で、器壁は薄い。体部の調整は外面が縦方向の強いナデ、内面は左上りのナデである。底部の設置面の近くを横方向にヘラケズリしており、裏面は浅く凹む。色調は全体に灰色を呈しているが、断面は赤灰色である。焼成は良い。445～448はTK73型式に属するものであろう。

SX718 調査区の東側、SB705の北で検出された(図73)。東西0.98m、南北0.34m、深さ0.16mの落込みである。土師器・弥生土器が出土した。

449(図78)は口径11.8cm、器高11.2cmで、口縁部は体部から短く開いた土師器平底鉢である。体部から口縁部にかけての外面の調整は縦および左上りの粗いハケで、内面は左上りのハケの後、ナデ整えている。色調は褐灰色で、胎土中に3mm以下の長石・石英・雲母粒を含む。I期後半に属するものである。

450は体部の下半以下を欠損した甕で、混入品と思われる。口縁部は頸部から「く」字状に開く。体部の調整は外面が縦方向のヘラミガキおよびユビオサエで、内面は左上りのハケ、頸部の内面は横方向のヘラミガキである。河内Ⅳ-1～2様式に属するものであろう。

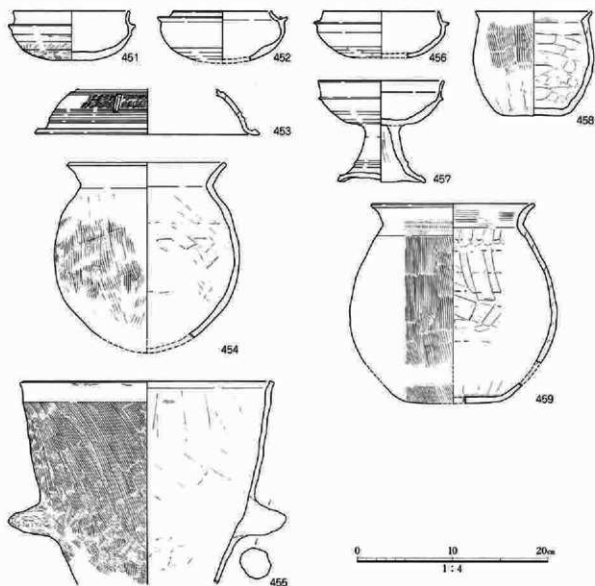


図79 SX721・724出土遺物実測図
SX721(451～455)、SX724(456～459)

SX721 調査区東側、SD705の東で検出された不整形の浅い落込みである(図73、図版15)。東西、南北ともに約2m、深さは0.10～0.15mで、北東に向って溝状の突出部がある。底面で5個の小穴が検出されたが、竪穴住居の主柱穴を構成するような分布を示していない。埋土はオリブ黒色シルトであった。内部から多くの土器が出土した。

451(図79、図版32・39)は口径12.2cm、器高5.2cmの須恵器杯身である。立上がりはわずかに外反して立ち、口縁端部は丸い。体部から底部の外表面を平行タキで整形している。底部は受け部から上部の厚みに対して厚い。452は内傾した立上がりの口縁端部を丸くおさめた杯身で、丸味をもつ体部の下半部をヘラケズリ調整している。453は裾端部が水平に開いた器台の脚部片である。裾部には2条1単位の突帯で区画した中に櫛描波状文を2条施した後、複数の長方形スカシ孔を穿つ。

454(図版32)は丸味のある体部から口縁部が外上方に開いた甕である。体部の調整は外面がタテハ

ケ、内面は左上りのハケの後、同方向のナデである。455(図版32)は体部の下半以下を欠損した甗で、口縁部は体部からわずかに開く。体部の調整は外面が左上りのハケで、内面は左上りのナデであるが、下半部に指頭圧痕が残る。体部の中ほどよりやや下がった位置に内面から角状の把手を挿入している。以上のうち、須恵器の色調は灰～暗灰色で、焼成は良い。土師器の色調は黄橙色で、胎土中に2mm前後の長石・石英・雲母・チャート粒を含む。須恵器、土師器ともにⅠ期後半に属するものであるが、452・453はTK216型式にやや先行する型式と考えられる。

SX724 調査区東部、SB705の北側で検出された(図76、図版15)。SD706・717に切られる。東西約1.1m、南北1.45m以上、深さ0.34mで、一部はさらに0.28m深くなっていたが、これは先行する別の遺構と思われる。埋土は黒色シルトで、埋土内上方から土師器、須恵器、土製紡錘車473(図80)が出土した。

456(図79、図版32)は底部の中央を欠損した須恵器杯身である。立上りはわずかに内傾しており、口縁端部は丸い。体部の約1/2をヘラケズリ調整している。457(図版32)は口径13.0cm、器高10.8cmで、脚端部が焼ひずんだ須恵器無蓋高杯である。杯部の口縁部と体部の境界の突帯は明瞭で、体部の約1/2をヘラケズリ調整している。脚部は裾部が短く開いており、柱状部にはにぶい突帯が1条巡る。杯部と脚部は個別に作って接合している。458は口径12.0cm、器高11.1cmの土師器平底鉢で、口縁部は頸部から短く開く。体部の調整は外面がタテハケの後、下半部をユビオサエで整えており、

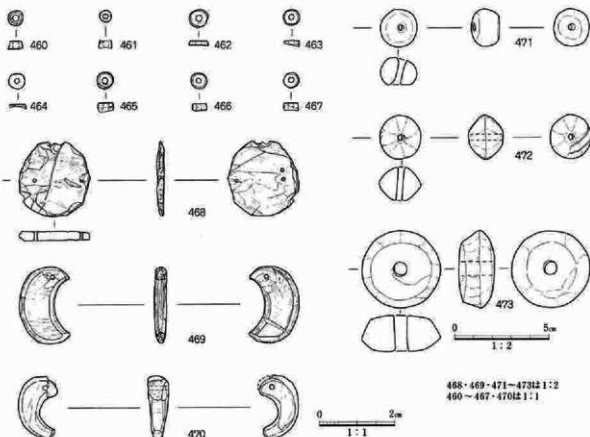


図80 古墳時代石製品・土製品実測図

SB701(461)、SB702(462)、SK705(463～467・470)、SX724(473)、SP735(472)

第6層下面溝状遺構(469)、第7層(460・468・471)

内面はユビオサエおよび左上がりのナデである。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。459は体部下半の一部を欠く平底の土師器甕である。口縁部は頸部から緩やかに開いており、体部の調整は外面がタテハケ、内面は左上がりおよび縦方向のナデである。頸部の内面には指頭圧痕が残る。色調は黄橙色で、胎土中に3mm以下の長石・石英・シャモット・黒色粒を含む。以上のうち、須恵器456・457はTK216型式に属するもので、土師器を含めて1期後半のものと考えられる。

(田中・高橋)

5) 石製・土製遺物(図80、図版39)

460～467は滑石製白玉、468は滑石製有孔円板、469・470は滑石製勾玉、471・472は土玉、473は土製紡錘車である。461はSB701、462はSB702、463～467・470はSK705、472はSP735、473はSX724からそれぞれ出土した。469は第6～1層下面で検出した飛鳥時代の溝状遺構から出土しているが、形態的には古墳時代の遺物であり、混入品と判断した。

白玉の形態は短小な円筒形で、側面をていねいに研磨するもので占められている。直径は3.5～5.1mm、厚さは1.2～2.4mmで、特に、SK705から出土した463～467は直径が4.3mm前後とほぼ同規模である。穿孔はいずれも片側から行われている。有孔円板468は直径約3.9cm、厚さ約0.5cmでほぼ正円に近い形態で、緑灰色の硬質な石材を用いている。側面を縦方向に細かな単位で削って整形しており、正円に仕上げようとした意図がうかがえる。離れた位置に2孔が同じ方向から穿たれており、一方の孔のそばには両面ともに穿孔途中の痕がみられる。勾玉469は頭部と尾部の先端が尖り、三日月状を呈する。濃緑色の硬質な石材を用いている。背側面を縦および斜め方向に削って面取りを行い、腹側面を横方向に研磨しており、板状の形態であるが丸く仕上げようとした意識は残っている。穿孔は両側から行われている。勾玉470はC字形を呈する小型品で、緑灰色の硬質な石材で、表面は光沢がある。平面・側面ともていねいに研磨しており、断面形も丸みを帯びている。穿孔は両側から行われている。

土玉471は球形、472は算盤玉状の形態で、ともに焼成は軟質である。472は孔を中心に放射状にミガキを加えている。紡錘車473は扁平な算盤玉状で、中央に0.65cmの軸孔を穿つ。焼成は良好で白褐色を呈する。

(大庭)

第4節 飛鳥時代以降の遺構と遺物

1) 耕作に係わる遺構

第6-1層を除去した段階で東西に延びるSD601とそれにほぼ直交するSX602、そして調査区ほぼ全域で無数の溝状遺構、円形の落込みSX617を検出した(図82、図版16・17)。

SD601 調査区西部で、約42mにわたって検出された(図82、図版16・17)。幅は0.60m-1.84mで、深さは0.36-0.42mである。埋土は第6-1層が再堆積したとみられる。砂粒混りの粘土-シルトで、常に滞水した状態で、周囲から徐々に土砂が流入して堆積したものとみられた。東方ではSX602に取付いて途切れていた。埋土の状況から、地下水位が高い水田や畠などの排水用として掘られた溝の可能性がある。内部から土師器、須恵器が出土した。

474(図81)は口頸部および底部を欠損した須恵器壺である。最大径は体部の中ほどにあり、これより上に同一原体による櫛歯波状文と刺突文を施している。色調は灰色で、焼成は良い。

475は体部の下半を欠損した土師器甔で、最大径は口縁部にある。口縁部は直立する体部から外反しており、内外面をヨコナデ調整しているが、粗いハケメが残る。体部の上半近くに内側から角状の把手を挿入している。色調は橙色で、胎土中に2mm前後の長石・雲母・チャート粒を含む。

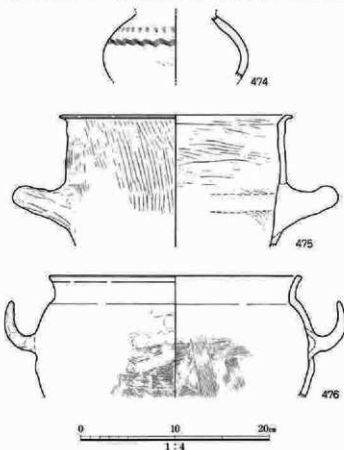
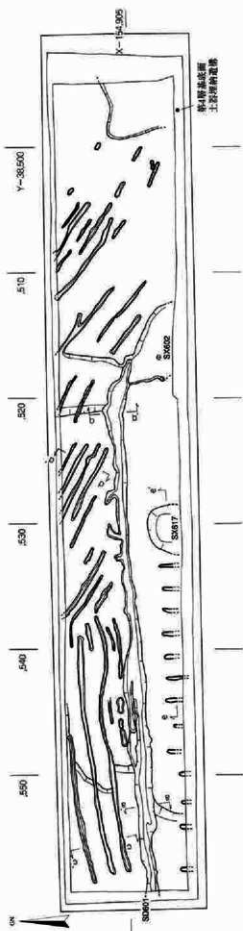


図81 飛鳥時代の遺構出土遺物実測図
SD601(474-476)

476は体部の下半以下を欠損した土師器鍋である。口縁部は内傾する体部から外上方に開いており、最大径は体部の上半にある。体部の調整は内外面ともにハケで、扁平な舌状の把手を体部の内側から挿入している。色調は褐灰色で、胎土中には3mm以下の長石・石英・シャモット・チャート粒を含む。須恵器474はⅠ期前半、土師器甔はⅠ期後半、鍋は難波Ⅲ頃に属するものであろう。

溝状遺構群 SD601・SX602の周辺、第6-1層の下面で無数の溝状遺構が検出された(図82、図版16・17)。幅は0.15-0.30mで、深さは0.1-0.2mほどであった。全長が明らかなもので約20mほどである。埋土はシルトを中心とした第6-1層で、下位の第7層の偽礫を含むものがみられた。1.0



0 10m
1:300

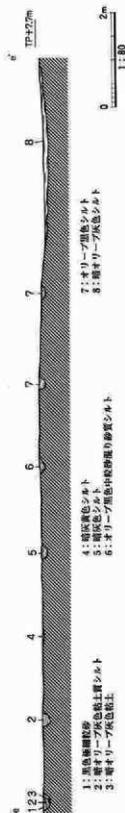
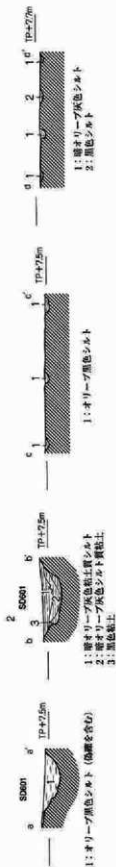


図52 飛鳥時代の遺跡断面図

～1.5mの間隔で3条から13条が平行して掘られており、方向の違いによってほぼ3群に分れる。調査区西端付近では第6-1層の作土層下に水成の第6-2層が耕起されずに遺存しており、溝状遺構はそれを切って掘られていた。第6-1層を作土とした耕作に係わる遺構とみるべきで、下面検出遺構であるので畝間ではない。耕作痕としては規則的すぎ、断面形も明瞭である。耕作前の地表は、長原遺跡東北地区で起こった洪水によって堆積したRK7A(i?)層につながる泥質の堆積物(第6-2層)によって覆われていたと考えられる。これを作土化する際に、砂質の下位層(第7層)を混ぜて作土の土質を調整した「土砂取り溝」[東大阪市文化財協会1996]とみるべきではなかろうか。

SX602 調査区東部で検出された溝状の落込みである(図82)。東西幅2.2～6.0m、深さは0.3mほどであった。埋土の状況はSD601と同様の泥質の堆積物で、堆積の過程で踏み荒らされた痕跡があった。土師器・須恵器片が出土した。

SX617 調査区中央部南壁際で検出された平面円形の浅い落込みである(図82)。東西は3.7mほどで、深さは約0.1mであった。埋土は暗オリーブ灰色シルトであった。SK705が埋没しきらずにできた窪みに泥質の堆積物がたまったものである。この埋土はRK7A層のうちの1層である可能性が高い。

2) 土器埋納遺構

土器埋納遺構 調査区東側の南壁沿いの第4層の基底面で検出された(図82・83、図版17)。土師器杯が3枚重なって出土し、掘形は断面観察でも確認することはできなかったが、出土状況から土器埋納遺構と判断した。

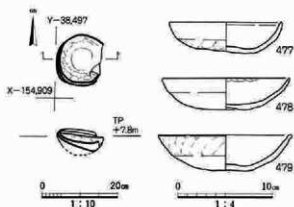


図83 土器埋納遺構・出土遺物実測図
土器埋納遺構(477～479)

埋納遺構と判断した。

477～479は土師器杯である(図83、図版38)。口径は477が11.9cm、478が13.5cm、479が14.2cmである。477・478は内面と外面上半をナデで仕上げている。479は内面をナデ、外面上半をユビオサエで仕上げている。いずれも平安時代Ⅱ期に属する。

(高橋)

第Ⅳ章 まとめ

前章までに述べたように、本調査地では、おもに縄文から平安時代までの遺構が発見された。まとめとして、検出された遺構・遺物が長原遺跡東地区の中で、あるいは遺跡全体の中で如何なる位置を占めるのかを整理してみたい。

1) 縄文時代

本調査では、LC1101・1102の石器集中部2箇所が検出された。LC1101からは後期初頭の中津式とみられる土器の細片が、LC1102からは前期の羽島下層Ⅱ式の土器の細片が出土した。両遺構ともに出土した石器遺物には接合関係があり、この場所で石器の製作が行われたことはまちがいない。長原遺跡東地区での縄文時代の石器製作址は、本調査地の南約500mのNG89-85次調査で、後～晩期のものが発見されている。東・東北地区ではこのように沖積平野の地表下深くに縄文時代の遺構・遺物が埋没している地点が少なくない(図85)。周辺も含めて縄文時代の遺物が発見された地点を列举すれば、東地区ではほかにNG83-65次・92-97次・00-11次調査地、南に隣接する東南地区では、NG82-26次・94-4次、東に隣接する中央地区ではNG1次(31工区)・城山遺跡その2調査Fトレンチ、同遺跡その3調査のIトレンチ、そして、北に隣接する東北地区ではNG85-17・99-41次調査地などがある。縄文時代のこの周辺の地形環境は、台地と沖積平野の境目であることに加え、本調査地の北北東約400mのNG97-52次調査では、縄文海進最盛期に東北地区にまで海岸線が入り込んでいたこと

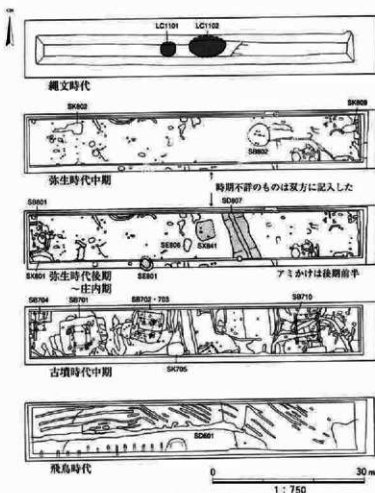


図84 各時期の遺構



図85 長原道跡東地区周辺縄文時代遺物発見地点

が確認されている[大阪市文化財協会2000]。このように変化に富んだ地形環境が、狩猟採集を基礎としたこの時代の生活にとって好適であり、上記のような多くの縄文時代遺跡の掘籠の地となったのであろう。いずれにせよ、縄文時代のこの地区周辺は分厚い河成層の堆積によって地形環境が大きく変わった時期であり、地形の変化も含めた総合的な遺跡の把握・理解が今後の課題である。

2) 弥生時代

弥生時代では、河内(以下同)Ⅳ様式段階の竪穴住居・井戸・土壙など、Ⅴ様式段階の竪穴住居・井戸・土壙・溝など、Ⅵ様式段階の竪穴住居・井戸・土壙などを検出した。これらからみて、本調査地が弥生時代の中～後期の居住域内にあったと考えられる。時期的にはⅤ様式後半の遺構・遺物は極端に少ないが、そのほかの時期のものは多い。

Ⅳ様式段階の居住域は戸出自然堤防とした微高地上に展開し、北北西に長軸をもつ約700m×300mの規模をもつとみられる(図86)。墓域は、居住域の北北東の亀井遺跡との間に方形周溝墓群(城山その1調査地)、南東のはずれ近くに方形周溝墓群(NG95-35調査地)がある。居住域の外縁を取巻くように墓域が営まれたものとみられる。また、居住域の南東、瓜破台地の縁辺部にかけては、土器製作用の粘土を採掘したとみられる夥しい土壙群が発見されている[京嶋寛1991]。

上記弥生時代中期の居住城の景観はV様式古段階までは基本的に変わらなかったとみてよい。しかし、注意すべきは、V様式段階になると居住域内に幅3～4mで深いV字形の断面をもつ溝がめだつようになることである。本調査のSD807はそのよい例で、北東約50mのNG16次調査のSD05と規模や断面形で酷似し、同時期の遺物が出土していることから一連の溝と考えられる。両者は直角に近い角度をもっており、なんらかの区画をなしていたように考えられる。同じような溝は居住域南方のNG92-39・95-35次調査地、西側のNG1次・城山その2調査E・Fトレンチ、などでも発見されている。これらは居住域の外縁を画するというよりは、その内部を画する状態で発見されている。さらに、埋土に顕著な流水の痕跡が見られないことから、農業用などの水路とは考えにくい。とすると居住域の内部を何かの秩序によって区画しようとする意図を反映しているとみるべきで、この地に居住した集団の内部で一種の構造の変化が生じたことを物語っているのかもしれない。

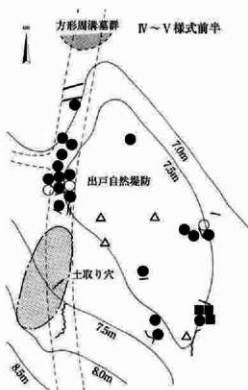
一方、方形周溝墓などの墓葬はV様式段階になるとほとんどみられなくなる。少なくとも居住域の周辺には築かれていないようで、同時期の方形周溝墓は西北西に約1.2km離れた喜連東遺跡で発見されている[平田洋司2000]。この方形周溝墓については、その造営集団を何処に求めるかは不明であるが、そもそもこうした墓制が少ない時期にありながら、大きな規模をもち、隣接した集落がないことから、この地域の複数の集落の上に立つ首長の墓であったのかもしれない。

居住域の南西に見られた土取り穴群はV様式段階にも継続しており、その分布をやや南西に変えている。

V様式の新段階～庄内式の段階になるとこのような集落の景観は大きな変化をみせる(図86)。遺構の分布は本調査地を中心とした東西約200mほどの範囲に限られるようになり、前段階に比べるとその規模は劇的に縮小している。また、墓域は再び居住域の外縁に築かれるようになったようで、本調査地の南東のNG84-6次調査地、同東側のNG2次調査地で庄内期の方形周溝墓が発見されている。土取り穴群も若干数が発見されているに過ぎない。この時期、長原遺跡北地区[大阪市文化財協会1999a]、長原遺跡の西に接する瓜破遺跡の西部[UR88-5次調査[大阪市文化財協会1989d]]、同南東に接する八尾南遺跡でもV様式の新段階に始まる比較的小規模な居住地が見つまっている[京嶋1991]。前段階までの出戸自然堤防上の集落が解体してこれらの小集落に分散したのとも考えられよう。庄内期の後、古墳時代前期を通じてこの地に人間の残した諸活動の痕跡は見られなくなる。長原遺跡の集落との系譜関係は不明であるが、この間の集落遺構は、本調査地の北方約2kmの久宝寺・加美遺跡周辺に濃厚に分布している。

3)古墳時代

出戸自然堤防上に再び居住地が営まれるようになるのは、本調査地でも多くの遺構が発見された初期須恵器が伴う古墳時代中期になってからである(図86)。西側のNG1次・城山その2調査地ではこの時期の居住に関する遺構はあまり検出されていないので、V様式の古段階以前の居住域よりはやや小さく、東に偏する傾向があるものの、北北西方向を主軸に約700m×200mほどの広がりをもつと推定される。この時期の集落は、出戸自然堤防のものを最大かつ中心として、その東～南の沖積平野



- = 住居・井戸など
- = 方彩周溝墓・古墳
- = 土器棺墓
- = 溝
- ~~~~ = 流路
- △ = 遺物多数
- ≡ = 水田



図86 弥生時代中期から古墳時代中期の出戸自然堤防

に比較的小規模な分付的集落5～6個所が衛星的に展開する構造をもっている。この時期の集落出土の遺物の特徴としては、前章で触れたように、朝鮮半島の影響を受けた土器が多いことが挙げられる。

墳墓は、南～西の瓜破台地上と自然堤防北側の城山その1調査地などを中心に、発見総数200基を超える長原古墳群が築かれる。長原古墳群の造営母体を長原遺跡内の集落に求めるか、あるいはもっと広い地域の複数の集落に求めるかは今後の重要な問題である。居住域南西の土取り穴群はこの時期には存在しない。農業生産に関する遺構としては、居住地の北側の城山その2調査Dトレンチで水田が発見されているが、居住域の規模を考えればその数・面積は非常に小さい。

古墳時代中期集落の造営は須恵器が定型化する時期を待たずに終了する。かわって西約700mの瓜破台地を中心とした地域に居住域が出現する。これは出戸自然堤防上の居住域と時期的に連続するものであり、集落が西の高地へ移動したものと想定される。この原因については[高橋1999a]で、須恵器が定型化する時期に長原遺跡東北区で頻発した洪水の影響を考えた。その詳しい状況は同書を参考にしてほしいが、本調査地に関しても、SB702・703を取巻く溝状の落込みSX702に堆積した薄い水成層やSK705を最終的に埋没せしめた水成層は、その洪水による堆積層(RK7A層)の縁辺部分と考えられるのである。最終的に瓜破台地上の集落も古墳時代後期の中葉には衰微し、長原遺跡には再び遺構や遺物が見られない時期となる。

4) 飛鳥時代以降

本調査地では飛鳥時代になると、景観は一変して農耕関係の遺構が検出された。SD601は埋土の堆積状況からみて排水用の溝とみられた。耕作地に排水用の溝が掘られるということは周辺が低湿地化したことを反映していると考えられ、前代までの居住に適した微高地という地形環境に変化が生じたとみべきである。その原因としては、東北地区で古墳時代中期後半から飛鳥時代にまで断続的に発生した洪水が考えられる。

この時期、長原遺跡では、瓜破台地の高所までが人工水路を伴う水田として開発される。これを可能にしたのは古市大溝に代表される「国家主導型」とも呼ばれる広範な水路整備であったと考えられる。長原地域の開発を管理した集団の拠拠地と目される建物群は瓜破遺跡東南部で見つかっている。一方、台地上の水田開発に呼応して低地の沖積平野側でも水田の開発が始まり、古墳時代中～後期に形成された六反自然堤防などに開発の担い手の居住地とみられる集落が進出してきている。これらの現象は、飛鳥時代に行われた、小地域を超えた広範な土地開発行為の一環と考えられる。この間の様相も[高橋1999a]に詳しいので参照されたい。

以後、古代・中世を通じて昭和に至るまで、本調査地を中心とする長原遺跡東地区は一貫して農地として利用されてきたのである。

以上不十分ながらも、本調査検出の遺構・遺物と長原遺跡東地区・長原遺跡全体との係わりについて事実関係の整理を試みた。上述の諸現象の史的評価・解釈が欠落しているが、それは今後の課題とし、機を改めて再考してみたい。

(高橋)

引用・参考文献

大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』

- 1979、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG16次）報告書』
- 1980、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG20-1）略報』
- 1981a、『瓜破北遺跡』Ⅱ
- 1981b、『大阪市下水管渠築造工事（押入口）に伴う長原遺跡発掘調査（NG80-1）略報』
- 1982、『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 1983a、『八百氏邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査概要』
- 1983b、『近畿財務局公務員宿舍建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG82-26）略報』
- 1983c、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG82-48）略報』
- 1984a、『大阪市平野区長吉、八尾市若林地区電力供給用送配電路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG83-11）略報』
- 1984b、『増田邸賃貸住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG83-41）略報』
- 1984c、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG83-54）略報』
- 1984d、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG83-63）略報』
- 1984e、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG83-65）略報』
- 1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG84-4）略報』
- 1985b、『長原出戸下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG84-6）略報』
- 1985c、『吉内仁平氏による店舗付住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG84-17）略報』
- 1985d、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG84-49）略報』
- 1985e、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG84-86）略報』
- 1986a、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-17）略報』
- 1986b、『大同ドリンコ倉庫兼事務所建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-18）略報』
- 1986c、『城下マンション（仮称）建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-23）略報』
- 1986d、『大同ドリンコ倉庫兼事務所建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-35）略報』
- 1986e、『馬々脇マンション建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-46）略報』
- 1987a、『城下マンション（仮称）建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-16）略報』
- 1987b、『モービル石油中環長吉給油所改築に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-20）略報』
- 1987c、『城下邸擁壁工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-24）略報』
- 1987d、『長吉長原地内下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-55）略報』
- 1987e、『地下階段建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-56）略報』
- 1987f、『長吉長原地内下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-66）略報』
- 1987g、『長吉長原地内下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG86-79）略報』
- 1988a、『下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-8）略報』
- 1988b、『安和産業（株）による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-26）略報』

- 1988c、『松野マンション建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-56）略報』
- 1988d、『長吉中学校体育館増築に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-67）略報』
- 1988e、『タツミ開発（株）による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-70）略報』
- 1988f、『堀内清司氏による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG87-81）略報』
- 1989a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1989b、『森義雄氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG88-18）略報』
- 1989c、『長吉長原2丁目における遺構確認調査（NG88-41）略報』
- 1989d、『村山一友氏によるマンション建設工事に伴う瓜破遺跡発掘調査（UR88-5）略報』
- 1990a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1990b、『東野充氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG89-5）略報』
- 1990c、『東野稔氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG89-25）略報』
- 1990d、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG89-85）略報』
- 1990e、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG89-86）略報』
- 1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992c、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1992d、『村山一友氏による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査（NG91-63）略報』
- 1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ
- 1993c、『長吉長原東市営住宅（第2期）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG92-39）略報』
- 1993d、『長吉長原東市営住宅（第3期）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG92-97）略報』
- 1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
- 1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 1996、『大阪市都市整備局による長吉長原東住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG95-36）略報』
- 1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ
- 1997b、『大阪市都市整備局による長吉長原東第2住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG96-103）略報』
- 1999a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
- 1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅢ
- 1999c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅣ
- 1999d、『平成10年度長吉東部地区土地区画整理事業に伴う長原遺跡発掘調査（その1）（NG98-19）略報』
- 1999e、『平成10年度長吉東部地区土地区画整理事業に伴う長原遺跡発掘調査（その2）（NG98-20）略報』
- 2000、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅹ
- 2001a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ

- 2001b、『平成12年度長吉東部地区土地面整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査（NG00-6）完了報告』
- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
- 2002b、『大坂城跡』Ⅴ
- 2002c、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅹ
- 大阪文化財センター1978、『長原』
- 1986、『城山』その1～3
- 大庭重信1999、『弥生時代中期前葉の水田とその経営主体』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.97-100
- 京嶋寛1990、『水田遺構と古代の長原』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294-306
- 1991、『群衆土壌の性格と意義』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.135-149
- 1993a、『古墳時代後中期の土器の変遷』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.269-276
- 1993b、『5・6世紀の集落構造の復元とその特質』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.241-258
- 桜井久之1991、『長原40号墳の形象地輪』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査』Ⅳ、pp.192-210
- 佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 2000、『古代難波地域の土器様相とその史的背景』：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265
- 鈴木秀典1982、『瓦器輪の編年』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査』Ⅱ、pp.278-282
- 高井健司1990、『黒斑をもつ円筒埴輪の一例』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.285-293
- 高橋工1999a、『長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期から飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-122
- 1999b、『長原遺跡東北地区の基本層序』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.7-16
- 龍野市教育委員会1995、『尾崎遺跡』Ⅱ、p.84
- 田中清美1999a、『SE703出土韓式系土器と土師器の編年の位置づけ』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.101-106
- 1999b、『河内高周辺における弥生文化の着床過程』：『突帯文と逢賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 田辺昭三1966、『出土遺物の検討』：平安学園考古学クラブ編『陶器古窯址群』Ⅰ、pp.35-58
- 1981、『須恵器大成』角川書店
- 趙哲済1995、『長原遺跡の標準層序』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.19-34
- 寺沢薫・森井貞雄1989、『河内地域』：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 水耳社、pp.41-146
- 東大阪市文化財協会1996、『北島遺跡の耕作地跡と古環境 一寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書一』
- 平田洋司2000、『喜連東遺跡発見の墳丘墓』：『兼火』87号、pp.2-3

- 八尾市教育委員会1983、「八尾南遺跡発掘調査概要報告」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告2、pp.110-126
- 1993、「木の本遺跡（92-70）」：『八尾市内遺跡・平成4年度発掘調査報告書Ⅱ』（財）八尾市文化財調査報告28、pp.38-40
- 八尾市文化財調査研究会1985a、「八尾南遺跡発掘調査概要報告」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告6、pp.17-89
- 1985b、「八尾南遺跡（第4次調査）」：『昭和59年度 事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告7、pp.13-23
- 1987、「八尾南遺跡（第6次調査）」：『昭和61年度 事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告14、pp.25-28
- 1988、「八尾南遺跡（第7次調査）」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）八尾市文化財調査研究会報告41、pp.115-177
- 1989、「八尾南遺跡（第11次調査）」：『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25、pp.151-157
- 1990、「八尾南遺跡（YS89-16）」：『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28、pp.32-33
- 1993a、「ⅩV 竹洞遺跡（第3次調査）」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』、pp.179-190
- 1993b、「八尾南遺跡第18次調査（YS92-18）」：『平成4年度 八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.40-42
- 1994a、「八尾南遺跡第10次調査（YS87-10）」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告40、pp.83-108
- 1994b、「Ⅷ 八尾南遺跡（第19次調査）」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告43、pp.101-110
- 1996a、「2. 跡部遺跡第12次調査（AT93-12）」：『平成5年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.12-14
- 1996b、「八尾南遺跡（第22次調査）」：『八尾市文化財調査研究会報告』54、pp.87-99
- 吉村睦志1998、「古代軸研究20年」：『歴史民俗学』No.9、批評社、pp.59-71
- 2001、「初期須恵器軸の施軸技法」：『韓式系土器研究』Ⅷ、韓式系土器研究会、pp.13-26
- 米田敏幸1989、「土師器の編年 1. 近畿」：『古墳時代の研究』6、雄山閣、pp.19-33

あ と が き

長原遺跡発掘調査報告のシリーズも本書をもって第8冊目を数える。すでに20冊近くが刊行されている長原・瓜破遺跡発掘調査報告シリーズが瓜破台地上を主な舞台にしているのに対し、本シリーズは広い長原遺跡の全域を守備範囲にしている。長原遺跡の東地区は台地から沖積平野への境目に位置し、協会発足の間もない頃から、弥生時代中・後期や古墳時代中期の遺物が多数出土して注目を集めてきた。しかし、大規模な発掘が行われる機会がなく、その集落の実態像になかなか迫れないでいた。そんな状況も、10年少し前から市営住宅建替関連の発掘調査が始まり、徐々に変わってきており、弥生・古墳時代集落の中心部分での調査も行われた。本書収録の調査成果はその1つで、その遺構・遺物は東地区の遺跡の特徴をよく代表している。

とはいうものの、両時代集落の全体像やその歴史的評価、そして渡来系遺物の詳細な系譜的位置付けなど、掘り下げなければならない課題は多く残されたままである。また、縄文時代の石器製作址も検出されたが、ほかの調査例も合わせ考えると、意外にこの時代の遺構・遺物も豊富に発見されるのではないかという予想も成り立つ。

とまれ、弥生・古墳時代の集落の中心がこの東地区にあったことはほぼ確実であり、この地区の総合的理解は長原遺跡そのものの評価に直結すると思われる。今後とも調査・残された課題について真摯に取り組んでいきたい。

高橋 工

索引

〈遺構・遺物に関する用語〉

I	I期前半	16, 26, 82, 84, 97, 103, 108
	I期後半	16, 26, 82, 97, 101, 104, 106~108
T	TK73型式	82, 98, 101, 104
	TK216型式	16, 81, 101, 106, 107
	TG232型式	102
O	ON46型式	101
	ON231型式	102
い	生駒西麓(産)	23, 24, 36, 40, 43~46, 48, 51, 52, 56, 60, 64, 67~69, 71~72
	石庵丁	77
う	白玉	82, 87, 107
え	円盤充填法	60, 64
か	河内Ⅳ様式	25~27, 38, 45, 46, 51, 67, 68, 71, 74, 104
	河内Ⅴ様式	24, 26, 36, 40, 42, 48, 58, 64, 66, 67, 71, 72
	河内Ⅵ様式	67, 71
	庵	23, 80, 82, 103
	韓式系土器	17, 23, 26, 81, 82, 87, 90, 91, 94, 95, 97, 98, 101, 103, 104
き	北白川上層Ⅱ式	26, 33
さ	削器	32, 74
し	縄文タタキ	24, 91, 94, 101, 102
	庄内(式・期)	24, 25, 36, 40, 43~45, 60, 67, 69, 70~72, 87, 97, 112, 113
	初期須恵器	7, 27, 80, 113
す	水平剪断	12
せ	製塩土器	87, 90, 95, 97
	石鎌	78
	石鏃	77

	石鏃	74~77
	尖頭器	74, 77
そ	搔器	74
た	叩き石	78
	堅穴住居	35, 36, 38, 72, 80, 82, 86, 98, 101, 103~105, 112
	短形銅片	30, 32
つ	土取り穴	9, 113, 115
て	底部輪台技法	42
と	砥石	81
	陶質土器	7, 17, 22, 101, 104
	土砂取り溝	110
	土製紡錘車	106, 107
	土玉	107
な	中津式	26, 29, 111
	長原式土器	10, 27
	難波Ⅲ	15, 16, 108
	難波Ⅳ	15
ぬ	布握り	87
は	羽鳥下層Ⅱ式	26, 29, 111
	貼床	80, 82, 84, 86, 103
ふ	太型蛤刃石斧	78
	布留式	23, 44, 95
	分割成形技法	42
へ	平安時代Ⅱ期	15, 110
	平安時代Ⅲ期	15
	ベンガラ	22, 91
ほ	方形周溝墓	112, 113
	掘立柱建物	80, 87
ま	勾玉	87, 107
ゆ	有孔円板	107
よ	横形銅片	30, 32, 33, 74, 77

〈地名・遺跡名など〉

あ	跡部遺跡	5, 6
う	植松遺跡	5, 6

瓜破遺跡 5, 113, 115
 瓜破北遺跡 67
 瓜破台地 4, 5, 6, 112, 115
 お 老原遺跡 5
 大坂城跡 22
 尾崎遺跡 (龍野市) 22
 か 加美遺跡 113
 亀井遺跡 5, 6, 112
 亀井自然堤防 4, 6
 伽耶 17
 河内台地 4
 き 木の本遺跡 5
 久宝寺遺跡 5, 113
 喜連東遺跡 5, 113

く 百濟 101, 104
 し 渋川庵寺遺跡 5
 城山遺跡 7, 9, 36, 111~113,
 115
 新羅 104
 た 太子堂遺跡 5
 竹園遺跡 5, 6
 て 出戸自然堤防 5, 6, 9, 33, 85, 112,
 113, 115
 な 長瀬川 4
 長原古墳群 6, 115
 ひ 平野川 4, 5
 や 八尾南遺跡 5, 113
 ら 洛東江 104
 ろ 六反自然堤防 115

**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume VIII

**A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal House complex
in 1999**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SX : Other features

LC : Lithic concentration

NR: Natural stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara Site	1
S.1 Background and Progress of the excavation	1
1) Background of excavation	1
2) Progress of excavation	2
S.2 Geographical setting and Previous investigation	4
1) Geographical setting and historical background	4
2) Previous investigation of the Nagahara site at the eastern sector	6
Chapter II Stratigraphy of the site	11
S.1 Stratigraphy of the site	11
S.2 Artifacts and dating of each stratum	15
1) Artifacts from staratum 2-4	15
2) Artifacts from staratum 6	15
3) Artifacts from staratum 7-1	17
4) Artifacts from staratum 7-3	25
5) Artifacts from staratum 8 and below	26
6) Dating of each stratum	26
Chapter III Research results from each period	29
S.1 Features and artifacts of the Jomon Period	29
1) Lithic concentrations	29
2) Lithic artifacts	30
3) Natural stream	33
S.2 Features and artifacts of the Yayoi Period	34
1) Buildings	35
2) Wells	38
3) Pits	45
4) Ditches	51
5) Other features	67
6) Lithic artifacts and stone objects	74
S.3 Features and artifacts of the Kofun Period	79
1) Buildings	80
2) Pits	87
3) Ditches	97
4) Other features	101
5) Stone and clay objects	107
S.4 Features and artifacts of the Asuka Period and later	108
1) Agricultural features	108
2) Hoard of pottery	110

Chapter IV Conclusion	111
1) The Jomon Period	111
2) The Yayoi Period	112
3) The Kofun Period	113
4) The Asuka Period and later	115
References and Bibliography	116
Postscript and Index	
English Contents and Summary	

ENGLISH SUMMARY

Introduction: background and progress

This report details the results of an excavation conducted at the eastern sector of the Nagahara site, situated at the Hirano ward, in the south-eastern part of the Osaka city, Osaka prefecture, Japan. The project was carried out from June to November in 1999, prior to the development of the municipal house complex in the area. Until now, over 20 excavation projects have been conducted in the Nagahara site at the eastern sector, this is the first report of the area.

The Nagahara site at the eastern sector and the previous investigation

The eastern sector of the Nagahara site, situated north-eastern side of the Uriwari terrace, located at the transitional area between terrace to alluvial plane. Previous investigation have been revealed the small highland formed by the river floodings during the Jomon period. And then, in the middle Yayoi period, the settlement and graveyard had been emerged on that highland. During the middle Kofun period, the settlement located at the area. After the Kofun period the area had been cultivated continuously.

Although the site attracted the attention of archaeological researchers, particularly the pottery artifacts dating to the middle Kofun period have been seen important. Because the pottery, including which represent the influences from the southern part of the Korean peninsula, have been regarded as crucial evidence to detect the relationship Japanese archipelago with the Korean peninsula, and the cultural changes during that period.

Overview of the research results

During this excavation, the features and the artifacts covering the Jomon to Asuka period and later were found. The following are the outline of main results.

Jomon Period

Two lithic concentrations were revealed, including flakes and cores made of Sanukite. Some pieces of them are joined together, which suggest the lithic tool production had been carried out.

Yayoi Period

During the middle and late Yayoi period this area had been the settlement and graveyard.

In the latter half of the middle Yayoi period, pit-dwellings, wells, pits and jar burials were detected. The pit-dwellings are circle shape in plan with drainage ditch. Pottery artifacts have been excavated from the wells and pits. Jar burials are consisted of the pottery converted from the daily use to the funeral purpose, bowl to the lid, and pot to the body.

In the former half of the late Yayoi period, wells, ditches and pits were excavated. The ditches are V-shape in section and 1.3~1.4 m in deep, which divided the inside of the settlement. The same type feature had been to be popular at the site during this phase. A lot of pottery associated together have been excavated, it will be helpful materials to conduct the chronological study of the Yayoi period pottery in Kawachi area.

During the latter half of the Late Yayoi period, pit dwellings, wells and pits were found. The pit-dwellings are square shape in plan. The quantity and density of the features and artifacts had been decreased than previous phase.

Kofun Period

Pit-dwellings, post hole type buildings called *hottatebashira-tatemono*, pits and ditches dating to the middle Kofun period were revealed. The pit-dwellings are square shape in plan, which had been rebuilt at the same place several times. Post hole type buildings include the one which have ditches for post hole construction, without pits. Pottery artifacts and beads were recovered from the pits, it appears to have ritual purposes. The artifacts including which is similar to the objects from Gaya (加耶), Baekje (百濟) and Silla (新羅), which will be crucial evidence to examine the origin of the immigrant and the cultural influences from Korean peninsula.

Asuka Period and later

The area had become swampy during the Asuka period, utilized as agricultural area. Two types of ditches relating field cultivation were found. The former are considered to drain the cultivation soil, the latter are presumed to dig and mix up the surface clay soil with the sandy soil beneath the surface to improve the soil for cultivation.

Conclusion

With the results of this research work, we can reveal the outline of the history at the eastern sector of the Nagahara site archaeologically.

After the formation of the highland during the Jomon period, this area had been the settlement area until the Kofun period, particularly as the central part of the settlement. In addition to this, the structure of the settlement have been detected, along with the research results of the surrounding area.

During the Asuka period and later, the landscape is presumed to had been completely changed. The topography had become low and swampy, because the flooding of the river occurred frequently in and around the site, mainly at north-eastern side. And then, the area had been utilized for agricultural production continuously until Pre-Modern times.

Further Reading

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1999 *Archaeological Reports of the Nagahara Site* Vols. I-VII, Osaka.
(In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1989-2001 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari Sites* Vols. I-XVII,
Osaka. (In Japanese, with English summary)

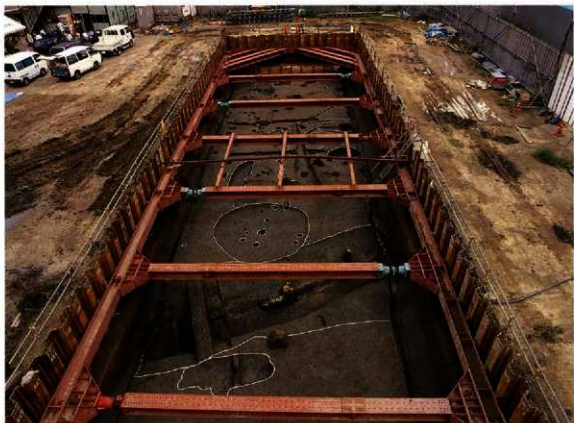
Osaka City Cultural Properties Association

1998-2001 *Archaeological Reports of the Eastern sector of the Nagahara Site*
Vols. I-IV, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきはつつちようさほうこく8						
書名	長原遺跡発掘調査報告書						
副書名	市営長吉長原東住宅建設に伴う発掘調査報告書						
編集者名	高橋工・田中清美・池田研・京嶋覚・大庭重信・絹川一徳・宮本康治						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2002年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 道路番号					
ながはらいせき 長原遺跡	おおきせしひらひく 大阪市平野区 ながよしながはらいせき 長吉長原東1丁目8	27126 ー	34° 36' 00"	135° 34' 40"	NG99-15次 19990603~19991105	840㎡	市営長吉長原東住宅の建設に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
長原遺跡		縄文時代	石器集中部		縄文土器・サヌカイト剥片		
	集落	弥生時代	竪穴住居・井戸・溝・土壇		弥生土器・石器		
	集落	古墳時代	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土壇・耕作溝		土師器・須恵器・韓式系土器		
	畠	飛鳥時代	土器埋納遺構		土師器・須恵器		
		平安時代			土師器		

原色図版



弥生時代の遺構(西から)



SK705(西から)



弥生時代の土器



古墳時代の土器

圖 版

調査区西部(南壁)



調査区中央部(南壁)



調査区東部(南壁)





調査区西部(南壁)



調査区中央部(南壁)



調査区東部(南壁)

調査区全景(東から)



LC1101(南から)



LC1102(南から)





調査区西部(南から)



SB801(東から)



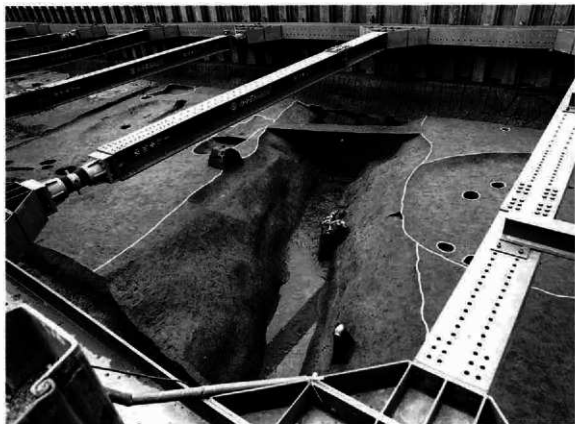
SK802(西から)



調査区東部(南西から)



SB802(南から)



SD807(南東から)



SD807埋土断面(南東から)

SE803(北東から)



SE805(北東から)



SE801(北東から)





SE801(北から)



SK809(南から)



SK805(南西から)

SX821(西から)



土器棺墓
(検出状況、南から)



土器棺墓(蓋を外した
状況、南から)





調査地中央部(南から)



調査地東部(南から)

SB701 (北から)

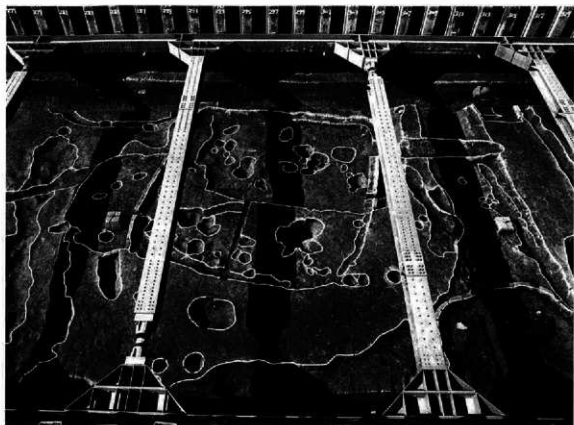


SB701竈・煙出し検出
状況 (南から)

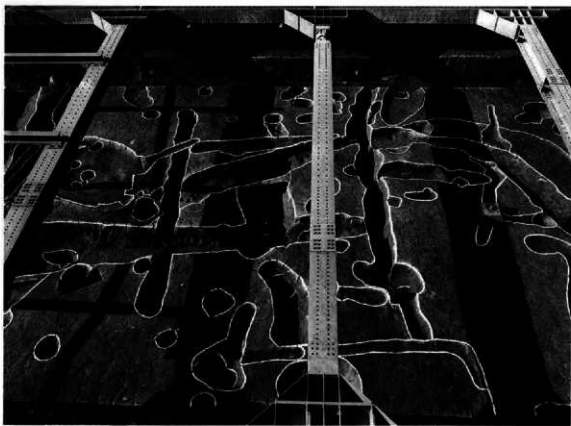


SB701竈検出状況
(西から)





SB702・703(南から)



SB710(南から)

SK705(北から)



SK705(南から)



SK705(東から)

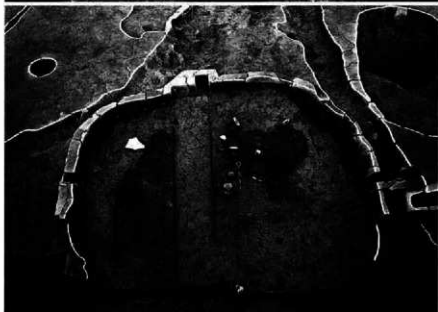




SK705遺物出土状況
(西から)



SK705遺物出土状況
(北東から)



SK705発掘状況
(南から)

SX724(南から)



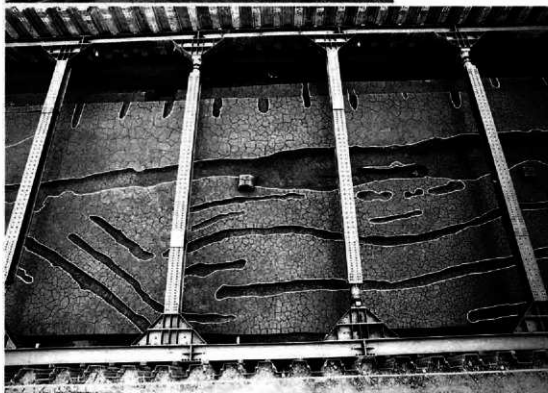
SX724(西から)



SX721遺物出土状況
(北から)



調査区全景(西から)



SD601等(北から)

SD601(東から)



SD601埋土断面
(西から)



土器埋納遺構(北から)





JAA-1



JAA-3



JAA-2



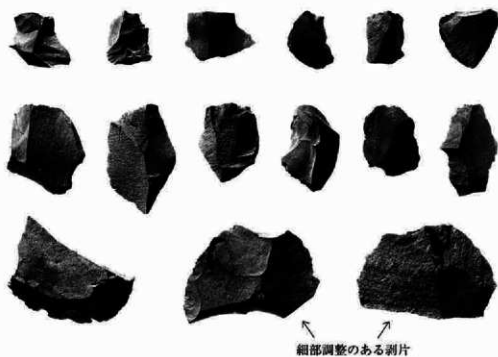
JAA-4



JAA-5



JAA-6



剥片表面



剥片裏面



179



135



328



169



329



194



188



189



316



139



190



315



165



182



157



154



155



158



152



151



142



140



144



244



248



245



143



229



230



251



242



263



260



259



261



303



256



254



268



279



269



264



266



271



280



289



299



300



296



238



304



231



285



302



295



214



218



217



219



224



211



292



206



220



325



227



311



321



204



203



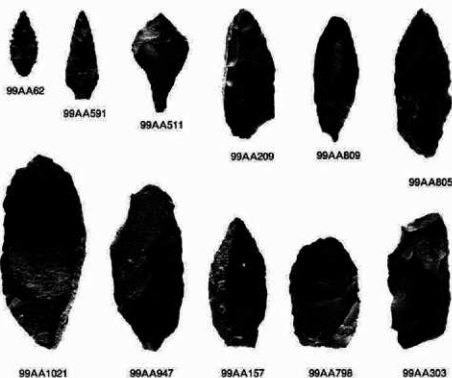
195



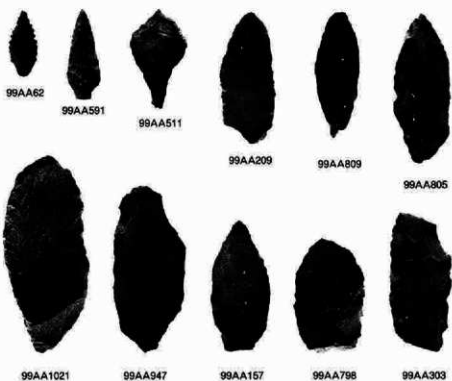
150



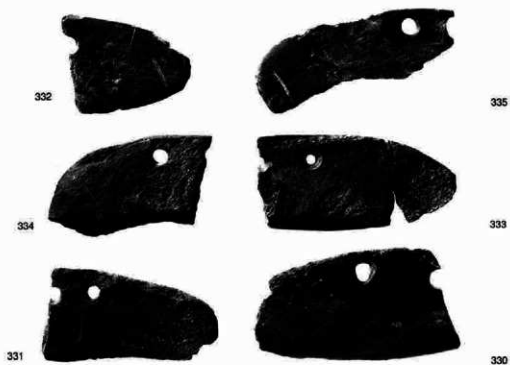
320



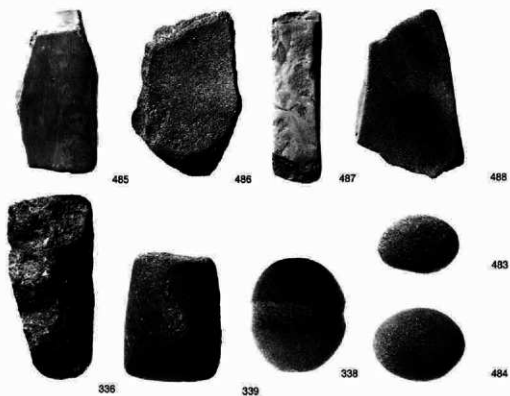
石器遺物(表面)



石器遺物(裏面)



石庵丁



古墳時代砥石(485~488)、弥生時代石斧(336・339)、弥生時代石錘(338)
弥生時代叩き石(483・484)



346

441



347

340



342

343



429



421



451



456



433



457



424



430



454



455



362



349



352



363



350



356



358



357



382



383



381



387



407



409



391



392



396



388



395



390

SK705 (388・390～392・395・396)



96



97



93



92



94



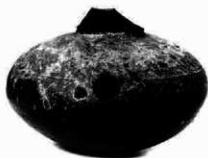
398



394



399



53



81



40



69



66



422



116



109



405



393



479



89



478



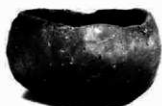
480

481

482



477



387



118



124



130

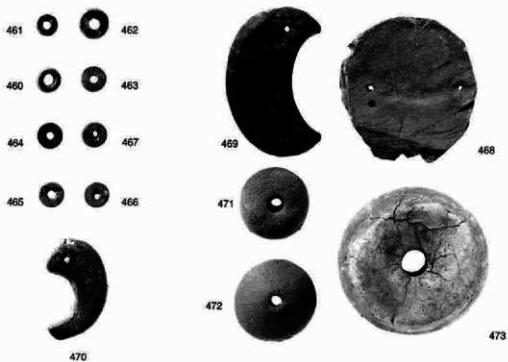


489

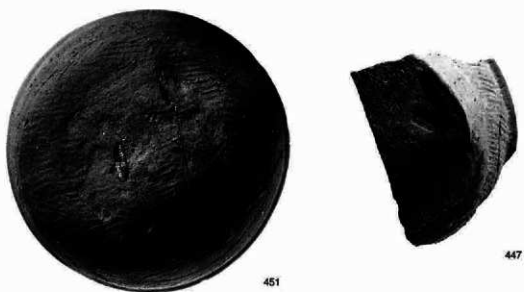


126

SX702(481-482),SK705(387-393)、土器埋納遺構(477-479)、第7-3層(130)、
第7層(118・124・126・489)、第6-1層(89)第6-8層(480)



古墳時代石製品・土製品



須恵器細部

大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅷ

ISBN 4-900687-58-8

2002年3月31日 発行

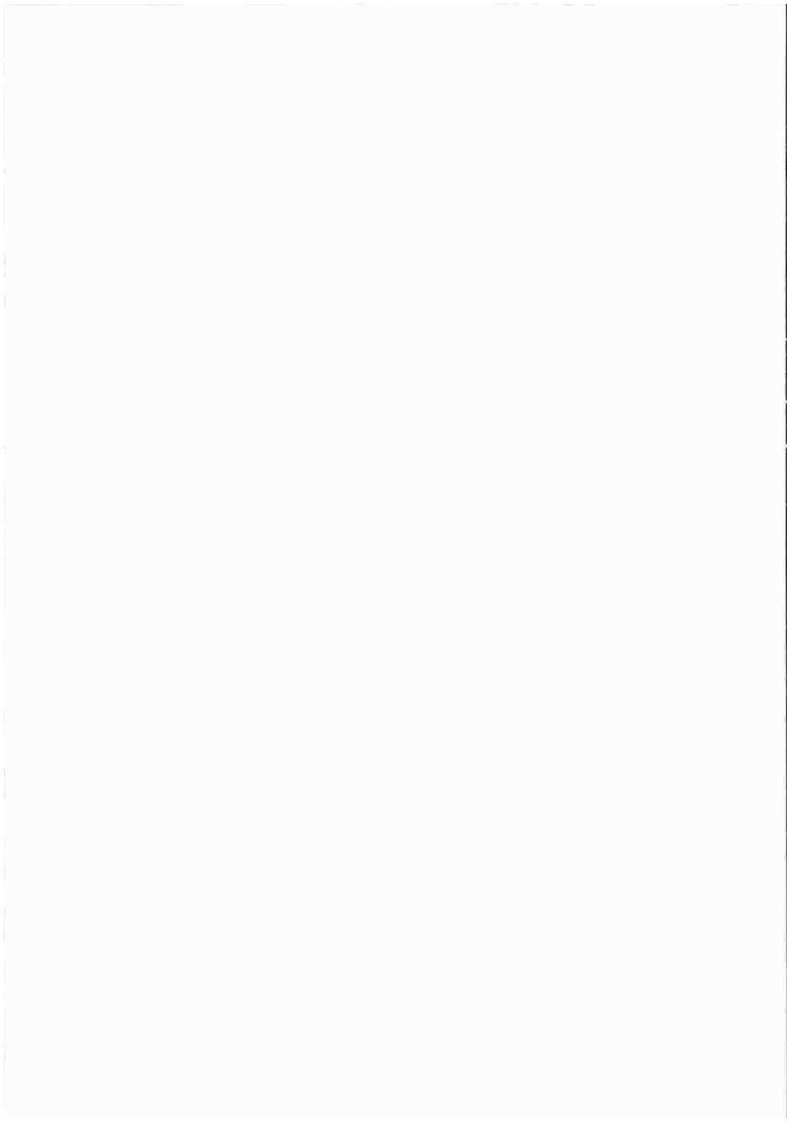
編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会 ©

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区長居東3-4-17



**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume VIII

**A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 1999**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume VIII

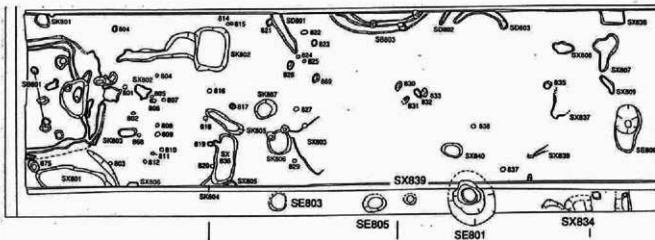
**A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 1999**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

【長原遺跡発掘調査報告】Ⅶ 正誤表

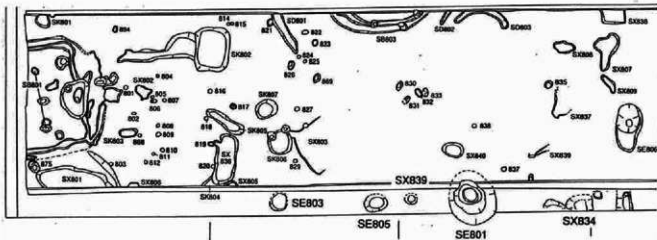
頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	〔大阪市文化財協会1999〕	〔田中清美1999a〕
105	10行目	塞である	土師器塞である
112	8行目	V模式後半	Ⅵ模式
113	1行目	V模式古段階	V模式
113	18・24行目	V模式新段階	Ⅵ模式





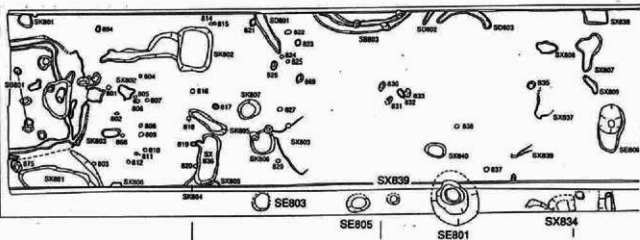
「長原遺跡発掘調査報告」Ⅶ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	[大阪市文化財協会1999]	[田中清美1999a]
105	10行目	夷である	土師器夷である
112	8行目	V様式後半	Ⅵ様式
113	1行目	V様式古段階	V様式
113	18・24行目	V様式新段階	Ⅵ様式



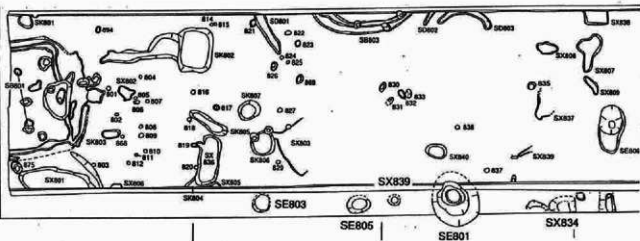
「長原遺跡発掘調査報告」Ⅶ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	[大阪市文化財協会1999]	[田中清美1999 a]
105	10行目	竈である	土師器甕である
112	8行目	V様式後半	Ⅵ様式
113	1行目	V様式古段階	V様式
113	18・24行目	V様式新段階	Ⅵ様式



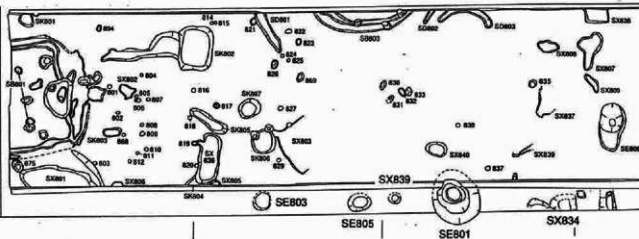
「長原遺跡発掘調査報告」Ⅶ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	[大阪市文化財協会1999]	[田中清美1999 a]
105	10行目	壺である	土師器甕である
112	8行目	V様式後半	VI様式
113	1行目	V様式古段階	V様式
113	18・24行目	V様式新段階	VI様式



【長原遺跡発掘調査報告】Ⅷ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	[大阪市文化財協会1999]	[田中清美1999 a]
105	10行目	夷である	土師器夷である
112	8行目	V様式後半	VI様式
113	1行目	V様式古段隆	V様式
113	18・24行目	V様式新段隆	VI様式



「長原遺跡発掘調査報告」Ⅶ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
34	図19中	(遺構番号脱落)	下図太字遺構番号を追加
95	31行目	[大阪市文化財協会1999]	[田中清美1999a]
105	10行目	夷である	土師器夷である
112	8行目	V様式後半	VI様式
113	1行目	V様式古段階	V様式
113	18・24行目	V様式新段階	VI様式

